

博士論文
「慶長小袖」の成立に関する史的研究

日本女子大学大学院
人間生活学研究科生活環境学専攻

莊加 直子

目次

第1章 序論

第1節 本研究の目的と方法	1
第2節 「慶長小袖」の概要	2
第3節 先行研究について	4
(1) 研究史	4
(2) 「慶長小袖」について	5
1) 昭和戦前期の先行研究	
2) 昭和戦後期・平成期の先行研究	
第4節 「慶長小袖」における解明すべき問題点と本論文の構成	10

第2章 いわゆる「慶長小袖」と、実際に慶長年間に製作されたと考えられる小袖

第1節 はじめに	14
第2節 いわゆる「慶長小袖」の実作品（小袖）	14
(1) 地色による分類	14
(2) 過渡期とされる染織品	17
(3) まとめ	17
第3節 「慶長小袖」の江戸時代の呼称とされる「地無」と「繡箔」	17
(1) 「地無」と「繡箔」という言葉の先行研究の検討	17
(2) 江戸時代前期における文献上の「地無」と「繡箔」	18
1) 『雁金屋資料』	
2) 『色道大鏡』	
3) 『萬の文反古』	
(3) 江戸時代中期・後期の文献上の「地無」と「繡箔」	25
1) 『むかしむかし物語』	
2) 『譚海』	
3) 『近世奇跡考』	
4) 『近世風俗志（守貞謾稿）』	
(4) 近代の染織史研究における「地無」と「繡箔」	28
1) 大正期の研究	
2) 昭和戦前期の研究	
3) 昭和戦後期・平成期の研究	
(5) まとめ	31
第4節 実際に慶長年間に製作されたと考えられる小袖	32
(1) 明治時代以降の文献などで慶長年間の製作とされる染織品	32

(2) 慶長年間に製作されたと考えられる小袖	35
(3) 慶長年間に製作されたと考えられる小袖裂	37
第5節 まとめ	51
第3章 近代染織・服飾研究史と「慶長小袖」の成立	
第1節 はじめに	55
第2節 明治時代の東京における染織・服飾研究史	56
(1) 染織・服飾研究のはじまりと定着	56
1) 九鬼隆一と小杉楹邨	
2) 好古社	
3) 集古会	
(2) 東京における染織・服飾研究の慶長頃の染織品について	70
(3) まとめ	74
第3節 明治時代の京都における染織・服飾研究史	74
(1) 京都の美術研究における染織品について	
一明治時代の京都美術協会の活動を中心に	74
1) 京都美術協会の活動について	
2) 「新古美術展覧会」について	
3) 「第5回内國勸業博覧会」と「古美術展覧会」	
4) 京都の染織・服飾研究について－『京都美術雑誌』、『京都美術協会雑誌』、 『京都美術』における染織品の紹介について	
(2) 京都における染織・服飾研究の慶長頃の染織品について	83
(3) まとめ	85
第4節 大正時代の染織・服飾研究史－研究者の視点	86
(1) 東京の研究者の視点	86
(2) 京都の研究者の視点	87
第5節 大正時代の染織・服飾研究史－研究者以外の視点	89
(1) コレクターの視点－野村正治郎の出版物の中で検証された「慶長小袖」	89
(2) 呉服製作に関わる人たちの視点	91
1) 田村春暁と「慶長小袖」	
2) 岸本景春と「慶長小袖」	
(3) まとめ	115
第6節 昭和から平成の「慶長小袖」	115
(1) 昭和戦前期の研究者とコレクター	115
1) 明石染人	
2) 永島信子	

3) 吉川観方	
4) 関保之助	
(2) 「慶長小袖」という言葉の誕生	121
(3) 昭和戦後期の染織・服飾研究と「慶長小袖」	125
(4) 平成の染織・服飾研究と「慶長小袖」	127
第7節 まとめ	130
第4章 結論	140
図版一覧	148
参考文献一覧	151
謝辞	158

第1章 序論

第1節 本研究の目的と方法

先行研究において小袖様式の一つとされる「慶長小袖」という言葉の「慶長」は年号と直接の結びつきはなく慶長年間(1596～1615)の製作を意味するものではないとされながらその用語の解明はなされていない。現状では、「慶長小袖」の定義を含む詳細についてはほとんど未解明である。それだけでなく、「慶長小袖」についての定義が定まっていないため、「慶長小袖」という用語が指し示す染織品は研究者によりまちまちである。

筆者の研究対象である松坂屋コレクション²の重要作品のひとつである「慶長小袖」の「重要文化財 染分縷子地御所車花鳥文様繡箔小袖」(図 1-1)は松坂屋内では淀殿(生年不詳～慶長 20 年(1615)所用の小袖として伝えられてきた。しかし、平成 23 年(2011)、国の重要文化財に指定された際に、「慶長小袖」は慶長期に製作され着用されたものではないので、「いわゆる慶長小袖」であり、淀殿とはかかわりが無いと学識者からご教示いただいた。「慶長」という元号が様式名称に付けられているにも関わらず、元号とはかかわりが無いという不可解な研究現状に疑問を知り、この疑問を解明したいと考えるようになった。

そこで、本研究では、明治時代以降に、染織・服飾と呼ばれる分野の研究がどのように生み出され、現在にいたっているのかということを検証し、その概観を捉える。その上で、「慶長小袖」という小袖様式の概念がどのように始まり成立していったのかについて明らかにすることを目的とする。

研究方法は、明治期から現在までにいたる関連分野の研究書、定期刊行物、新聞、官報、社史、展覧会図録・作品集、講演記録、講義集、染織品を掲載した図書など約 2,000 点に当たり、関連記事を収集し、分析をおこなった。



図 1-1 重要文化財 染分縷子地御所車花鳥文様繡箔小袖 松坂屋コレクション

第2節 「慶長小袖」の概要

現在、染織史や服飾史の分野において、「慶長小袖」と呼ばれる染織品は、綸子地で、黒・紅・白に染分け、金摺箔と刺繍、鹿子絞りなどの技法を用いられて製作された小袖類を指す³。典型的な「慶長小袖」の一例として、「重要文化財 染分綸子地御所車花鳥文様繡箔小袖」(図 1-1)がある。この小袖は、また、この地色の 3 色の中の 2 色あるいは 1 色のものも「慶長小袖」に分類されることがある。小袖の形態の「慶長小袖」の現存例は少ないものの裂の形のものも現存しており、それらを含めると「慶長小袖・裂」に分類される染織品の現存品は約 50 点である。

また、一方で、先行研究においては、桃山時代の小袖から「慶長小袖」への過渡期の染織品として、単色の練緯の地の染織品が紹介されることが多い。たとえば、「重要文化財 紫地段花菱円文散草花模様縫箔小袖」 平野美術館蔵(図 1-2)のような染織品である。これは、河上繁樹の作品解説によれば、現在は、茶色に見えるものの本来は紫であったとある⁴。また、「三龍胆車に草花文様振袖」(法隆寺蔵) (図 1-3)のように、地色が黒のものも、現存している。この 2 点の地は練緯である。また、黒、黒紅、紫の練緯の地の裂が各所に保管されており、過渡期とされることもあるが、「慶長裂」として紹介されることもある。



図 1-2 重要文化財紫地段花菱円文散草花模様縫箔小袖
平野美術館蔵 京都国立博物館寄託



図 1-3 三龍胆車に草花文様振袖 法隆寺蔵 写真提供:便利堂

図 1-2、図 1-3 のような染織品は、ながらく、過渡期の染織品とだけ紹介されてきたが、澤田和人は平成 20 年(2008)に国立歴史民俗博物館において開催された「[染]と[織]の肖像—日本と韓国・守り伝えられた染織品」という展覧会⁵で「慶長小袖」の製作時期について、新たな知見を見出し、発表した。この中で澤田は、慶長 8 年(1603)の銘のある練緯地の「菱鶴丸草花模様等古幡残欠」(図版 1-4)を指し示し、「慶長裂」と呼んでいる⁶。



図 1-4 菱鶴丸草花模様等古幡残欠
称名寺蔵(神奈川県立金沢文庫保管)

以上のように、現在、「慶長小袖」という語の定義をめぐって、学界内に共通認識がなく混乱状況にあると言える。

よって、「慶長小袖」については大きく2つの視点で検証しなければならないと考える。現在、「慶長小袖」と呼ばれる綾子地の3色に染め分けられた染織品がいつ、だれによって「慶長小袖」と名づけられ、どのように学術用語として定着していったのか。そして、澤田和人の論考による、黒の練緯の地の染織品が慶長期の染織品であったのであれば、そもそもの慶長年間に製作された染織品と、現在の呼称による「慶長小袖(裂)」とは大きく異なり、言葉の誤用が生じていることとなる。この矛盾は本稿における重要な課題であり、この用語の誤用を含め、「慶長小袖」という概念の成立について解明したいと考える。

第3節 先行研究について

まず、先行研究については、明治時代を含めた近代日本染織・服飾研究史がどのように検討され論じられてきたのかということが重要であると考え。そしてその研究史のなかで「慶長小袖」がどのように取り扱われ、「慶長小袖」という言葉が認識されてきたのかを考察する。その為、先行研究については「研究史」と「慶長小袖」にわけ論じていく。

(1) 研究史

『日本衣服史』のように太古から明治時代までに着用された衣服の変遷を紹介する文献は多くあるものの、染織・服飾の研究史や発達史について書かれた文献は少なく、書籍名称に研究史と

あっても内容は変遷史であることが多い。そのような中で、昭和 8 年(1933)に和田辰雄により『日本服装史』⁸がだされ、この中に「研究方法」、「服飾研究の沿革」について書かれている。和田辰雄がどのような立場で研究をしていたのかがわからないので、掘り下げることが難しいが、戦前に服飾の研究について、考察されていることが確認できる。それ以降については、研究史についての研究を見出すことはできなかった。

しかし、21 世紀に入り、明治時代以降の染織・服飾の研究史についての研究がおこなわれるようになった。そのはじまりは、おそらく、森理恵の「「キモノ美人」成立過程についての研究―日本美術史(染織史)」の形成と日本画、和装界の動向―」⁹であろう。そして、小山弓弦葉の「染織文化史の夢と嘘 言説された／描かれた 染織のオーセンティシティ」¹⁰や『辻が花』の誕生 〈ことば〉と〈染織技法〉をめぐる文化資源学』¹¹が挙げられる。また、友禅染についての近代の虚像がどのように作られていったのかについては丸山伸彦が『江戸モードの誕生 文様の流行とスター絵師』¹²で、述べている。そこで、研究史に焦点をしぼり、先行研究の検討を試みる。

森理恵は研究史について、明治時代以降に①古代染織・風俗の研究、②近代染織技術・産業の研究、③公家装束及び有職織物の研究、④能装束研究、⑤名物裂研究があり、大正年間に始まる⑥近世の風俗および「女のキモノ」研究、戦後の⑦武家の染織と大きく 7 つのくくりで研究が発達してきていること¹³を論じている。

一方、小山弓弦葉は、「辻が花」をキーワードに、どのように染織研究史が発達したのかについて、明治・大正・昭和と時代毎に述べている。小山は論考のなかで、「美術史という研究分野の枠組の中で、染織史という分野がいつから始まったのかを明確に述べることは難しい」¹⁴としつつも、明治 33 年(1900)に東京国立博物館の前身である東京帝室博物館の組織編成について論じている。

東京帝室博物館では「工芸部」が廃止され「歴史」「美術」「美術工芸」「天産」の四部に改められる。染織については、名物裂や更紗、コブト裂などは「美術工芸」に区分されるが、明治十年に頒布された正倉院裂は歴史部第三区「奈良時代の遺物」に、装束や小袖類といった服飾の形態を持った古染織は歴史部第六区の「服飾」に分類されてきたように「美術工芸」としては認識されなかった。美術工芸部の第四区に織製品があり、第一類・紋綾、第二類・刺繍、第三類・友禅、印花、纈纈と分類されている。¹⁵

すなわち、明治 30 年代には、一定の研究蓄積があり、染織品の分類がなされたのではないかと考えられることを示唆している。

(2)「慶長小袖」について

「慶長小袖」についての先行研究が見られるのは、雑誌論文、小袖変遷を紹介する書籍、美術館・博物館の所蔵品紹介、あるいは展覧会図録である。展覧会図録などの出版物の多くでは、次のように紹介される。黒(黒紅)・白・紅で大きな区画を染め分け、綸子地で繡箔(すなわち刺繍と摺

箔)の技法を用いて製作されており、製作年代については江戸時代初期とされ、政治区分上の江戸時代初期である慶長期に製作されたものでも流行したものでもないという解説がつけられている¹⁶。また、前時代である桃山時代とは様式が大きく異なり、アシンメトリー(非対称)な構成と大きな模様表現、そして模様と空間の大胆な対置を特徴とする「寛文小袖」への過渡期に発生したといわれている¹⁷。

また、政治上と文化史上の桃山・江戸時代の区分については慶長期のとらえ方が異なる。政治上では、慶長 5 年(1600)徳川家康が実権を握る、慶長 8 年(1603)江戸幕府を開くという政治事項を前提に、時代区分をする。一方、文化史上は慶長(1596～1615)までを桃山時代に入れるとするのが一般的であるという¹⁸。

染織品においては着用者の銘記が無いものがほとんどであるため、時代判定が難しく、特に完品の少ない「慶長小袖」についての先行研究は工芸的な側面を考察し、検証している研究が多い。また、研究者も服飾の分野から美術史まで幅広く、多岐にわたっている。そこで、染織品の「慶長小袖」について「慶長」という言葉を使って書かれた先行研究について以下にまとめる。

1) 昭和戦前期の先行研究

日本女子大学の前身である日本女子大学校の卒業生である永島信子が昭和 8 年(1933)に『日本衣服史』¹⁹を出版し、その中に「慶長模様」を紹介したのが日本の衣服変遷を紹介し、その中で「慶長」という様式を紹介した初めてのものである。永島信子は図版 4 点を紹介しながら、慶長時代の模様の特徴として「今までありましたあらゆる模様をば、他のあらゆる輪郭内に配した事がありました」²⁰と述べ、今まであった模様を輪郭内においたことと、区画をまだ保っていることを述べている。

次に、昭和 10 年(1935)年、昭和 11 年(1936)に明石染人が「慶長」時代の染織品についての論考を発表している。1 つめは、昭和 10 年(1935)1 月 30 日に発刊された、『星岡』²¹という冊子の内の「慶長時代の染織を語る」²²である。『星岡』の発行元は星岡窯研究所で、所在地は神奈川県鎌倉郡深澤村山崎 2347 とある。内容は主に工芸分野から星岡茶寮での料理についてなどである。明石染人の論考には、慶長時代の染織の特徴について、模様染の方法は辻が花を改善してつくられた「帽子絞と稱する紫及び黒の絞染であつて、先づ地染を施し、絞つた白い個處に細線にて繪を描くもので、謂はば絞りと描繪との融合結合である。(これが、元祿絞の前驅をなす事は言ふ迄もない。)慶長末期となると、尚その上に刺繍が加つて、より一層技巧的になつてゆく」²³と書かれている。そして、「「慶長」と稱せらるるものの中には時代を少々下つた寛文頃の作品をも含んで居る事は研究者の注目を要する」²⁴と述べている。

翌年(昭和 11 年)、8 月 13 日に田中平安堂より製薬会社であるわかもとの創設者である長尾欽弥²⁵が所蔵する作品による『桃山慶長 緞繡精華』²⁶が出版された際、その序に明石染人は「桃山・慶長時代の緞繡を頌ふ」²⁷という論考を掲載している。その中で

たゞ茲に好事家に注意を促したいのは世俗『慶長裂』²⁸稱せられるものゝ中、技法、文様より見て

眞の慶長時代より少々時代が下つたものゝ類型的な作品、即ち寛文時代裂が多分に存在することである。慶長は桃山時代の直後の繼承であつて技工的には未だ完璧に達してゐない處に價値を認めなければならぬのである。

慶長時代裂の特徴は前述の如く絞染黒地—主として鐵槩媒染によるもの—に箔押し(又は箔置き、置き箔とも云ふ)を以て種々の模様を置いたものが多い、この技法は勿論桃山時代に端を撥し、明の印金法(支那では銷金と稱する)の轉用であつてこの時代に隆盛を極めたものである。この箔押しは型紙を用ひて文様の部分に下糊を塗り、未だ乾かぬ中に金箔を押して文様を出すのである。この上適所に刺繡を加へて効果を増してゐる。縫箔又は絞縫箔と云ふのがそれである。此種の遺品は今日緒家に多く襲藏されてゐるが何分にも當時黒染に用ひた鐵槩媒染が不完全であつたゝめ完存するもの稀れで、斷片が多く、しかも斷亂してゐるもの亦止むない事である。²⁸

と述べており、慶長裂の特徴は現在も言われている黒地であることを論じている。明石は桃山から慶長への文様様式や技法について深く考察をし、桃山と慶長、そして慶長のなかでも変化していることを見出している。さらに、「慶長小袖」と言われる小袖が、寛文頃までも含むことを示唆していることが特徴である。

2) 昭和戦後期・平成期の先行研究

太平洋戦争中には時代染織の研究が中断されていたが、戦後、再開され、東京国立博物館や京都国立博物館の染織工芸室を中心に研究がすすめられる。特に東京国立博物館では、昭和26年(1951)4月から東京国立博物館研究誌である『MUSEUM』という定期刊行物が現在まで発刊されている。その『MUSEUM』などを中心に、「慶長小袖」とは何かについて言及した研究を考察してみる。考察する先行研究は以下である。また、個々の展覧会の図録や所蔵品図録などは省く。

- ① 今永清士「重要文化財 染分四季花鳥模様縫箔小袖」²⁹
- ② 山辺知行「小袖染織における 地と文様について」³⁰
- ③ 北村哲郎「染織における江戸初期—慶長縫箔考—」³¹
「慶長小袖と寛文小袖—時代が生む様々な美—」³²
- ④ 徳蔵きみ「衣服の文様について(2)
—慶長小袖と寛文文様を中心として—」³³
- ⑤ 切畑健「元和・寛永銘小袖裂打敷(真珠庵藏)について
—江戸時代前期の染織資料—」³⁴
- ⑥ 河上繁樹「江戸時代前期の小袖—慶長小袖から寛文小袖へ—」³⁵
「慶長小袖の系譜—その成立と展開—」³⁶
- ⑦ 藤木悦子「桃山小袖から慶長小袖へ—その美意識の変遷—」³⁷
- ⑧ 山内まみ・片岸博子「慶長小袖に関する一考察」³⁸

⑨ 長崎巖「慶長小袖」³⁹

⑩ 丸山伸彦「慶長・寛文・元禄へと動く意匠」⁴⁰

「慶長小袖から寛文小袖へ—17世紀の服飾史における劇的な変化」⁴¹

⑪ 澤田和人「慶長小袖」の時代性—中国・韓国の染織品と比較して」⁴²

①今永清士は、「桃山時代の終り、慶長の末から江戸の初期にかけて一時非常に精緻な感じの小袖が現われた。俗に、これを慶長小袖と呼んでいるが、絞りと刺繍、それに摺箔で全面を隙間なく埋めつくし、一見、地が見えないくらいに模様が施されているので地無し小袖ともいわれている。地を渋い茶（黒紅）、紅、白と大きく絞りで染め分けて区劃を設け、茶地の部分は一面に細い摺箔を型置きし、紅、白の個所は風景、花卉、鳥などを鹿の子絞り、刺繍、摺箔で繊細緻密に現わしている」⁴³と述べている。さらに、桃山時代の小袖から慶長小袖への変遷は、表着となった小袖が、技術革新により、片身替りや肩裾模様と絵羽模様から、型にはまった物を脱し、不規則になって、区切りに絵画の要素を求め、空間を意識することになり生み出されていった一様式であると論じている。

②山辺知行は「桃山の終りから江戸初期にかけ、俗に慶長小袖といわれる独自のスタイルを持った小袖が現われる。地は黒、紅、茶などが多いが、完全な形をした小袖を見るとたいがい二色ぐらゐに地が絞り分けてあることが多い。そしてこれに細かい繡いで草花、松、鶴亀などが現わされており繡い以外の空間は細かい霞形の摺箔で一面おおわれている。この種の小袖を一名地無しと称するのも、絞りと繡と箔で裂地の全面が埋められて地が見えぬくらい詰っているという意味であろうか」⁴⁴と論じている。今永清士同様に、桃山の左右対称のスタイルから「慶長小袖」を通して「寛文小袖」に変遷していくことについては、「技術的に見れば絞りと繡と箔であり、辻が花の絞りと箔、縫箔の繡いと箔が姿をかえて現われてきたと考えても別に不思議はない」⁴⁵と述べて、前様式の辻が花と桃山繡箔の融合により、地無の大きな絞り染で刺繍と摺箔が一つになった慶長小袖と言われる様式が確立したと考察している。また、桃山様式との大きな違いである左右対称ではないことについても、模様の区画を重要視している桃山時代の染織品の特徴の中での精緻な刺繍の出現でその後の時代と区別している。

③北村哲郎は「一般の歴史において江戸時代は関ヶ原の合戦に徳川家康が勝利を得て、天下の権を握った慶長 5 年(1600)か、徳川家康が征夷大將軍に任ぜられ、江戸に幕府を開いた慶長 8 年(1603)をもって、はじまりとするのが普通である。しかし、前述のように染織史、服飾史を含めて、通常美術史にあつては、そうした政治史上の時代区分とは異って、慶長末年頃までを桃山時代の範疇に入れるのが通説であり、様式史的にはさらに下って寛永期に及ぶと考える見方もある。したがって、従来桃山とされてきた染織遺品の中にも大別すれば対照的ともいえる大きな相違のある二種の様式のものが存在することに気付かれるはずである。」⁴⁶と述べ、この大きな相違をもって「一つの時代様式として、全く時代を分けて考える立場もある。一般に慶長小袖あるいは慶長裂、慶長繡箔などと呼んでいるのは、この立場である」⁴⁷としている。その上で、北村哲郎は「慶長小袖とか慶長繡箔という呼称の慶長は年号とは関わりない通称であつて、必ずしも慶長年間の製作を意味するものではないが、江戸時代初期の特色ある一様式を示す言葉として、適切であると考えるので、通称をそのまま踏襲することにした。」⁴⁸と述べ、「慶長小袖」の「慶長」は通称であり、以前からこの

ような通称が存在し、そう呼ばれていたのが踏襲するという立場である。また、地色については、黒が主体で、紅あるいは白の使用⁴⁹について述べ、この要因を「鎖国という時代相をやはり現している」⁵⁰と述べている。

④徳蔵きみは、「慶長小袖」を刺繍と絞りそれに摺箔によって飾られたもので、このような小袖を一名「地無し」と呼んでいると述べ、時代については、桃山末期(1595)と江戸初期(1614(原文ママ))にまたがる二十年に満たない短い時期を慶長期と呼び、この間に「慶長小袖」と言われる独自の文様様式が出現したと論じている⁵¹。「慶長小袖」の「慶長」が慶長時代を示すという考え方を述べている珍しい論文である。引用などがこの「慶長小袖」について書かれた文章の部分に全くないため、どの研究者の考えを基盤に書かれた文章かを考察することはできないが、現実には、戦後の研究でもこの年号による名称という考え方が存在したということで先行研究に入れた。

⑤切畑健は、元和・寛永期の銘のある染織品での論考の中で、「染織の分野に限らず、その歴史的な展開をうかがうのに、例えばそのものに銘記があつて作期が知られる場合や、銘記はなくても確かに作期の押さえられる傍証がある作品によって、その展開の様相を考察するのが最も望ましいものであるのはいうまでもない。しかし、そのような条件をそなえた資料は少なく、それだけにまた作期を明らかにしようとするさまざまな方法が考えられて独自の考察が深まるのである。特に染織部門では右に述べた条件を満たす資料は、古代から近世におよぶ長い期間においても、わずかに指を折る程度である。中でも近世の作品にあつては現代に近い時点であり、しかも資料は比較的多量に遺存し、銘記などをもつものもまた多いと一般には考えよう。しかし、実際はそうではない。例えば、小袖様式のものに限っていえば、「慶長小袖」とよばれている、はなはだ特色のある染織品がある。それらを一応慶長期のものと考えて取り上げているが、しかし確かに慶長期に生まれたものであることを銘記などによって知ることはできない」⁵²と述べている。この論文で考察した「慶長小袖」の次の様式とされる元和・寛永期の打敷は銘記があるものである。その中で「慶長小袖(裂)」の生地・文様・彩色・絞染・摺箔について考察している。その中で一般的な「慶長小袖(裂)」について切畑健の述べた内容を抜き出すと、生地は綸子で卍字の線がのびやかで風合いが艶やかな光沢に富み文様の微細なことと、鹿の子絞りの比重がまだそれ以後にくらべ低いことや、摺箔が地無小袖といわれる要因であるように全面に施されていること⁵³などを紹介している。

⑥河上繁樹は「慶長小袖」は「慶長から寛永期ごろに現われた」⁵⁴としている。さらに、「小袖〈繡箔風景四季花文〉」を軸に、慶長小袖の特色を、生地が綸子であることと地色が黒・紅・白の三色で染め分けられ、その地染の区画が複雑な構成であることとしている。また、「慶長小袖」の定義を「生地の全面に摺箔・刺繍・絞りによる細かな模様が施されていることから俗に「地無し」小袖と呼ばれて(中略)「慶長小袖」という呼称についても、この呼称を冠する独特の様式をもった小袖が必ずしも慶長年間(1596～1615)に製作され、あるいは流行したものであるという確証はないのである」⁵⁵と論じている。

⑦藤木悦子は、「桃山小袖」を論じる中で「慶長小袖」への変遷について述べている。藤木悦子による「慶長小袖」は、慶長末年ごろから元和ごろとしながら、製作年についてはあきらかでないが、江戸時代初期の特色ある一様式⁵⁶としている。別名を「地無し小袖」とし、技法は絞り染め、刺繍、

摺箔を併用したものが多く、生地については綸子や紗綾、地色については黒を基調にし、地を黒、紅、白の三色に染め分けることを特徴にしていること⁵⁷を述べている。

⑧山内まみ・片岸博子は、「慶長小袖」の着用時期から名称をとって「慶長小袖」としながら、着用された時期は寛永期(1624～44)を中心に、慶長末から承応(1652～1654)に及ぶ間とも述べている⁵⁸。小袖の特徴を黒・紅・白の染分けに刺繍と摺箔としている。この論文では、「慶長小袖」は1590年頃から製作された南蛮漆器から影響を受けていると推測している。「慶長小袖」の着用年代については二説示しており、どの研究者の説を参考にしているかなどの注釈がなく、その点については考察ができなかった。

⑨長崎巖は慶長小袖の定義は、技法を摺箔と刺繍、特徴は「生地の地がみえないほどにぎつしりと模様が表されているものが多いことから、江戸時代には「繡箔小袖」あるいは「地無小袖」と呼ばれていました。実際には慶長の末年から元和・寛永期にかけて(十七世紀前半)さかんに着用されたと推測されており、必ずしもその名が示すように慶長年間(一五九六～一六一五)に流行したわけではありませんが、長らく慶長期に流行したと考えられてきたため、今でも慣習的に「慶長小袖」という俗称が使用されています⁵⁹と述べている。この中で、長らくという言葉がどれくらいの間なのかについては、検証できなかった。

⑩丸山伸彦は、「慶長小袖」が性差を表すようになった最初の小袖と論じ、生地が綸子や紗綾であること、また、身幅・袖幅などの形態変化と生地幅と裁断法の変化との関係について述べている⁶⁰。「小袖〈繡箔風景四季花文〉」については「文様は、余白に放出され、整然とした桃山の定型はゆるんで、動的な斜線や曲線が意匠の骨格をなしている。文様の均一的な配置も動揺して疎密の差が生まれ、文様間の平衡関係も崩れて、背中に大きくあらわされた桜樹のような自己主張の強いモチーフが登場している」⁶¹と述べ、「文様が染め分けの境界線を越えていないこと」⁶²を見出している。またこの意匠構成を「桃山期の小袖に通じる、写実に拘泥しない意匠構成によって、全体的には抽象的なイメージを強く打ち出した意匠」⁶³と述べている。「慶長小袖も、部分的には文様を充填した「地無」の形式を踏襲している」⁶⁴としている。

⑪澤田和人は、今までの先行研究で多く取り上げられた様式論に金糸という材料を加え考察を始めた論考であるだけでなく、中国や韓国などの染織品との対比という新しい視点が加えられている。それ以上に特筆すべきことは、それ以前の先行研究において論じてこられなかった墨書に慶長期の銘がある「慶長小袖(裂)」の染織品を明示し、「慶長小袖」の成立期についても言及している。

第4節 「慶長小袖」における解明すべき問題点と本論文の構成

先行研究をまとめてみると、文化史の桃山時代と江戸時代の捉えかたが政治史とは大きく異なるということは共通認識である。「慶長小袖」の一般的な定義は、地は綸子か紗綾で、紅・黒(黒紅)・白の地色の3色、あるいはその中の色を使用し染め分けること、鹿の子絞り、刺繍、摺箔の技法を使うこと、「慶長小袖」の製作・着用時期は江戸時代初期の慶長期ではないということであった。

そこに、近年、澤田和人による金糸の年代などを考察に加えた「慶長小袖」の成立期に関するあ

らたな論考が生み出された。澤田和人の指し示す慶長 8 年(1603)を下限とする「慶長小袖」の生地は練緯であり、その染織品の図版によると黒の一色に鹿子絞や刺繍や摺箔が技法に使われている。また、文様については、現在、「慶長小袖」と呼ばれる染織品と同様である。澤田和人の「慶長小袖」と、それ以前の先行研究の「慶長小袖」との違いは、生地が練緯であることであろう。練緯は多くの先行研究は、桃山時代の「辻が花」などに使用される生地であるとする。生地が違うといえども、澤田和人が指し示す、慶長年間の銘の染織品は、「慶長小袖」の様式を持ちえた染織品である。

また、「慶長小袖」について、いくつかの先行研究では江戸時代においては、「地無小袖」あるいは「繡箔小袖」と言われていたというが、いつ、だれが、染織品の「慶長小袖」と江戸時代の「地無小袖」、「繡箔小袖」と「慶長小袖」という言葉を結び付けたのかについても明らかにされていない。そして、「慶長小袖」という言葉が何時、発生したのかについても明らかにされていない。そのことこそが、現状の「慶長小袖」という言葉の指し示す内容が定まっていないことに繋がるのであろうと考える。

そこで、先行研究を検証し、導きだされた疑問点を挙げる。

- ・「慶長小袖」という言葉はいつ、だれが言い始めたのか？
- ・「慶長小袖」の江戸時代の呼称とされる「地無」・「繡箔」という言葉は本当に現在の「慶長小袖」なのか。
- ・「慶長小袖」と慶長年間とのかかわりはどのようなものなのか。
- ・「慶長小袖」を含む染織品の研究はどのように始まり、成立していったのか。

さらに、おそらく研究の基礎が形成されたと考えられる明治時代の染織・服飾研究についての十分な論考がない。

そこで、本稿では、解決すべき問題点を念頭に、「慶長小袖」の成立について、大きく二つの章にわけて論じる、第 2 章では、いわゆる「慶長小袖」と実際に慶長年間に制作されたと考えられる小袖を比較検討し、「慶長小袖」の概念について考察する。第 3 章では、染織品のいわゆる「慶長小袖」が研究史の中でどのように「慶長小袖」という言葉とむすびつけられたのかを、明治時代以降にだされた文献などを中心に時代をおって考察し、「慶長小袖」という概念が成立した過程を解明する。そして第 4 章を結論とする。

以上により、研究史において「慶長小袖」という染織品の概念がどのように興隆し、成立していったのかを解明したいと考える。

¹ 北村哲郎「染織における江戸初期—慶長繡箔考—」、『MUSEUM』、271 号、東京国立博物館、1973 年、4～13 ページ。

² 「松坂屋コレクション」とは、平成 22 年(2010)に閉鎖にした旧松坂屋京都染織参考館が収蔵していた染織品を、松坂屋創業の地である名古屋へ移管し、一般財団法人J.フロントリテイリング史料館と名古屋市博物館に分蔵した際につけられたコレクションの総称である。

-
- 3 河上繁樹 「江戸時代前期の小袖—慶長小袖から寛文小袖へ—」、『月刊文化財』、228号、第一法規出版株式会社、1982年、27～34ページ。
 - 4 京都国立博物館 『花洛のモード』、思文閣出版、2001年、433ページ。
 - 5 国立歴史民俗博物館にて2008年10月15日から11月30日まで開催。
 - 6 国立歴史民俗博物館 『[染]と[織]の肖像—日本と韓国・守り伝えられた染織品』、国立歴史民俗博物館、2008年、18ページ。
 - 7 増田美子 『日本衣服史』、吉川弘文館、2010年。
 - 8 和田辰雄 『日本服装史』、雄山閣、1933年。
 - 9 森理恵 「「キモノ美人」成立過程についての研究—「日本美術史(染織史)」の形成と日本画、和装界の動向—」、『イメージ&ジェンダー』、3、2002年、76～95ページ。
 - 10 小山弓弦葉 「染織文化史の夢と嘘 言説された／描かれた 染織のオーセンティシティ」、『美術フォーラム21』、6、2002年、128～135ページ。
 - 11 小山弓弦葉 『「辻が花」の誕生 〈ことば〉と〈染織技法〉をめぐる文化資源学』、東京大学出版会、2012年。
 - 12 丸山伸彦 『江戸モードの誕生 文様の流行とスター絵師』、角川学芸出版、2008年。
 - 13 森理恵 前掲註9、79～84ページ。
 - 14 小山弓弦葉 前掲註11、8ページ。
 - 15 小山弓弦葉 前掲註11、175ページ。
 - 16 丸山伸彦 「御所車花鳥模様小袖」作品解説、『小袖 江戸のオートクチュール』、日本経済新聞社、2008年、110ページ。
 - 17 丸山伸彦 「近世前期小袖意匠の系譜—寛文小袖に至る二つの系統」、『国立歴史民俗博物館研究報告』、第11集、1986年、195～224ページ。
 - 18 北村哲郎 前掲註1、4～5ページ。
 - 19 永島信子 『日本衣服史』、芸艸堂、1933年。
 - 20 永島信子 前掲註19、462ページ。
 - 21 明石染人 「慶長時代の染織を語る」、『星岡』、第51号、星岡窯研究所、1935年、4～5ページ。
 - 22 明石染人 前掲註21、4～5ページ。
 - 23 明石染人 前掲註21、5ページ。
 - 24 明石染人 前掲註21、5ページ。
 - 25 田中日佐男 「戦後美術品移動史(15)長尾美術館」、『芸術新潮』、新潮社、1974年、117ページ。
 - 26 明石染人 「桃山・慶長時代の緞繡を頌ふ」、『桃山慶長 緞繡精華』、田中平安堂、1936年。
 - 27 明石染人 前掲註26、序。
 - 28 明石染人 前掲註26、序。
 - 29 今永清士 「重要文化財 染分四季花鳥模様縫箔小袖」、『MUSEUM』、163号、東京国立博物館、1964年、26～28ページ。
 - 30 山辺知行 「小袖染織における 地と文様について」、『MUSEUM』、188号 東京国立博物館、1966年、24～28ページ。
 - 31 北村哲郎 前掲註1。
 - 32 北村哲郎 「慶長小袖と寛文小袖—時代が生む様々な美—」、『日本美術』、102号、日本美術社、1973年、108～109ページ。
 - 33 徳蔵きみ 「衣服の文様について(2)—慶長小袖と寛文文様を中心として—」、『茨城大学教育学部紀要』、第25号、茨城大学教育学部、1975年、151～157ページ。
 - 34 切畑健 「元和・寛永銘小袖裂打敷(真珠庵蔵)について—江戸時代前期の染織資料—」、

『MUSEUM』、376号、東京国立博物館、1982年、18～26ページ。

35 河上繁樹 「江戸時代前期の小袖—慶長小袖から寛文小袖へ—」、『月刊文化財』、228号、第一法規出版株式会社、1982年、27～34ページ。

36 河上繁樹 「慶長小袖の系譜—その成立と展開—」、『MUSEUM』、383号、東京国立博物館、1983年、4～15ページ。

37 藤木悦子 「桃山小袖から慶長小袖へ—その美意識の変遷—」、『福岡女子短大紀要』、34、福岡国際大学・福岡女子短期大学、1987年、11～24ページ。

38 山内まみ・片岸博子 「慶長小袖に関する一考察」、『日本服飾学会誌』、第5号、日本服飾学会、1986年、3～10ページ。

39 長崎巖 『きものと裂のことば案内』、小学館、2005年。

40 丸山伸彦 前掲註12。

41 丸山伸彦 「慶長小袖から寛文小袖へ—17世紀の服飾史における劇的な変化—」、『日本美術全集第12巻 江戸時代Ⅰ 狩野派と遊楽図』、小学館、2014年、200～205ページ。

42 澤田和人 「慶長小袖の時代性—中国・韓国の染織品と比較して—」、『アジア遊学』、213、2010年、214～228ページ。

43 今永清士 前掲註29、26ページ。

44 山辺知行 前掲註30、24ページ。

45 山辺知行 前掲註30、24ページ。

46 北村哲郎 前掲註1、4ページ。

47 北村哲郎 前掲註1、4ページ。

48 北村哲郎 前掲註1、5ページ。

49 北村哲郎 前掲註32、108ページ。

50 北村哲郎 前掲註32、109ページ。

51 徳蔵きみ 前掲註33、155ページ。

52 切畑健 前掲註34、18ページ。

53 切畑健 前掲註34、24～25ページ。

54 河上繁樹 前掲註35、27ページ。

55 河上繁樹 前掲註36、4ページ。

56 藤木悦子 前掲註37、20ページ。

57 藤木悦子 前掲註37、20～21ページ。

58 山内まみ・片岸博子 前掲註38、3ページ。

59 長崎巖 前掲註39、28ページ。

60 丸山伸彦 前掲註12、57～58ページ。

61 丸山伸彦 前掲註12、59～60ページ。

62 丸山伸彦 前掲註12、60ページ。

63 丸山伸彦 前掲註12、61ページ。

64 丸山伸彦 前掲註12、59ページ。

第2章 いわゆる「慶長小袖」と、実際に慶長年間に製作されたと考えられる小袖

第1節 はじめに

先行研究において「慶長小袖」は慶長期に製作され着用された小袖ではない、あるいは、「慶長小袖」の慶長は元号とはかわりがないとされてきた。しかし、近年、澤田和人の研究により墨書の銘のある慶長期の染織品について、あるいは小山弓弦葉が「辻が花」の研究の中で見出した本来の慶長期の染織品についての論考がだされた。澤田和人の研究によると、慶長期の銘のある染織品の生地は練緯であり、地色も黒などの単色であった。このことから、澤田和人、小山弓弦葉以前の先行研究で紹介されてきた「慶長小袖」をいわゆる「慶長小袖」とし、澤田和人、小山弓弦葉の研究、筆者の文献調査などから導かれた、練緯の生地、紫、黒の地色による染織品を実際に慶長年間に製作されたものとしてわけて考察し、本来の「慶長小袖」とはなになのかを検討する。

また、「慶長小袖」の江戸時代の呼称とされる「地無」、「繡箔」という言葉についても考察し、これらの言葉の関連性についても検証する。

第2節 いわゆる「慶長小袖」の実作品(小袖)

現在、先行研究において「慶長小袖」は先行研究などで、生地が綸子であることと地色が黒・紅・白の3色で染め分けられ、その地染の区画が複雑な構成であることとしている。また、「慶長小袖」の定義は、生地の全面に摺箔・刺繍・絞りによる細かな模様が施されている¹⁾と論じられている。そのため、「慶長小袖・裂」と紹介される染織品は多い。現在、「慶長小袖」と呼ばれる染織品の生地や地色などについて定義がさだまっていないことから「慶長小袖」と呼ばれる染織品は生地では、綸子、紗綾、練緯、地色も黒(黒紅)、白、紅と多岐にわたる。また、黒紅に分類されているものの、本来は紫で褪色により黒紅に見えるものもある。そこで、現在、各所に保管されている、いわゆる「慶長小袖」と呼ばれる染織品について、検証してみる。

(1) 地色による分類

「慶長小袖」とよばれる染織品は、地色が、黒(黒紅)、紅、白の中の染め分け、あるいは単色、その中の2色と紹介されている。そこで、「慶長小袖」を地色別に紹介してみる。

① 典型的な「慶長小袖」と呼ばれる3色に染分けたもの

重要文化財「小袖(繡箔風景四季花文)」文化庁所蔵

重要文化財「染分風景花卉模様繡箔小袖」個人蔵

重要文化財「染分綸子地御所車花鳥文様繡箔小袖」松坂屋コレクション

② 3色の中の2色を使用したもの

「染分熨斗に草花文様小袖」女子美術大学美術館蔵

重要文化財「小袖 黒紅地熨斗藤模様繡箔」東京国立博物館蔵(図 2-1)



図 2-1 重要文化財 小袖 黒紅地熨斗藤模様繡箔 東京国立博物館蔵

③ 単色のもの

重要文化財「黒綸子地桐唐草入大葉文様小袖」国立歴史民俗博物館蔵

重要文化財「能装束〈紅地山桜円文蔓草模様縫箔〉」林原美術館蔵

「黒綸子地草木鶴亀幾何模様小袖」東京国立博物館蔵(図 2-2)

「雲丸に花鳥帯模様小袖」(松坂屋コレクション)

「黒綸子地老梅に柳縫箔模様小袖」(後身頃のみ) (松坂屋コレクション)



図 2-2 黒綸子地草木鶴亀幾何模様小袖 東京国立博物館蔵

④ その他

重要文化財「染分松皮菱取文様小袖」京都国立博物館

重要文化財「小袖 黒綸子地小花鹿紅葉若松模様」東京国立博物館 (図 2-3)



図 2-3 重要文化財 小袖 黒綸子地小花鹿紅葉若松模様 東京国立博物館蔵

綸子や紗綾の生地に刺繍・摺箔、鹿の子絞りなどの技法を用いて製作されており、①は研究者のなかで、「慶長小袖」と認識され、他のものの分類は研究者によりまちまちである。また、これらが「慶長小袖」と区別されたか否かについての変遷についても、さまざまである。

(2) 過渡期とされる染織品

序章でも述べた「紫地段花菱田文散草花模様縫箔小袖」(平野美術館蔵)と「三龍胆車に草花文様振袖」(法隆寺蔵)のような「桃山小袖」の形態と、生地が練緯という特徴をもちながら、黒や紫の地色で、摺箔、刺繍、鹿の子絞りといった「慶長小袖」の特徴をも持つ染織品は、先行研究において「慶長小袖」と分類される場合と、過渡期のものと紹介される場合、あるいは「桃山小袖」と紹介される場合がある。これらの染織品の特徴を持つ染織品は裂で残されものもあり、2点のみではない。

(3) まとめ

以上のように、いわゆる「慶長小袖」とされる染織品を先行研究などで論じられているように慶長年間と切り離し、実際に慶長年間にどのような染織品が製作されてきたのかということを検証する必要がある。そこで、まず、先行研究において、「慶長小袖」は江戸時代には「地無」「繡箔」と呼ばれていたという説について、江戸時代の文献などを中心に検証する。さらに、明治時代以降にこれらの言葉と染織品の「慶長小袖」がどのように結びつけられたのかを検証する。そして、明治時代以降に検証された慶長年間に実際に製作された染織品についても検証する。

第3節 「慶長小袖」の江戸時代の呼称とされる「地無」と「繡箔」

先行研究において、「慶長小袖」は江戸時代には「地無」や「繡箔(あるいは縫箔)」と呼ばれていたとされているが、それらの言葉について詳しく論じられていない。そのため、「慶長小袖」と呼ばれる染織品と「慶長小袖」という言葉と、それらの江戸時代の呼称とされる「地無」や「繡箔(縫箔)」²という言葉がどのように結び付けられたのかについても明らかにされていない。そこで、本節では、「地無」「繡箔」という個々の言葉について解明をすることにより「慶長小袖」という言葉と「慶長小袖」と呼ばれる染織品の関係性について解明したいと考える。そして、江戸時代から現代までの文献の中でこれらの言葉がどのようにとらえられていたのかを考察する。そのうえで、「慶長小袖」という言葉と「慶長小袖」と呼ばれる染織品と、江戸時代の呼称であるとされる「地無」と「繡箔」という言葉がどのように結びつけられたのかを考察したいと考える。

(1) 「地無」と「繡箔」という言葉の先行研究の検討

戦後の染織研究史において「慶長小袖」について初めて書かれた論文はおそらく今永清士による昭和 39 年(1964)の「重要文化財 染分四季花鳥模様縫箔小袖」³であろう。この論文において「地が見えないくらいに模様が施されているので地無し小袖ともいわれる」⁴と、すでに「慶長小袖」は「地無」という言葉と結びつけられている。また、山辺知行も昭和 41 年(1966)に「地無」について

「絞りと繻と箔で裂地の全面が埋められて地が見えぬくらい詰っている意味であろうか」⁵と述べている。同じ頃、北村哲郎は「繻箔」という言葉とともに「慶長小袖」を論じているが「地無」については論じていない⁶。その後、今永清士らの研究を踏襲した河上繁樹⁷や丸山伸彦⁸の論考がある一方で、長崎巖の「繻箔」「地無」双方が「慶長小袖」という言葉の江戸時代の呼称であるという考え方もある⁹。

(2) 江戸時代前期における文献上の「地無」と「繻箔」

現在、「慶長小袖」の製作時期、着用時期などは確定されていないものの、おおよそ、慶長期から寛文期まで(1595～1673)を軸に論じられている。そこで、この時期の文献において、「地無」と「繻箔」という言葉が、どのように使われたのかを考察する。検討の対象にする文献は以下の3件である¹⁰。

- ① 雁金屋資料(慶長 7 年(1602)から延宝 6 年(1678)までの呉服発注の記録)
- ② 藤本箕山『色道大鏡』¹¹(寛永 3 年(1626)から宝永元年(1704)内に成立)
- ③ 井原西鶴『萬の文反古』¹²(発刊は元禄 9(1696)、西鶴の死後、遺稿集として出版されているため、本来の執筆はそれ以前であるが、不詳)

1) 雁金屋資料

雁金屋資料とは、絵師尾形光琳の生家で、呉服商であった雁金屋の呉服発注に関する資料群の一部である。この雁金屋資料は一般的に「小西家旧蔵光琳関係資料」あるいは、「雁金屋資料」として現在の研究者に知られ、研究されている。この資料群は、絵師の尾形光琳の子が養子に行った先の小西家に伝来した画稿類と文書類である。この資料は光琳の写生帳や画稿など光琳にまつわる資料と光琳の生家の職業である呉服商雁金屋関係のものと光琳を中心にその家族関係などを記したものである。

これらの資料の存在が初めて紹介されたのは、光琳二百年忌に相当する大正 4 年(1915)より後であるといわれ、相見繁一と福井利吉郎により光琳研究が始まった¹³と伝えられている。昭和 9 年(1934)頃、これらの資料は小西家から武藤山治を経て、現在は京都国立博物館に所蔵されている。またこの段階で小西家の手を離れなかったものは現在、大阪市美術館に所蔵されている。光琳資料の研究は東京大学文学部美術史研究室の山根有三が昭和 36 年(1961)に成果として『小西家旧蔵 光琳関係資料とその研究』¹⁴を出版、その結果、光琳研究のみならず、呉服発注という視点での服飾・染織研究者からの研究も始まることとなった。また、この後、塚本瑞代により、この中の呉服発注における注文書の内容から生地や文様や技法を分析する研究がされ、それが、『雁金屋御画帖の研究—小西家伝来尾形光琳関係資料にみる小袖文様—』¹⁵として出版されている。

山根有三の『小西家旧蔵 光琳関係資料とその研究』の中で「I 尾形家 家職(呉服商雁金屋)」に関するものは全部で 42 件ある。その中で、発注した呉服の内容がわかる部分は以下である。


- ① 慶長 7～8 年(1602～1603)『雁金屋染物台帳』

- ② 慶長 19 年(1614)『徳川秀忠大奥老女呉服注文書』
- ③ 発行年不明『徳川秀忠大奥老女呉服注文書』
- ④ 発行年不明『徳川秀忠大奥呉服注文書』
- ⑤ 元和 9 年(1623)『雁金屋女御和子御用呉服書上帳』
- ⑥ 発行年不明『後藤縫丞呉服注文書』
- ⑦ 発行年不明『若君呉服注文雛型及寸法控』
- ⑧ 正保 3 年(1645)『尾形宗謙呉服詠物帳』
- ⑨ 発行年不明『呉服注文書』
- ⑩ 万治 4 年(1661)『衣裳図案帳』
- ⑪ 寛文 3 年(1664)『衣裳図案帳』
- ⑫ 発行年不明『衣裳図案帳』
- ⑬ 延宝 3 年(1678)『雁金屋東福門院御用呉服書上帳』

の 13 件である。

雁金屋に小袖などを発注し、着用した人達は豊臣家や徳川家の人々である。着用者のうち、「特定できた人物は男性では徳川家康、徳川秀忠、豊臣秀頼、女性では、注文に際しての中心的人物と思われる江戸様(徳川秀忠正室)、若狭様(京極高次正室)、大坂御上様(豊臣秀吉側室、通称淀殿)の三姉妹、江戸様の娘である御姫様(千姫、のち豊臣秀頼室)、政所様(豊臣秀吉正室)である」¹⁶とされている。これらを年代順に呉服発注書の中で「地無」と「繡箔」という言葉を抜き出し、それらがどのように取り扱われているのかを考察する。この 13 件の中で「地無」と「繡箔」という言葉が使われている文書を抜き出すと以下である。

②『徳川秀忠大奥老女呉服注文書』内

御たけはいつものことく四しやく		
ミたいさま 御ふく	十たん	此内
一御そめ物 御 <u>ちなし</u>	五つ	
一御かたすそ	三つ	
一御四つかわり	二つ	
いかにも  こからに	17	(下線筆者、以下同)

この「ミたいさま」は徳川秀忠正室お江与で丈が 4 尺の服を 10 反注文し、その中の 5 つが「地無」であるということがわかる。

⑤『雁金屋女御和子御用呉服書上帳』内

(5ウ)

女御様御ふく

- 一 御ちねりの 御そめ物 壱たん
御ゑやう御ちなしそう十九たんニしてだんきわ
いかり御へにのけしかのこしろ御かたの
うちこし御すそもかのこ
代銀貳百七十め

- 一 御へにのそめはふたへ 壱たん
是ハ右之御うら
同八拾目

(6才)

同御ふく

- 一 御地ねりの 御そめ物 壱たん
御ゑやうハ御ちなしそうけしかのこ十六たんニして
だんぎわいかりニして一たんハくろへにのけしかのこ
一たんハあかへにのけしかのこ一たんハひわのけしかのこ
一たんハあさきのけしかのこ
代銀三百十匁

- 一 御へにのそめはふたへ 壱たん
是ハ右之御うら
同八拾目¹⁸

「女御和子」は、徳川2代将軍秀忠とお江与の娘で、慶長12年(1607)、後水尾天皇へ入内し、東福門院となり、朝廷と幕府の架け橋となっている。そして、豊かな経済力をもとに、数多くの小袖類を雁金屋に発注している¹⁹。この注文書では45点の小袖と14点の反物を注文し、代金の総額は七貫八六四匁となっている。この元和9年(1623)の「雁金屋女御和子御用呉服書上帳」での「地無」について特筆すべきことは地が練緯であることである。桃山時代の小袖の地に多く使われた練緯が元和年間にも使われ、鹿の子が多く使われていることを読み取ることができる。ただ、この「地無」は何を指しているのだろうか？練緯の地に現在の「慶長小袖」の技法を駆使した染織品はなんだろうか？

このことは長らく疑問視すらされてこなかったが、澤田和人の研究により問題提起から解明へと大きく前進した。澤田和人は、第1章第2節で述べたとおり、慶長8年(1603)の銘のある「菱鶴丸草花模様等古幡残欠」を示し、「慶長小袖・裂」が慶長年間には存在していたことを明らかにしている。この「慶長小袖・裂」の生地は練緯である²⁰。また、裂であり小袖の形態ではないので断言することは難しいが地色は黒である。澤田和人の見出した「慶長小袖・裂」には刺繍が確認されており、刺繍については、「雁金屋資料」には書かれていないので加飾されているのかわからない。これらを検証すると、黒の地色の練緯の「慶長小袖・裂」が江戸時代に「地無」とよばれていたことに結び

付けることが出来るのではないかと考えられる。

⑦『若君呉服注文雛型及寸法控』

若君様正月の御ふく
一御地なしに、あやすきこんともへき浅き
しろに、てきわよくうつくしくそめ候へく候、
大からにもあまりこからにもなきように、
はからい候へく候、そめ候へく候、上もん
いちやうのはをちらし、これもいろ／＼に
きひわにそめ候へく候、御もん所あふひの
丸そめ入りニ、うつくしくそめ候へく候、²¹

このひな形の「地無」は何をさしているのだろうか？生地についてかかれていないので白に紺と萌黄を美しく染めるとあり、大柄にも小柄にもならないようにとある。

この『小西家旧蔵 光琳関係資料とその研究』の中で「I 尾形家 家職(呉服商雁金屋)」においては「地無」は以上の3つの文書の中のみにある。これらにおいて加飾の技法は鹿の子、あるいは、染めとあり、これらにおいては刺繍については書かれていない。箔についても書かれていない。そう考えると、この3つの文書の中の「地無」の意味は「繡箔」とはならない。

一方で『小西家旧蔵 光琳関係資料とその研究』の「I 尾形家 家職(呉服商雁金屋)」において「繡箔」は、その後の正保3年(1645)の「尾形宗謙呉服詠物帳」の中でみられるようになる。

⑧『尾形宗謙呉服詠物帳』（割書は略した）

(16ウ)

とら卯月十五日

一、四百廿め	りんす地へニゆいしはノそめ <u>ぬいはく</u> 壺たん
一、三百五十め	りんすちへニあんへうのそめ <u>ぬいはく</u> 壺たん
一、三百め	りんすそきつきしまむすひ ふミノ左まきすしそめ物一たん

あやさま御用

とり

一、廿八匁	りんすこたちちべにたううちはちらし あさき丸へにうこんゑもん <u>ぬいはく</u>
-------	---

一、六匁五分 めい 一、三匁 へに 一、一匁五分下へ
一、一匁八分 かのこ 一、二匁五分はく 一、一匁八分しめ物
一、二分 あをや 一、四分 けし 一、一匁うこんそめ

合十八匁七分

一、四十二匁 りんすちへにきつかうちらしへにかのこ

うこんしろめいはく

一、三匁 めい 一、二匁 はく 一、三分 けし
一、二匁 かのこ 一、一匁五分下へ、一匁二分 ほし
一、廿五分匁五分へに 一、四分しめ物 一、五分 うこん

合卅六匁四分

廿五

(17ウ)

十二三ノ御子 これハ一たんニ御地下され候

りんすちしろからはなちらし

へにのかのこへニあさきかのこうこんはないろ

一、  めいはく

一、五匁 下へ 一、四匁 はく
一、三匁 けしふた 一、廿めかのこ 一、四匁しめ物
一、三匁五分へに 一、一匁 あをや
一、五匁てま
うこん入 一、十三匁 めい

合五十八匁八分

一、 りんすちうこんはうちはかさね
へにかのこへにあさきかのここんしろめいは
く

一、七十五匁 ち 一、四匁二分しめ物 一、十三匁五分

はく

一、五匁 下へ 一、一匁二分あをや

合百卅四匁九分

一、三匁けしふた 一、十匁 うこん
一、十八匁かのこ 一、五匁 てま

(中略)

(18ウ)

女子地下され候

一、卅二匁 かたひらちへに立あふひちらし

へにかのこぬいはく

- 一、五匁 ぬい 一、十匁 へに
一、一匁五分 下へ 一、二匁五分 はく 合廿め二分
一、一匁二部 かのこ²²

以上のように「地無」と「繡箔」という言葉を「雁金屋資料」の中で考察すると、徳川秀忠正室の衣服注文の中に「地無」という言葉を見出し、これは、「かたすそ」(肩裾)や「四つかわり」(四つ替り)という文様構成とは別であるが、「地無」が何をさすかを見出すことはできなかった。「若君様」の雛型に書かれた「地無」も同様であった。ただ、「地無」の染織品の生地が練緯であったことも見出すことができた。一方で「ぬいはく」という言葉は正保3年(1646)の注文書の中にある。それは、染めなどと同列で書かれていることから技法と読み取ることができる。また、この注文書に書かれた生地は綸子である。さらに延宝6年(1678)年の「雁金屋東福門院御用呉服書上帳」には、「地無」、「繡箔」という言葉を見つけることはできなかった。さらに、『小西家旧蔵 光琳関係資料とその研究』の中で「1 尾形家 家職(呉服商雁金屋)」には詳細が掲載されていないが、その後の研究として知られる『雁金屋御画帖の研究』で万治4年(1661)と寛文3年(1664)他1冊の『衣裳図案帳』という3冊についても研究がなされているが、それらの中にも「地無」、「繡箔」という言葉は見出すことができない。これは、「慶長小袖」の下限を「寛文小袖」の出現する前としていることにつながるであろう。

2) 藤本箕山『色道大鏡』²³

次に、『色道大鏡』という、いわば、「遊里百科事典」の中にも「地無」「繡箔」という言葉がでてくる。「第三冊 おほ鏡 寛文式上」には大夫の職の衣服の事で、「第四冊 おほ鏡 寛文式下」には、法度により普段は着用が不可と書かれている(下線筆者)。

第三冊 おほ鏡 寛文式上

太夫職可_レ差用_一色

小袖・帷子によらず、ひつたの鹿子○地なし縫薄の小袖○縁箔の小袖、但、薄の類六条にてはおほく着しつれど、坤郭にいたり、傾國の服には初心なりとて、これを着せず。殊更當時は鹿子・縫薄之類停止すれば、其沙汰に及ばず。長崎には今以これを用ゆ。○無紋無地の紫紋所あるは天職着してもくしからず。○無紋白小袖の上着肌着・ね巻には天職・圍職共にくしからず。○同色の三重○小袖の裏の小紋箔、八丈八端掛○天鷲戒の小袖○夜具には、○唐織金入○欄絹○天鷲戒○金入りの小寝巻○敷衾、四隅の糸房○錦縁の折御座、又は金入ひらうとの縁。蚊帳は、○たうか○ろりん○ろけん○ほら○四天・ちへりは錦織、或は金入織物のしつ○釣手、むらさきの唐打、七寶の輪釣手○織物の枕掛○金覆輪の指櫛²⁴

第四冊 おほ鏡 寛文式下

一退郭之事。郭をしりぞく事也。傾城、年季をとゞげ、主人より隙をもらひ、舊里に歸るをいふ。又、年季の内に金銀を出し、身請して出るをもいふ。傾城の歸る時、衣裳・寢道具残らずくるゝ事、其家の例によるべし。衣裳こと／＼ぐ遣すもあり、又、品によりて少しもとらせぬ事もあり。又、其傾城年比のはたらきにより、おほくも遣し、すくなく遣すも有べし。傾城退郭の用法、借銀・買がゝり等の拂方、遣女是を承る處なり、退出兩一日まへに拂切べし。退郭きはまりて用意の内に、退出の日着する衣服を仕立てる事勿論也。是には何にても郭中法度にて着せざりし物を矩模とす。即、施主の男よりこれを出す、小袖三、或は五、内一は白むく。又、日頃參會せし外の客より、餞別として送る小袖も有へし。たとひ外より数多來るとも、施主よりは必用意する法也。家主より退出する傾城へ、餞別として新服を出す、或二、或一、其女郎の器量によるべし。是も平生法度にてきせざりし物を仕立てる事也、たとへば鹿子・縫箔之類たるべし。わたぼうしはうなきわた一、まるわた一、主人よりかならず出す故実なり。此外の餞別は、主人の心／＼によるべし²⁵

以上を考察すると、『色道大鏡』においては「地無縫箔」の小袖という表現をしていることから、「繡箔」による加飾を「地無」となるように施した小袖を指しているのであろう。

3) 井原西鶴『萬の文反古』

井原西鶴は、江戸時代前期の俳諧師で浮世草子の作者である。寛永 19 年(1642)に生まれ、元禄 6 年(1693)に没したとされている。この『萬の文反古』は井原西鶴の以後、2 代西鶴を名乗った北条団水により、元禄 9 年(1699)に出されたものである²⁶。その為、北条団水の加筆や、遺稿の成立時期については定かではないとしつつも、元禄 2 年(1659)に発刊された『塵塚物語』の序をふまえて書いたという考えがある²⁷。これらの西鶴に関する情報から、江戸時代前期の元禄期前に書いたと仮定し、その時期の女性の服飾表現について考察する。

この『萬の文反古』巻 2 の 1「縁付まへの娘自慢」という部分に「地無」「繡箔」の表現がある。そこには娘の縁談に際し、嫁入り道具の買い物の注文品が贅沢であるという内容が書かれている。(下線筆者)

姪入は新しき紋付よく候扱また鹿子の色／＼十二までは無用に存候連も着申物にはあらず數を揃えて持たといふ分に候是も本國寺手木の下つや鹿子は十二の内にて六百四五十目の違ひ有是によつて私才覺いたしさる御かたの御息女御死去なされ其あがり物を調え遣はし申候結句かみのかたひ物に候人はしらぬ事お寺は此方次第にて心やすく求め申候此外は其元お内儀よこれぬ上着ども黒紅に御所車の縫箔の小袖所わきのさいわひ菱の袷地なしの綸子小袖これらを皆／＼協明て物數にいたさるべし袖下のみじかきを誰吟味するものなく候

28

「縫箔」は文様の技法の名称で、「地無」の綸子については、この訳をした藤村作によると「不詳。

地紋なしの意か」²⁹とある。『雁金屋資料』では、練緯にのみ使用されてきた「地無」の言葉が綸子にも使用されたことが書かれている。この「地なし」が何を意味しているかについては定かでないが、地紋のない綸子か、あるいは地の部分がないほどの加飾した小袖、地色がないなどの意味が考えられる。「縫箔」が地色や文様を表現し、衿も文様についての記載があることから、この「地なし」は文様構成のことであろうと考える。

これらの文献を通して、「慶長小袖」の江戸時代の呼称とされる「地無」、「繡箔」は、現在「慶長小袖」とされている作品群とイコールとはみなしがたい。

(3) 江戸時代中期・後期の文献上の「地無」と「繡箔」

「慶長小袖」の製作・着用時期より後の江戸時代中期以降に出版された随筆の中で、それ以前の女性の衣服について書かれた箇所に「地無」「繡箔」という言葉が使われているものがある。それらを考察することにより、江戸時代中期以降のさほど年月を経っていない時期や江戸時代後期などに、どのように「地無」「繡箔」という言葉が使われていて、何を表現しているのかという視点で考察する。対象とする文献は以下の4冊である³⁰。

- ① 財津種菜『むかしむかし物語』³¹享保 17 年(1733) 発刊
- ② 津村正恭『譚海』³²寛政 7 年(1795) 発刊
- ③ 山東京伝『近世奇跡考』³³文化元年(1830) 発刊
- ④ 喜田川守貞『近世風俗志(守貞謾稿)』³⁴ 天保 8 年(1837) 発刊

1) 財津種菜『むかしむかし物語』

これは、享保 17 年(1732)、財津種菜(たからつしゅそう)という人が残した随筆である。財津は執筆時、80 歳に達していたと伝えられる。そこから類推すると出生は慶安年間(1648～1651 年)頃ではなかろうかと考えられる³⁵。財津種菜は、長らく見つめてきた江戸の風俗の変遷についてこの随筆の中で述べている。「地無」が 2 か所、「繡箔」は 1 か所で確認ができたので、そのまま下記に引用する(下線筆者)。

○むかしは、奥方御息女方、神社仏閣に詣での時さげ髪、供侍上下を着す、女中の帯長さは七尺五六寸也、また緞子繡子の帯も七尺五六寸成し、半女は木綿金入りとて、木綿を織たる金入杯にて有し、寛文の末よりは、広に成て、延宝の頃専ら幅広に成、純子三ツ割二ツ割杯にて、長さ一丈式三尺になる、費事也、昔は女中地なしを着す、³⁶

○むかしは女風俗近年と替り、小袖のもやう十五六歳の女は其歳頃の模様、廿四五歳計は其歳頃のもやう、四十五歳の女は年相応の模様、五十以上の女は後室向を着し、道を歩行にも其年倍の様子にあゆみ、帯の物好も其頃々々相応のをするにより、五人十人連立て歩行を見れば、小袖の模様帯の様子道の歩行やう、夫々年頃々々に見ゆるゆへに、若輩なるも中年成も老女も、兎隠しても取なり風俗にて、老若の分け明らかに、遠く隔ても見えしが、近年は

十四五の振袖も十七八も、三十四十も老女も、皆々郡内島か或は八丈島か又丹後島、紋所物扱は無地、似たか似ぬ位の小袖、帯は幅広くみな／＼胸高に尻長／＼と出し、あゆみやうはどた／＼と身品もなくあゆむゆへ、遠隔りて群行を見れば、何が若きやら何が老女やら、中々見わけ難し、是は女ながら器量なき故、皆人の真似ゆへなり、小袖紋所無地島のいはやるは遊女の真似なり、むかしは常の女縫薄光る小袖着るゆへ、遊女無地もの島のるい着て、常の女と風替るべき為也、又帯も常の女帯は幅狭き故、遊女ははゞ広して是もわかるべき為なりしに、今は常の女遊女の真似して、無地物島の小袖幅広の帯になりし、皆是人真似器量なきゆへ也、³⁷

○六七十年以前は、女中地梨と云小袖持ざる人なし、人をも仕ふ女中、上着小袖数は持ず共地梨は持、惣身を金薄にて、一面に松河菱の様に薄置たる小袖なり、針妙女も衣装五つ六つも持たるゝ程の女、又は小身にても家老の妻なども地なし持も有、此地なしといふは、祝言婚礼また正月など、とかく男の熨斗目着する時女は地なしなり、其頃の針妙はかつぎを着る、

38

この『むかしむかし物語』の中での「地無」は着用についてであるが、昔の女中の衣服、日常の女の衣服であるとしている。一面に松皮菱のような箔を置いているものである。あるいは、婚礼や正月などに男性が熨斗目を着用するときに同席する女性は「地無」を着用すると述べられている。また、「繡箔」について遊女は着用しなかったと述べられている。この随筆の中で「地無」「繡箔」ともに遊女ではない、女中などの着用する衣服である。むかしは「地無」と光る「繡箔」とわけて述べられているが、推測するに、この随筆が書かれたであろう享保 17 年(1732)から昔ととらえた 60～70 年前はおそらく明暦か万治(1655～1660)の頃であろう。「地無」に箔による加飾が施されていることが読み取られ、文章だけではそれが「繡箔」とはわからないものの「地無」に箔を加えた小袖が製作されていたと考えられる。

2) 津村正恭『譚海』

津村正恭は江戸時代の歌人でこの『譚海』は 40 歳の頃に書き始めて 60 歳の頃寛政 7 年(1795)にすでに 20 年の歳月を費やして書き、文化 3 年(1806)に亡くなったとされる³⁹。この『譚海』の 14 の巻に衣服のことが書かれている。綸子や綾などの生地のことや鹿の子などの説明である。その中に

○縫箔は地なしとも云、雪鳥の模様に、さま／＼のもようを箔にてすり、其地を花鳥をぬひ、其あひだにくゝし染をして、もえぎ・べに・あい・かちんのくゝしいろの間、ちを箔にてすり、くりにして、少しもぢにあかぬほどに、模様を付る、⁴⁰

とあり、「縫箔(繡箔)」は「地無」ともいうとある。

3) 山東京伝『近世奇跡考』

山東京伝による随筆『近世奇跡考』にも「地無」「繡箔」はでてくる。山東京伝は、戯作者や、浮世絵師北尾政演としても知られる人である。洒落本作家として人気を得るものの、御禁令を犯し処刑された。洒落本から筆を絶ったのち、読本に転じた。風俗研究により『近世奇跡考』は生み出された。この随筆は大きく5巻からなり、その中で計71条に分かれている。その第1巻[3]に「縫箔の小袖」と題して書かれている。この部分を下記に引用する。

縫箔の小袖

昔の婦女は、縫箔の小袖を礼服とす。京六条に傾城町ありし時、寛永の頃までは、遊女も地なし縫箔の小袖、へり箔の小袖を着たるが、島原にうつりしより、縫箔とひとつたの鹿子を禁ぜられしよし、箕山が〔大鏡〕〔割註〕延宝中写本。〕に見ゆ。好事の者、懸物のかざりなどに用て、今に残れるを見るに、緋に鹿略なる縫をして、ところ／＼摺箔をしたるものなり。今地白地黒など云もの、其遺製歟。いつの頃にか、金糸の繡いできて縫箔はやみ、唯縫箔屋と云名のみ残れり。〔割註〕古代といへども、縫箔はなみ／＼の者の、着すことあたはざる衣服なり。しかれどもおほくは緋の地にて、縫も甚だ鹿略なり。これ等を見ても、昔の質素をおもふべし。⁴¹

「繡箔」は昔の婦女の礼服であり、遊郭が六条にあった頃は、「地無」の「繡箔」の小袖を着ていたが、禁令により「繡箔」が禁じられ、箔は金糸に変わっていく様子が見える。また、山東京伝がそれ以前に出版された『色道大鏡』を参考に行っていることや、「繡箔」を図版で紹介していることなども特筆すべきことであろう。この随筆によると「地無」という様式に「繡箔」の技法ということがわかり、「繡箔」の中に「地無」という地の無いほどの加飾をした小袖があったことが読み取れる。

4) 喜田川守貞『近世風俗志(守貞謾稿)』

また、天保8年(1837)、喜田川守貞による『守貞謾稿』にも「地無」「繡箔」という言葉がでてくるので引用する。

繡箔・摺箔ともにその模様種なりといへども、おほむね図のごとし。縫箔には、散楓を五彩の糸をもつて繡とし、浪を金箔あるひは銀箔とするの類、あるひは虫喰いの楓を箔にするの類なり。その好みに任す。摺箔には縫を用ひず、無地のの上に模様、皆すりはくにし、あるひは染もやうをも交へ、すりはくにする。また地色も定まりなく、綸子・平絹を用ひ、あるひは染模様を除きて地を全く摺箔にするもあり。

また縫箔と云ふ縫は、繡の仮字なり。縫は縫裁の字なり。箔また仮字なり。箔、すだと訓ず。簾の類なり。金銀には鉑を正字とす。

繡箔小袖は昔の婦女の礼服とす(箔は今云ふ印金の類、すりはくなり)。寛文の末年廃して金糸縫ひの製始まる。箔小袖をあるひは地なしの小袖とも云ふ。平絹に彩糸をもつて所々に

繡し、その間に摺箔をしたる物にて、今の地白地赤と云ふその制の本なれども、今の制よりはなはだ僞なり。その箔衣も、正保・慶安頃までは自から制せず、市民の子女等大名以下武家に仕へて、その主人より一、二領賜ひしを、婚儀および他出に服し衆目を驚かす。富家の妻女等、これを観て自費をもつて製するに至りしなり。その箔衣も廢して金絲繡を用ふるに至る。京の傾城町も六条柳馬場にありし時は、遊女も地なし縫箔へり箔の小袖を服す。島原に移る後、縫箔およびひつた鹿子の服を禁止す。⁴²

この書籍は一般的に近世風俗史の文献とされている。江戸・大阪・京都の風俗を比較して論じている。その中の「女服」の中に繡箔および摺箔の図を紹介し、その説明が書かれている。「繡箔」については現在においても混在して使用されている「縫」「繡」の文字の説明や「繡箔」の技法について述べている。また、「縫(繡)箔」は昔の婦女の礼服で、六条の遊郭があった頃は遊女が「地無縫箔」を着ていたと述べている。

(4) 近代の染織史研究における「地無」・「繡箔」

ここでは近代の染織・服飾を取り扱った文献を中心に、「地無」「繡箔」という言葉について考察する。そして、どの時点で江戸時代の「慶長小袖」の呼称であるとされる「地無」・「繡箔」という言葉と結び付けられていくのかを検証する。

1) 大正期の研究

大正時代に入ると染織品の時代判定などをし、染織品の図版とともにその時代判定が掲載されること⁴³になる。大正 9 年(1920)、染織品コレクターとして知られる野村正治郎の『友禅研究』⁴⁴に小袖を中心とした染織品についての論考の中に「縫箔小袖」という節があるため、この部分を考察する。野村正治郎によると室町時代末期頃摺箔と刺繡の応用が始まり、徐々に進化した⁴⁵とされる。さらに「慶長時代の縫箔の地色は専ら黒であつたが此時代からぼうし染法に依りて白に抜き、紅、淺黄或は藍などが染入れられた」⁴⁶とあり、このことは、野村正治郎が自身の染織品を自身の考えのもとに時代判定をしている⁴⁷ことにもつながると考えられる。また、野村正治郎はこの著書の中で「慶長元和寛永時代には、京都の上流階級の妻女は勿論、六條三筋町の傾城なども縫箔或は鹿の子のきは箔(又はへり箔とも云ふ)等の小袖を着た」⁴⁸と述べている。そして、『むかしむかしのがたり』『守貞漫稿』『近代奇跡考』の文献を紹介している。ここで、野村正治郎の「縫箔小袖」と「地無小袖」について紹介する。(下線筆者)

江戸に此等縫箔小袖の流行を來たしたのは、慶安四年家光の薨去とともに大奥の女中三千七百餘人を一時宿下げとしたるに起因する。此等大奥の女中は多く江戸者であつたから、宿下りと同時に従來着用した地なし小袖を、是れみよがしに着て晴着とした⁴⁹

ここで、野村正治郎は「縫箔小袖」の流行についてはと言い始め、その言葉を文中で『むかしむ

かし物語』で使われている「地なし小袖」という言葉と同等に取りあつかっている。そして、京都で慶長から寛永頃に着られていた「縫箔（繡箔）」が慶安頃江戸の市中で着用され、これを野村正治郎は「地なし小袖」と結び付けている。

また、野村正治郎とともに注目すべきは風俗研究家の江馬務であろう。江馬は昭和 32 年(1957)の『日本風俗史』⁵⁰の中で「地無」と「繡箔」については「婦人小袖は、礼服に地無という摺箔入りのものがあり、鹿子刺繡を多く入れた。のち摺箔は繡箔という金糸入りとなり」⁵¹と述べている。

これらを総じて考察すると大正期の「地無」や「繡箔」という言葉は江戸時代の随筆などを探した上で検証し、それらの言葉についての一定の考察がなされていることがわかる。大正時代には、現在「慶長小袖」と呼ばれている染織品について「慶長時代小袖」あるいは「小袖(慶長頃)」といった時代判定の痕跡は確認できるものの、「慶長小袖」という言葉は文献上において確認ができない。よって、大正期において、この「地無」と「繡箔」という言葉と染織品の「慶長小袖」と「慶長小袖」という言葉は結びつけられてはいないのであろう。

2) 昭和戦前期の研究

戦前までは、明治以降始まった古美術品の売立なども盛んに行われていた。売立目録においては図版を掲載し、時代判定をし、染織品にも名称がつけられた。そのため、売立目録にも「地無」や「繡箔」という言葉はでてくる。また、洋画家の岡田三郎助による『時代裂』などの書籍が出版され、染織研究がなされていた。ここでは、昭和戦前期の出版物の中で現在、「慶長小袖」といわれる染織品がどのように考察されているのかを「地無」「繡箔」という言葉をキーワードにして検証する。

現在、「慶長小袖」と呼ばれる染織品の中で、紅・白・黒紅で染分、繡箔という技法を使用し製作された染織品は本章第2節で述べた以下の3点である。

- ① 重要文化財「小袖(繡箔風景四季花文)」文化庁所蔵
- ② 重要文化財「染分風景花卉模様繡箔小袖」個人蔵
- ③ 重要文化財「染分綸子地御所車花鳥文様繡箔小袖」松坂屋コレクション

この中で①と③は昭和戦前期の文献に図版とともに掲載されている。①については昭和 10 年(1935)に『時代裂拾遺第六輯解説』⁵²の 33・34 に「縫箔四季模様慶長裂」として、その後、昭和 17 年(1942)11 月開催の東洋美術国際研究會主催の「時代衣装展覧目録」⁵³という図録の図版 5 に「綸子地 染分四季花鳥文様縫箔小袖」という作品名称で掲載されている。また③は昭和 4 年(1928)に出版された『綵霞帖』⁵⁴に

徳川時代 初期 慶長頃 小袖 縫箔

本絞綸子地 朱、茶、藍、黒ニテ種々ノ形状ヲ絞り鹿ノ子ヲ加ヘ

刺繡ハ鳳凰松ニ御所車、枝桐、秋草、水禽ニ水草等

又茶地ノ處ハ様々ノ文様ヲ摺箔ニテ現ス

とある。この後、昭和 8 年(1932)に出版された、『日本染織商工史』⁵⁵の口絵に「絞綸子地絞縫摺

箔御幸文様小袖(徳川時代(慶長頃))」と紹介されている。これらのことから、戦前期は「繡箔」は「縫箔」とされ、「慶長小袖」は「繡箔」ととらえられていたのではなかろうかとかんがえられる。

3) 昭和戦後期・平成期の研究

戦後において、いつから「慶長小袖」の江戸時代の呼称が「地無」「繡箔」という言葉と結び付けられたのであろうか？戦後の染織研究史は東京国立博物館を中心に研究がすすんでいる⁵⁶。東京国立博物館から発刊された **MUSEUM** などを中心に「慶長小袖」と江戸時代の呼称とされる「繡箔」と「地無」について考察し、その言葉が結びつけられていく様子を明らかにする。

第1章第2節で述べたとおり、まず、戦後の研究者で一番初めに「慶長小袖」について論じたのは今永清士で、「俗にこれを慶長小袖と呼んでいるが、絞りと刺繡、それに摺箔で全面を隙間なく埋めつくし、一見、地が見えないくらいに模様が施されているので地無し小袖ともいわれている」⁵⁷として、この中で染織品の「慶長小袖」と「慶長小袖」という言葉と、それが別名「地無」という小袖であることを述べている。また、続いて、山辺知行も「桃山の終わりから江戸初期にかけ、俗に慶長小袖といわれる独自のスタイルをもった小袖が現れる」⁵⁸とし、「この種の小袖を一名地無しと称するもの、絞りと繡と箔で裂地の全面が埋められて地が見えぬくらい詰っているという意味であらうか」⁵⁹と論じ、「慶長小袖」と「地無」という言葉については今永清士と同じ考え方である。一方、北村哲郎は「慶長小袖」を「慶長繡箔」と定義し、「地無」についての記載はない⁶⁰。また、徳蔵きみも「刺繡と絞りそれに摺箔によって飾られたスタイルのもので既存の技法をすべて駆使しているもので、このような小袖を一名「地無し」と呼んでいる」⁶¹と論じている。また、河上繁樹も個人所蔵の重要文化財「染分風景花卉模様繡箔小袖」をいわゆる「慶長小袖」とし、俗に「地無」小袖と呼んでいる⁶²ことを論じている。ここまでの論考を考察するに、染織品の「慶長小袖」が「慶長小袖」という言葉と結び付けられており、「慶長小袖」という言葉の確立を確認できる。そして、この「慶長小袖」が「地無」という言葉とも結びつけられている。また、丸山伸彦も「「慶長小袖」は紅・白・黒紅の染分、複雑に重層した構成、刺繡・絞り・摺箔等によって細密に表現された花鳥・草木・器物・風景などの模様を特徴とする「地無」の形式を踏襲」⁶³しているという。一方で、山内まみと片岸博子は「慶長小袖」を、本章でとりあげた『雁金屋資料』や『むかしむかし物語』『譚海』などから考察し、「慶長小袖」を摺箔の「地無」ととらえている⁶⁴。これらの研究から、「慶長小袖」が「繡箔」、「地無」という言葉と一緒にとりあつかわれるようになったと考えられる。

また、近年、小袖様式や着用者などが細かく細分化される中で、「慶長小袖」も着物の変遷を紹介する出版物などで紹介されることが多くなった。「慶長小袖」という言葉の指し示す染織品は研究者によりまちまちであるし、「慶長小袖」を「繡箔」「地無」と結びつけるかどうかについても研究者によりまちまちである。丸山伸彦の「刺繡を中心に金銀の摺箔を併用する技法は、基本的に桃山期の延長上にあり、「慶長縫箔」とも称される。また、地が見えなくなるほど密に装飾を施すものは「地無し小袖」ともいわれる」⁶⁵というそれぞれの意味をわけているものと、長崎巖の「地が見えないほどにぎっしりと模様が表されているものが多いので、江戸時代には「繡箔小袖」あるいは「地無し小袖」と呼ばれていた」⁶⁶のように「繡箔」と「地無」を同一視する考え方が存在する。それは江戸時代の文

献にも、同じようなことがみられた。

(4) まとめ

江戸時代に出された文献などで現在、「慶長小袖」とよばれている染織品を視覚的に確認する
すべはない。しかし、昭和にはいり「地無」や「繡箔」という言葉とむすびつけられることにより、「慶
長小袖」と呼ばれる染織品について検証ができるのである。

これらの文献から、「地無」と「繡箔」について考察できたことは、「地無」には「鹿子」「繡箔」など
の技法の意味も含め使われることである。調査した文献のみでも多くの考察を見出すことができ
た。

まず、「地無」であるが、生地においては、「雁金屋資料」においては練緯であるが、『萬の文反
古』では綸子とある。ここで考えられるのは、「地無」の言葉のさすものが双方で違うのかということ
である。いずれにしても練緯地の「地無」については今後も研究を続けたい。さらに、『守貞漫稿』では、
「地無」には箔を使用しない総模様も含めている。そして、「地無」の意味は、その間に出版された
文献のなかではある一定の意味をみいだすことができる。先行研究にて論じられている地がみえな
いという意味であろう。また、この「地無」の着用者に関しては、おおよそ、女性であった。

一方、「繡箔」については、正保 3 年(1645)の「尾形宗謙呉服詠物帳」の中では「繡箔」のみだ
が、延宝 6 年(1678)の『色道大鏡』では、「地無縫箔」という言葉となる。また、「繡箔」の着用に関
しては大夫が着用していたことや、婦人の礼服であったことを『守貞漫稿』などでは紹介している。
「繡箔」の着用は身分の高い女性ということが言葉の考察により確認ができた。

また、「慶長小袖」とこれらの言葉の結びつきは、戦後の研究者が論文などで紹介をしており、そ
の中では、「地無」という言葉と結び付けられていることが多いことが確認できる。しかし、江戸時代
の随筆にかかれた「地無」と「繡箔」の意味を、文字情報のみで検証することは、限界があるが一つ
一つ考察していくことにより、「慶長小袖」と呼ばれる染織品と結び付けられていることを確認するこ
とができる。ただ、「地無」は江戸初期の一部の文献では、練緯の地の染織品をさし、箔を使用しな
いことも示唆されていることから、「地無」という言葉だけで現在の「慶長小袖」とイコールとはみなし
難い。また、「繡箔」という言葉は、刺繡と摺箔という技法を意味していることから、その指し示す染
織品は「慶長小袖」にとどまらず、比較的、多い。そのため、「地無」と「繡箔」という言葉が重なって、
「慶長小袖」の指し示す染織品により近くなるのではなかろうかと考えられる。

しかし、前章でも述べたとおり、澤田和人による新たな見解がだされたことにより⁶⁷、今まで、注視
されてこなかった黒の練緯の地色の「慶長小袖」を「慶長小袖」として検討する必要性がでてきた。
練緯か綸子かという生地の違いを基に、「慶長」頃に実際にどんな染織品が製作されているのを考
察するのは難しい。しかし、この章で取り上げた『雁金屋御画帖』で、「慶長小袖」の江戸時代の呼
称が「地無」であるとするならば、地は練緯のものにのみ「地無」という言葉がかかれていますので、練
緯の地に地が無いという意味であろうと考えるのが妥当である。そう考えると、本来の「慶長」の頃の
小袖は次節でとりあげる地が全て染めや刺繡や摺箔で埋め尽くされた黒の練緯の染織品なので
はないのであろうか。このことは、澤田和人の慶長年間の銘のある小袖とも結びつけられるのでは

ないかと考える。

第4節 実際に慶長年間に製作されたと考えられる小袖

(1) 明治時代以降の文献などで慶長年間の製作とされる染織品

明治 39 年(1906)に出された『京都美術』⁶⁸第 3 号に紹介されている「慶長年代染繡裂」には、

○慶長年代染繡裂

某君所藏

此裂某家に傳へ瑞泉寺の襲藏と比較對照して慶長年代の所製と認むる所なり、地は撰糸の優等品にて濃紫に六瓣花を置き扁額を散布す、是亦岩佐又兵衛筆と稱する古畫に往々見る處の模様にして其時代を認むる一證ともすべきなり、纈纈を染法に施こし額縁及び菊花を刺繡とす、染繡相埃ち當時の光彩陸離たるを想像さるゝものなり⁶⁹

とあり、模写した「慶長年代染繡裂」(図 2・4)が掲載されている。この「慶長年代染繡裂」がどのような染織品であるのかといえば、濃い紫であること、染は纈纈、額縁と菊の花は刺繡であること、すなわち地を染めると同時に鹿の子絞りをしている。また、刺繡もしている。また、岩佐又兵衛の風俗画に描かれた模様との検証により、慶長年代としているのである。



図 2・4 慶長年代染繡裂

『京都美術』内 資料提供:国立国会図書館

さらに、大正 3 年(1914)5 月 20 日、芸艸堂より『微古帖 一』⁷⁰が発刊される。大正 6(1917)年 10 月 15 日に 10 冊目(図 2-5)が発刊されている。全てにおいて序・目次・奥付けなどの文字情報が一切ないものの、様々な工芸品の模写をしていることは確認できる。様々な工芸品とは陶磁器や金工など多岐にわたり、染織品も模写されている。特筆すべきは、染織品に「慶長裂」「宝暦裂」(図 2-6)「元禄裂」(図 2-7)などといった時代判定とも読み取れる文字情報が掲載されている事である。第 10 巻⁷¹の中に田村春曉の模写による「慶長裂」の模写(図 2-8)が掲載されている。この裂の所蔵者や生地については、わからないものの、この図版から、「慶長裂」は、おそらく黒紅の地色に刺繍と鹿の子絞りによる染織品であろう。この一点だけで、「慶長裂」の指し示す染織品を確定することはできないものの、なんらかの「慶長裂」に関する考え方があるのではないかと推測できる。また、この時点の「慶長裂」は現在の黒紅・紅・白に染め分けた「慶長小袖」と呼ばれる染織品ではないことが確認できる。



図 2-5 『微古帖十』表紙



図 2-6 同 宝暦裂(『微古帖 十』内)



図 2-7 同 元禄裂(『微古帖 十』内)



図 2-8 同 慶長裂(『微古帖 十』内)

これらを検証するにあたり、小山弓弦葉による「辻が花」の次のような分類を参考にする。

- ①萌黄色の地色に草花などの描絵模様を配したデザイン
- ②松皮菱や島形、雲形の枠(松皮取・島取・雲取)を紅色や萌黄色に染め分け、その中を松皮菱や襷といった幾何学的模様、あるいは草花などの具象的模様で埋め尽くしたデザイン
- ③茶色(あるいは紫)の地色に、段を表したり、扇面や円、短冊などを散らしたりしたデザイン
- ④浅葱色または浅葱色・紫・白の染め分けで地色を表し、模様を散らしたデザイン
- ⑤紫や茶色といった濃い地色に草花や動物・波といった模様をちらしたデザイン
- ⑥白地あるいは水浅葱地に草花などの模様を表したデザイン⁷²

この分類の中の③には、これから論じる練緯の生地黒や紫、繡箔の技法を使用した染織品が含まれている。さらに、小山弓弦葉は「妙徳尼像[後藤徳乗夫人像]」を指し示し、従来の「辻が花」とよばれる染織品の中に、本来の「慶長小袖」が含まれるのではないかと述べているので、その部分を引用する。

後藤徳乗(天文十七年<一五四八>—寛永八年<一六三一>)は幕府の大判座の役人で代々室町幕府に仕える彫金師の家柄で、秀吉に重用された。その夫人の肖像に慶長十五年(一六一〇)に没したという贅が入る。(中略)武家女性で慶長年間の例である。タイプ③のデザインを辻が花と認めないとする研究者もいれば、「末期辻が花」と称することもあるが、技法としては刺繡と金箔で模様を表した縫箔と呼ばれる慶長年間の衣裳である。現在では、黒・紅・白で複雑な染め分けを施し、吉祥模様を主題とする細かい刺繡模様と金摺箔による模様で地を埋め尽くすように模様を表した江戸時代前期の地無小袖を「慶長小袖」と称する慣例があるが、本来はこのデザイン様式こそが慶長期の武家女性が着用した縫箔の様式であり、「慶長小袖」と呼ぶにふさわしいものであろう。⁷³

(2) 慶長年間に製作されたと考えられる小袖

慶長年間に製作された可能性がある小袖のうち、練緯の染織品は、「三龍胆車に草花文様振袖」(図 2-9)、「重要文化財 紫地段花菱円文散草花模様縫箔小袖」(図 2-10)の 2 つである。これらは、桃山時代から慶長期への移行期の染織品とされているものの、「慶長小袖」として文献で紹介されるかといえ、まちまちである。さらに、「重要文化財 紫地段花菱円文散草花模様縫箔小袖」については、「辻が花」とよばれる染織品群に含める研究者もいる⁷⁴。先行研究では、黒という地色や形態などから考察されることが多いが、黒(紫)の練緯という視点で考察を試みる。

「三龍胆車に草花文様振袖」は法隆寺の収蔵品である。この小袖は少なくとも、2 度展覧会に出品されていることが確認できる。

1 度目は、平成 13 年(2001)に京都国立博物館の「花洛のモード」の展覧会にて出品されている。展覧会図録も作成され、その後思文閣より豪華本が出版され、その中に河上繁樹による作品解説が掲載されている。それを引用すると

少女の振袖であらう、肩上げがそのまま残っている。黒の練貫地に、金摺箔の霞文を置き、あるいは雲形や不定形の区画を設けて小さな花を刺繍したり、小桜や木瓜唐草、渦巻き卍繋ぎなどを摺箔であらわし、さらに鹿の子絞りによって三龍胆車を散らす。細かいながらも花文様は、裏に糸をまわさない桃山時代以来の刺繍技法を示し、不整形で抽象的な文様取りは、慶長小袖の特徴に通じるが、身幅に比して袖幅の狭い形状は桃山時代の小袖に近く、江戸時代初期の貴重な一領といえよう。⁷⁵

とある。

2 度目は、平成 23 年(2011)京都文化博物館で記載された展覧会「京の小袖ーデザインにみる日本のエレガンス」である。この展覧会を監修したのは切畑健である。ここで切畑健は、

この種の小袖をその文様施工を地の見えなくなるほど詰めるところから「地無小袖」とよぶ。これはまさにその呼び名のとおりの一領である。特色のある鹿の子絞りの上紋を散らし、次に不整形な取形で構図を決定し、その内に雲形を配すなど、金摺箔の仕事がつづく。雲形の内には各種の小紋箔を詰めるようにあらわしている。さらに刺繍文様をこれも繡詰める。ここでも金と紅のきわだつ桃山時代以来の伝統を、黒地で受け止めるという、この時代の特徴をうかがわせている。伝統と新様の出会いと、やがて新時代様式に統べられる営みが、この小さな小袖ながら、他にも指摘できる。例えば、小文様ながら繡は裏抜繡うらぬきぬいを基本とするが、裏に出る糸が増していることなどである。⁷⁶

とある。これらの作品解説により、練緯の地質に渡し縫いの刺繍と摺箔、鹿の子絞りの技法が使用されていることがわかる。

一方で、「重要文化財 紫地段花菱円文散草花模様縫箔小袖」は現在、静岡県浜松市の平野

美術館の所蔵品である。平野美術館は、平成元年(1988)年に開館した美術館である。現在、平野美術館のホームページの収蔵品紹介には、以下の作品解説が高松良幸(静岡大学情報学部教授)により掲載されている。

茶色がかった紫地に三筋の縞、円形、花菱形などを辻が花風に染め抜き、あるいは染め出し、松竹梅、秋草などの草花文を刺繍と摺箔を併用した縫箔で表す。辻が花、縫箔という桃山期の代表的な染織技法によりながら、数多くの草花をバランスよく配するのは、同時期の染織品に多い大胆華麗な意匠とは異なる。その上品な意匠は、古くより京の西、桂の里に住み、石清水八幡宮などの巫女として宮廷などに仕出した伝統的宗教権威、桂姫(桂女)の晴れの小袖という伝承にふさわしい。

この小袖については、展覧会においての出品歴が多く、「辻が花」と区分されていたこともある。昭和50年(1975)、京都国立博物館で開催された「京の染織美 桃山から江戸まで」でも展示されている。展覧会は切畑健が担当し、作品名称は「段と円に草花文様小袖 一領 桃山時代(紫練貫地 辻ヶ花染 繡箔)」⁷⁷としている。切畑健は、この小袖を辻が花と区分していた。

その後、河上繁樹は平成13年(2001)に京都国立博物館の「花洛のモード」の展覧会にて紹介している。その時の作品解説を引用する。

この小袖は桂女^{かつらめ}の衣裳として伝えられた。洛西、桂の里には巫女の家系があり、洛中の貴顕に招かれて安産を祈ったり、婚礼などの慶事をこたほいだ。その巫女を桂女とか桂姫^{かつらひめ}と呼んだ。

いまは変色してほとんど茶色に見えるが、もとは紫色の華やかな色を呈していたと思われる。白く染め抜いた三本の細い筋や円文、花菱の輪郭、襷の文様に辻が花染と同様の絞り染めの技法がみられるが、すでに絞りは積極的に文様のかたちを表現しようとはせず、刺繍の文様に場を提供する役割を果たすに留まっている。文様の表現は刺繍と摺箔が主体となり、しかも刺繍の文様は絞り染の区画のなかにこじんまりとまとまろうとする。こうした傾向は慶長期に入ってからのものであろう。この一領には慶長小袖という新たな様式の小袖へ移行行く過渡的な様相がみられる。⁷⁸

とあり、河上繁樹は、この小袖を「辻が花」とはしていない。

黒や紫の練緯の小袖の形をした染織遺品はこの2点しか確認できないものの、裂のかたちの染織品は存在し、各所に保管されている。



図 2-9 三龍胆車に草花文様振袖 法隆寺蔵 写真提供: 便利堂



図 2-10 重要文化財 紫地段花菱円文散草花模様縫箔小袖
平野美術館蔵 京都国立博物館寄託

(3) 慶長年間製作と考えられる小袖裂

ここからは、「慶長小袖」と呼ばれる染織品がすくないことから、「慶長裂」にも研究範囲を広げることにより慶長期の染織品について調査する。澤田和人の研究や「雁金屋資料」、『京都美術』によると、慶長期の染織品は黒、紫で練緯のものであるということを前提に、練緯の黒、紫の裂を検証してみる。

まず、松坂屋コレクションの裂で検証してみる。これらの作品名称や時代判定は、旧蔵者からの情報が記載されているため、記載情報に統一性がないものの、昭和戦前期の情報であるため、貴重なものである。その中で、生地の記事がないが、実物を調査することにより練緯の生地の黒や紫の裂を見出すことができる。

そこで、ここからは、松坂屋コレクションの「慶長裂」を基に各所に保管されている練緯の慶長裂を色ごとに検証する。裂は小袖と異なり、図版などで紹介される機会がすくないが、可能な限り検証してみる。まず、松坂屋コレクションの中の練緯の生地で、紫の地色で繡箔の技法を使用した染織品について述べ、次に黒、紅の順で述べる。

では、「重要文化財 紫地段花菱円文散草花模様縫箔小袖」のような裂が松坂屋コレクションの中にあるのだろうかと調査すると共裂で2点存在していることが確認できる。

松坂屋コレクションの「扇面短冊文様」(図 2-11)と「茶絹地枝垂桜に扇面短冊文様」(図 2-12)は、共裂である。この共裂は東京国立博物館(図 2-13)や女子美術大学美術館⁷⁹(図 2-14)にも所蔵されている。それらは、茶地と名称がついているものの、本来は紫の染織品である⁸⁰。これら4つの裂をつなぎ合わせると、おそらく、「重要文化財 紫地段花菱円文散草花模様縫箔小袖」のような小袖になるであろう。



図 2-11 扇面短冊文様 松坂屋コレクション



図 2-12 茶絹地枝垂桜に扇面短冊文様 松坂屋コレクション



図 2-13 短冊扇散模様辻が花染裂 東京国立博物館蔵



図 2-14 扇短冊竹桜模様 女子美術大学美術館蔵 画像提供:女子美術大学美術館

「扇藤模様裂」(女子美術大学美術館)(図 2-15)、「桐貝段替模様」(松坂屋コレクション)(図 2-16)は共裂をみいだせないものの、練緯のものであるし、繻箔の技法を使用している。この裂のみでの検証は難しいものの、茶色の練緯で繻箔の技法の染織品である。



図 2-15 扇藤模様裂 女子美術大学美術館蔵 画像提供:女子美術大学美術館



図 2-16 桐貝段替模様 松坂屋コレクション

一方で、刺繍はされているものの、地色は紫で、摺箔の技法の使用されていない「桜藤に地紙文慶長裂」(ぎをん齋藤蔵)(図 2-17)もある⁸¹。



図 2-17 桜藤に地紙文慶長裂 ギをん齋藤蔵

また、「濃茶地雲取に梅鶯文様」松坂屋コレクション(名古屋市博物館蔵)(図 2-18)、「秋草文様(掛物解)」松坂屋コレクション(名古屋市博物館)(図 2-19)も茶色の地色で練緯、繡箔の技法の裂である。



図 2-18 濃茶地雲取に梅鶯文様 松坂屋コレクション(名古屋市博物館蔵)



図 2-19 秋草文様(掛物解) 松坂屋コレクション(名古屋市博物館蔵)

また、黒の地色のものも複数裂が存在する。「黒地田毎文様」松坂屋コレクション(名古屋市博物館蔵)(図 2-20)「田毎文様」図 2-21)が、共裂である。



図 2-20 黒地田毎文様 松坂屋コレクション(名古屋市博物館蔵)



図 2-21 田毎文様 松坂屋コレクション(名古屋市博物館蔵)

さらに、黒色の練緯地では、「黒綸子地雪輪地苺文様」松坂屋コレクション(名古屋市博物館蔵)(図 2-22)(作品タイトルに綸子とあるが実見すると練緯である)と「黒絹地苺に鹿子小花房文様」松坂屋コレクション(名古屋市博物館蔵)(図 2-23)の共裂を個人蔵の「雪輪壺文様裂」(図 2-24、図 2-25)に見出すこと⁸²ができる。これには、刺繍と摺箔が確認できる。また鹿の子絞りもある。そのことにより、法隆寺蔵の「三龍胆車に草花文様振袖」と同じ様式と考えられるものである。



図 2-22 黒綸子地雪輪地苺文様 松坂屋コレクション(名古屋市博物館蔵)



図 2-23 黒絹地苺に鹿子小花房文様 松坂屋コレクション(名古屋市博物館蔵)



17 雪輪壺文様裂 江戸時代初期
Cloth segment with *tsubotare* vertical design and snow rings. Early Edo period, 17th century.

图 2-24 雪輪壺文様裂」個人蔵



18 雪輪壺垂文様裂 江戸時代初期
Cloth segment with *tsubotare* vertical design and snow rings.
Early Edo period, 17th century.

图 2-25 雪輪壺文様裂 個人蔵

また、この裂は、旧松坂屋京都染織参考館の所蔵品で、現在、関西学院大学博物館所蔵となっている「小袖裂 黒地雲取菊梅文様」(図2-26)である。この共裂は現存品ではみいだせないものの、大正14年(1925)の『花小袖』のなかで水上香邨所蔵品に共裂と考えることができる染織品(図2-27)があるため、この裂も小袖裂とかんがえることができるであろう。そして、この裂も生地は練緯である⁸³。そして、『花小袖』には、精好とあるので、この共裂でまちがいないであろう。そうすると、練緯の生地、黒色で、刺繍、摺箔、鹿の子絞りの技法を使用した法隆寺所蔵の三龍胆車に草花文様振袖と同じグループにいれられる染織品であり、澤田和人の見出した慶長8年(1603)の銘のある裂とも同じ系統に分類される要素をもつものである。



図 2-26 小袖裂 黒地雲取菊梅文様 関西学院大学博物館蔵
画像提供: 関西学院大学博物館



図 2-27 15 雲取菊梅(慶長)精好地 『花小袖』内

また、黒や紫ではないが、練緯で紅に刺繍と鹿の子絞りの裂もあり、「紅平絹地土坡に松桐桜模様小袖裂」東京国立博物館蔵(図 2-28)、「岩に百花模様裂」松坂屋コレクション(図 2-29)、「松梅に秋草文様裂」個人蔵(図 2-30)、「岩に百花文慶長裂」ぎをん斎藤蔵(図 2-31)にそれぞれ共裂がある。その為、一領の小袖であったと考えられる。これには、鹿の子絞りはあるものの、摺箔はほどこされていない。しかし、この染織品は、文様表現に少し、特徴があると考えられる。刺繍や鹿の子絞りが全体に散らされているが、個々の文様が小さいことである。このような、特徴を持つ小袖、小袖裂を他に見出すことができないため、検証は難しい。しかし、「辻が花」「慶長小袖」と呼ばれる染織品ではない。



図 2-28 紅平絹地土坡に松桐桜模様小袖裂 東京国立博物館蔵



図 2-29 岩に百花模様裂 松坂屋コレクション



図 2-30 松梅に秋草文様裂 個人蔵



図 2-31 岩に百花文慶長裂 ぎをん齋藤蔵

これらからわかることは、「慶長小袖」の特徴である刺繍、一部は鹿の子絞りや摺箔を持ちえる染織品が練緯の生地には施されている染織品が存在していたことである。このことだけで、検証することは難しいが、「慶長小袖」の江戸時代の呼称とされる「地無」という言葉が、「雁金屋資料」の中で、練緯の地のものにしか使用されていなかったことにつながるのではないだろうか。そう考えると、この「雁金屋資料」の記録が元和 9 年(1623)であることから、元和の頃にも、練緯の生地で「慶長小袖」様式をもちえた染織品が製作され、着用されていたと考えられるであろう。そうすると、現在の小

袖変遷の中に、一つの様式として入れ込むことができないだろうか。一様式として入れ込むことができなかったとしても、過渡期にそのことにより、現状、「桃山小袖」から「慶長小袖」への劇的な変化とされる小袖変遷が少し緩やかに変化していることになるのであろう。

第4節 まとめ

近年の小山弓弦葉の「辻が花」や澤田和人の「慶長小袖」の研究により、先行研究は覆された。本稿では、その研究を基盤に、現在の小袖変遷の中の「辻が花」と「慶長小袖」の概念を一旦、取り払い、練緯の生地、紫や黒というくりにして染織品を検証した。そうすると、従来、「辻が花」と分類される裂の中に紫や黒の練緯の染織品を見出すことができる。それらは、刺繍、摺箔などの技法も使用しているし、鹿の子絞りも使用されているものもある。しかし、それらを「辻が花」と分類しなければ、あらたな黒や紫に地色を染め、刺繍や摺箔の技法を使用した染織品のグループがひとつできるだろう。それこそが、本来の慶長期の染織品であると仮定すると、現在の小袖変遷の中で変化が激しいとされた桃山時代から江戸時代初期に一つの様式として加わることができるのではないだろうか。そのことにより、そのあと、現在、典型的とされる「慶長小袖」の染織品が誕生し、小袖様式を導いたのではないだろうか。

実際に、塚本瑞代による『雁金屋御画帖の研究』⁸⁴から、万治4年(1661)の『御画帖』には綸子の生地はあるものの、練緯はなく、黒紅や、紅の小袖が多いことから、この万治4年(1661)の頃には、おそらく練緯はつかわれていないと推測される。

その中で、現在のいわゆる「慶長小袖」といわれる染織品はどこに位置づけられるのだろうか。「寛文小袖」とよばれる染織品との違いを見出す必要性を感じた。

1 河上繁樹「慶長小袖の系譜—その成立と展開—」、『MUSEUM』、383号、東京国立博物館、1983年、4ページ。

2 そもそも、「ぬいはく」の漢字は「繡箔」か「縫箔」なのかという疑問はあるが、文献や研究者の中でその差について明確に論じられてはいない。日本で室町時代以降一般的に使われている「縫」の字は、「生地の上で糸が合う、布を合わせる」という意味である。日本において、刺繍は中国の影響を強く受けていて工芸的な意味を持つ。そのため縫い合わせることでない刺繍は繡うという字を使用することを丸山伸彦武蔵大学教授よりご教示頂いた。その為、文献からの引用部分は使用された文字を使用し、それ以外は本来の意味である「繡箔」の漢字を使用した。

3 今永清士「重要文化財 染分四季花鳥模様縫箔小袖」、『MUSEUM』、163号、東京国立博物館、1964年、26～28ページ。

4 今永清士 前掲註3、26ページ。

5 山辺知行「小袖染織における 地と文様について」、『MUSEUM』、188号、東京国立博物館、1966年、24ページ。

6 北村哲郎「染織における江戸初期—慶長繡箔考—」、『MUSEUM』、271号、東京国立博物館、1973年、4～5ページ。

7 河上繁樹は註1内4ページにて「生地^{じな}の全面に摺箔・刺繍・絞りによる細かな模様が施されていることから、俗に「地無」と呼ばれる」とのべている。

-
- 8 丸山伸彦は、「慶長小袖から寛文小袖へ—17 世紀の服飾史における劇的な変化」の中で「文様は、地が見えないくらい密に施され、いわゆる「地無し」としている。(『日本美術全集 12 狩野派と遊楽図』、小学館、2014 年、202 ページ)
- 9 長崎巖 『きものと裂のことば案内』、小学館、2005 年、28 ページ。
- 10 「雁金屋資料」については山内まみ・片岸博子「慶長小袖に関する一考察」(第 1 章註 38)を参照した。『色道大鏡』、『萬の文反古』については切畑健氏にご教示いただいた。
- 11 藤本箕山 『色道大鏡』、八木書店、2006 年。
藤本箕山は生没年が寛永 3 年(1626)から宝永元年(1704)とされている。いつから、『色道大鏡』を書いていたのかは定かでないため、成立期を特定することは難しい。ただ、論文構成上、江戸時代初期の文献として紹介したく、あえて生没年を記載した。
- 12 藤村作 『評釋 西鶴全集 第 1 卷』、至文堂 1947 年。
- 13 山根有三 『小西家旧蔵 光琳関係資料とその研究』、中央公論美術出版、1961 年、序。
- 14 山根有三 前掲註 13、序。
- 15 塚本瑞代 『雁金屋御面帖の研究—小西家伝来尾形光琳関係資料にみる小袖文様—』、中央公論美術出版、2011 年。
- 16 森理恵 「雁金屋『慶長七年御染地之帳』にみる衣服の性別」、『風俗史学』、9 号、1999 年、22 ページ。
- 17 山根有三 前掲註 13、22 ページ。
- 18 山根有三 前掲註 13、32 ページ。
- 19 京都国立博物館 『花洛のモード きものの時代』、思文閣出版、2001 年、340 ページ。
- 20 国立歴史民俗博物館 『[染]と[織]の肖像—日本と韓国・守り伝えられた染織品』、国立歴史民俗博物館、2008 年、18 ページ。
- 21 山根有三 前掲註 13、35 ページ。
- 22 山根有三 前掲註 13、39～40 ページ。
- 23 藤本箕山 『新版 色道大鏡』、八木書店、2006 年、解題 12 ページ。
- 24 藤本箕山 前掲註 23、82 ページ。
- 25 藤本箕山 前掲註 23、145～146 ページ。
- 26 竹内誠・深井雅海 『日本近世人名辞典』、吉川弘文館、2005 年、97～98 ページ。
- 27 広嶋進 「西鶴の遺稿作品」、谷脇理史・西島孜哉編集『西鶴を学ぶ人のために』内、世界思想社、1993 年、189～202 ページ。
- 28 藤村作 前掲註 12、307 ページ。
- 29 藤村作 前掲註 12、309 ページ。
- 30 『むかしむかし物語』は野村正治郎『友禅研究』(芸艸堂 1922 年)、『譚海』は山内まみ・片岸博子「慶長小袖に関する一考察」(第 1 章註 38)を参照した。『近代奇跡考』、『近代風俗志(守貞漫稿)』については切畑健氏にご教示いただいた。
- 31 財津種菜 「むかしむかし物語」、森銑三・北川博邦監修『続日本随筆大成 別巻 近世風俗見聞集1』、吉川弘文館、1981 年。
- 32 津村正恭(斉藤松太郎、古賀彦太郎校閲)『譚海』、国書刊行会、1970 年。
- 33 山東京伝 『近世奇跡考』、日本随筆大成編集部『日本随筆大成(第二期)6』、吉川弘文館、1974 年。
- 34 喜田川守貞(宇佐美英樹校訂)『近世風俗志(三)(守貞謄稿)』、岩波書店、1999 年。
- 35 森銑三・北川博邦監修 前掲註 31 の書きだしに「齢ひ八十におよびたれば、七十年來の事見及び聞および、又其頃に近き十年式拾年の事聞伝え・・・」とある。

-
- 36 財津種菜(森銑三・北川博邦監修) 前掲註 31、35 ページ。
- 37 財津種菜(森銑三・北川博邦監修) 前掲註 31、36～38 ページ。
- 38 財津種菜(森銑三・北川博邦監修) 前掲註 31、64 ページ。
- 39 津村正恭(斉藤松太郎、古賀彦太郎校閲) 前掲註 32、例言内。
- 40 津村正恭(斉藤松太郎、古賀彦太郎校閲) 前掲註 32、464 ページ。
- 41 山東京伝(日本随筆大成編集部編) 前掲註 33、266～271 ページ。
- 42 喜田川守貞(宇佐美英樹校訂) 前掲註 32、26～27 ページ。
- 43 莊加直子 「「慶長小袖」の研究史に関する一考察—『慶長風俗展覧会図録』と『桃山慶長 繡
繡精華』を中心に—」、日本女子大学大学院紀要 22 号、日本女子大学大学院家政学研究科・人
間生活学研究科、2015 年、37～47 ページ。
- 44 野村正治郎 『友禅研究』、芸艸堂、1922 年。
- 45 野村正治郎 前掲註 44、126 ページ。
- 46 野村正治郎 前掲註 44、127～128 ページ。
- 47 莊加直子 前掲註 43。
- 48 野村正治郎 前掲註 44、128 ページ。
- 49 野村正治郎 前掲註 44、129 ページ。
- 50 江馬務 「日本風俗史」、『江馬務著作集』、第 1 卷、中央公論社、1975 年。(初出は 1932 年、
新樹社)
- 51 江馬務 前掲註 50、180 ページ。
- 52 岡田三郎助 『時代裂拾遺』、座右寶刊行會、1935 年。
- 53 石澤正男 『時代衣装展覧目録』、東洋美術國際研究會、1942 年。
- 54 岸本景春 『綵霞帖』、芸艸堂、1928 年。
- 55 泉俊秀 『日本染織商工史』、商業研究資料編集所、1933 年。
- 56 小山弓弦葉 『「辻が花」の誕生 〈ことば〉と〈染織技法〉をめぐる文化資源学』、東京大学出版
会、2012 年、234～239 ページ。
- 57 今永清士 前掲註 3、26 ページ。
- 58 山辺知行 前掲註 5、24 ページ。
- 59 山辺知行 前掲註 5、24 ページ。
- 60 北村哲郎 前掲註 6、4～13 ページ。
- 61 徳蔵きみ 「衣服の文様について(2)—慶長小袖と寛文小袖を中心として—」、『茨城大学教育
学部紀要』、25 号、茨城大学教育学部、1975 年、151 ページ。
- 62 河上繁樹 「慶長小袖の系譜—その成立と展開—」、『MUSEUM』、383 号、東京国立博物館、
1983 年、4 ページ。
- 63 丸山伸彦 「近世前期小袖意匠の系譜—寛文小袖に至る二つの系統—」、『国立歴史民俗博
物館研究報告』、第 11 集、国立歴史民俗博物館、1986 年、203 ページ。
- 64 山内まみ・片岸博子 「慶長小袖に関する一考察」、『日本服飾学会誌』、5 号、日本服飾学会
1986 年、5 ページ。
- 65 丸山伸彦 『江戸のきものと衣生活』、小学館、2007 年、20 ページ。
- 66 長崎巖 『きものと裂の言葉案内』、小学館、2005 年、28 ページ。
- 67 澤田和人 「「慶長小袖」の時代性—中国・韓国の染織品と比較して—」、『アジア遊学』、123 号、
2010 年、214～228 ページ。
- 68 神坂雪佳 『京都美術』、第 3 号、京都美術協會事務所、1906 年。
- 69 神坂雪佳 前掲註 68、15 ページ。
- 70 吉川雅喬 『微古帖』、第 1 卷、芸艸堂、1914 年。
- 71 吉川雅喬 『微古帖』、第 10 卷、芸艸堂、1917 年。

-
- 72 小山弓弦葉 前掲註 56、106 ページ。
- 73 小山弓弦葉 前掲註 56、135～136 ページ。
- 74 切畑健は『辻が花』（京都書院 1983 年）の図版 98 でこの小袖を「辻が花」として紹介している。1975 年に京都国立博物館で開催した『京の染織の美』展の図版 6 にもこの小袖を掲載している。作品解説に、「紫練緯地 辻ヶ花染 繡箔」と書いている。
- 75 京都国立博物館 『花洛のモード』、思文閣出版、2001 年、436 ページ。
- 76 京都文化博物館・毎日新聞社 『京の小袖—デザインにみる日本のエレガンス』、2011 年、233 ページ。
- 77 京都商工会議所 『京の染織の美 桃山から江戸まで』、1975 年、178 ページ。
- 78 京都国立博物館 前掲註 75、433 ページ。
- 79 切畑健 『辻が花』、京都書院、1983 年（前掲註 74）の図版番号 99、100 である。99 はこの書籍の出版時、大阪・鐘紡株式会社蔵とあり、現在は女子美術大学美術館の所蔵品となっている。
- 80 女子美術大学美術館にて、当該裂を調査時に、東京国立博物館小山弓弦葉工芸室長に顕微鏡カメラにて、みせていただいた。その際、経糸は紫であった。その際、練緯の経糸は精鍊されていないため、色が残りやすいとご教示いただいた。
- 81 斎藤貞一郎 『布の道標』、紫紅社、2014 年。
- 82 朝日新聞社 『かがやける小袖の美 田畑家コレクション』、1990 年、26 ページ内図版 17、18 の「雪輪壺垂文様裂」である。
- 83 関西学院大学博物館 高木香奈子氏にご教示いただいた。
- 84 塚本瑞代 前掲註 15。

第3章 近代染織・服飾研究史と「慶長小袖」の成立

第1節 はじめに

ここからは、染織・服飾の研究史の成立について検証し、その中で染織品が調査・研究され、分類されていく過程を考察する。そして、どのように「慶長小袖」という小袖様式の問題が生み出され、学術用語として認識されたのかを明らかにする。

まず、「慶長小袖」という言葉が辞書にどのように記載されているのかであるが、染織をテーマに辞書が作られ始めたのは昭和に入ってからである。その始まりは、昭和 6 年(1931)、日本織物新聞社編集部による『染織辞典』¹であろう。ここには「慶長小袖」に関する記載はなく、昭和 49 年(1974)にこの辞書の復刻版²が出されたが、ここにも「慶長小袖」の記載はない。そのような中で、昭和 52 年(1977)に板倉寿郎、野村喜八、元井能、吉川清兵衛、吉田光邦の監修により出された『原色染織大辞典』³には「慶長小袖」がとりあげられ、次のように紹介されている。

けいちょうこそで 慶長小袖 慶長年間(一五九六～一六一五)を中心に作製され、特色ある文様構成を持つ小袖。文様構成は小袖全面をいくつかの円形・方形・三角形・菱形その他の形で区切り、紅・白・黒で染め分け、その中に草花・鳥・器物など各種の文様をかなり細密に配置する。染織技法は摺箔・縫・絞など当時あったものをすべて駆使し、豪放・多彩・細密の印象を与えるデザイン。⁴

この辞典の刊行は、基本方針の決定が昭和 47 年(1972)、執筆開始は昭和 49 年(1974)頃、最終入稿が昭和 51 年(1976)ということ⁵から、「慶長小袖」という言葉は、この時点で、染織用語として確立していたことがわかる。また、先行研究における「慶長小袖」の地色や文様や技法についての記述とおおよそ、同じ見解が示されていることから、「慶長小袖」に関する一定の理解が定着しているといえるだろう。一方で、ほぼ、同じ時期に出された、上村六郎・辻合喜代太郎・辻村次郎により編集された『日本染織辞典』⁶には、「慶長小袖」の記載はない。その後、昭和 62 年(1987)、中江克己による『染織辞典』⁷には「慶長小袖」の記載があり、次のように紹介されている。

慶長小袖(けいちょうこそで) 慶長年間(一五九六～一六一五)、つまり桃山末期から江戸時代初期にかけて流行した小袖で、独特の文様構成の美しさを持っている。絢爛豪華な桃山美術の影響を受けて作られた小袖で、小袖全体を絞、刺繍、摺箔などの技法を総合して埋めつくす。模様はきわめて精緻であり、しかも抽象的だが、全体から受ける印象は豪華で美術的である。これを「慶長模様」という。また、刺繍と摺箔を効果的に用い、特徴的な美を生み出しているところから「慶長摺箔」とも称する。さらには小袖全体が模様で埋めつくされ、地が見えないので、「地無し小袖」ともいう。明暦三年(一六五七)、十万人の焼死者を出したという振袖火事によって江戸の町は疲弊し、寛文八年(一六六八)には儉約令が出されて、手間と費用のかかる慶長小袖は作られなくなった。しかし、染織美の一典型といつてよく、現在の豪華な振

袖などにその伝統美は息づいている。⁸

この、中江克己の『染織辞典』では、「地無し」や「繡箔」についても言及していることが、『原色染織大辞典』との違いであり、これらの言葉が「慶長小袖」と同等にあつかわれている。この時点で、現在の「慶長小袖」という言葉についての認識が確定されていることが確認できる。

このことをふまえ、本章では、明治時代以降において、染織・服飾研究が、近代、いつどのように確立し、どのように今日まで引き継がれてきているのかという事を明らかにしたい。第1章第3節で述べたように、近代染織研究史について詳しく述べられた先行研究はすくない。ただし、昭和8年(1933)、和田辰雄の『日本服装史』⁹は、服飾研究の沿革について述べていることから、戦前に、染織・服飾の研究についての考察がなされていた。この和田辰雄の研究についてはわからない部分も多いので、掘り下げて検証することが難しいが、後で戦前の研究の中で検証する。

すくない先行研究の中で、近年、小山弓弦葉が『「辻が花」の誕生〈ことば〉と〈染織技法〉をめぐる文化資源学』¹⁰の中で「辻が花」を中心に明治時代に日本において染織・服飾史がどのように発展したのかについて詳しく論じている。この論考では「美術史という研究分野の枠組の中で、染織史という分野がいつから始まったのかを明確に述べることは難しい」¹¹としつつも、明治33年(1900)に東京国立博物館の前身である東京帝室博物館の組織編成について論じている。

東京帝室博物館では「工芸部」が廃止され「歴史」「美術」「美術工芸」「天産」の四部に改められる。染織については、名物裂や更紗、コブト裂などは「美術工芸」に区分されるが、明治十年に頒布された正倉院裂は歴史部第三区「奈良時代の遺物」に、装束や小袖類といった服飾の形態を持った古染織は歴史部第六区の「服飾」に分類されてきたように「美術工芸」としては認識されなかった。美術工芸部の第四区に織製品があり、第一類・紋綾、第二類・刺繍、第三類・友禅、印花、纈纈と分類されている。¹²

すなわち、明治30年代には、一定の研究蓄積があり、染織品の分類がなされたのではないかと考えられる。

そこで、明治時代以降に出された、冊子・書籍など文献の記述をもとに、明治時代以降に染織品がどのように取り扱われ、染織・服飾研究がどのように行われ、どのように染織・服飾研究が成立していったのかを検証する。この検証は、明治時代から昭和戦前期までは、東京と京都において染織・服飾研究へのアプローチなどに違いがあると考え、それぞれについて論じる。その過程において、生み出された「慶長小袖」という学術用語の成立について考察し、明らかにしたいと考える。

第2節 明治時代の東京における染織・服飾研究史

(1) 染織・服飾研究へのはじまりと定着

東京において、染織・服飾研究のはじまりについては、万国博覧会や内國勸業博覧会などの博覧会の開催と、東京国立博物館の前身となる帝国博物館や帝室博物館との関わりが大変重要で

あろうと考える。明治 4 年（1871）に文部省に博物局が設置され、その大きな事業の一つが古器物の保存であった。東京国立博物館百年史には、「古器旧物の保存というこの変動期において最も至難でありまた緊要であった事業が当初から博物館を中心として始められており、また殖産興業と関連して美術工芸の振興にも博物館は大きな役割を果たしていたのである」¹³とある。

「古器物保存」については、明治元年の廃仏毀釈により破壊される寺社の美術品保護の為、明治4年、「古器物保存の布告」を大政官が行った¹⁴。この保存すべき品目の中に

一、布帛ノ類 古金襴並古代ノ布片等

一、衣服服装ノ部 官服 常服 山民ノ服 婦女服飾 櫛簪ノ類 雨傘 雨衣 印籠 巾着 履屐之類¹⁵

と染織品がふくまれている。ようするに、明治 4 年の時点で、染織品は保存しなければならない対象であったことを前提に、染織品がどのように研究という視点でとりあつかわれたのか、そして、それらの研究がどのように広がっていったのかを明治時代におこった研究を目的とする団体などの活動について順番に検証する。

1) 九鬼隆一と小杉楹邨

帝国博物館は明治 22 年（1889）、発足し、明治 33 年（1900）、帝室博物館に改称された¹⁶。九鬼隆一は明治維新の混乱期に荒廃にさらされた日本固有の美術の将来を憂い、各地の社寺や各家所蔵の美術品を調査し、それらの什宝・宝物の保護について画策するところがあったとされ、それが古社寺保存法に制定に力をつくすことにつながったという¹⁷。また、帝国博物館の構想には、九鬼隆一の考えが基礎にあるといい、組織も歴史部・美術部・美術工芸部・工芸部にわけていて、その中に学芸委員を配置している¹⁸。

九鬼隆一は、岡倉覚三やアーネスト・フェノロサらと京都・奈良への古美術調査におとずれているが、その中で注目すべきは、九鬼が宮内省図書頭となった、明治 21 年（1888）の京都の古美術調査の際の同行者が、後の帝国博物館開館時の歴史部長川田剛と、技手小杉楹邨であったことである¹⁹。明治 21（1888）年年 9 月 5 日の日出新聞によると

九鬼圖書頭の一行

去る五月以来美術取調として出張ありし同一行の内丸岡社寺局長は已に去る二日出發九鬼圖書頭は川田文學博士小杉楹邨氏及び官報局の川田徳二郎氏等と共に昨日午前八時四十六分七條停車場發の瀕車にて大津へ向け出發したり夫より九時五十分同地發の瀕船にて長濱へ出發同夜は岐阜にて一泊の上本日名古屋を經東海道を歸京せり又九鬼圖書頭見送りとして七條停車場まで赴きたるものは官吏。議員。會社員。新聞記者。畫工等 20 名許なりし
20（下線筆者）

とある。小杉樞邨は生没年天保 5 年～明治 43 年(1834～1910)の古典学者である。明治 34 年(1901)4 月 26 日に文学博士となった²¹。阿波徳島藩主蜂須賀家陪臣の家に生まれ、明治 7 年(1874)新政府の教部省に出仕、内務省御用掛、修史館掌記、『古事類苑』編纂専務となり、以後、東京大学古典講習科准講師、帝国博物館技手、古社寺保存委員、東京美術学校教授、東京帝国大学文科大学講師、国語伝習所長、東京帝室博物館評議員を歴任した。古典・古美術に造詣が深く、宝物調査・古社寺保存・古典の研究普及に貢献した。『大日本美術史』『微古雑抄』等多くの編著がある²²。また、明治 35 年(1902)、前年に開校した日本女子大学校の教授として美術史と国文学を担当した²³。

現在、染織・服飾分野での先行研究において小杉樞邨へのアプローチはない。そこで、小杉樞邨を他分野からの先行研究を通して考察し、小杉が明治時代にどのような活動をし、どのように染織・服飾研究に携わったのかを、好古社という団体の活動を通し、考察する。

2) 好古社

① 好古社について

好古社は、明治 14 年(1881)に社長である福羽美静と松浦詮、小杉樞邨、井上頼圀らが国粹保存の為に設立したとされる²⁴。設立された当時『好古雑誌』²⁵が発刊され、この時点で社員表が掲載されている。また、好古社による展覧会も上野公園美術協会の列品館で開催し、社員所蔵の古書画などを展示している²⁶。

「好古会」について、機関誌である『好古雑誌』、『好古業誌』、『好古類纂』や明治時代の新聞記事などを辿り、まとめてみると表 3-1 となる。文献にて開催が確認できなかつた時期もあるものの、おそらく毎年二回展覧会が開催されていたことと、会を重ねる毎に演説や出品物の細かい内容まで記録されていることがうかがえる。

好古社による展覧会が、いつから始まったのかについては、明治 15 年(1882)11 月 25 日出版の『好古雑誌』第二編の第 7 号、続く 8 号²⁷、9 号²⁸の 3 回にわたり「秋季好古会記事」の記載がある。「客月廿二日本社秋季會を有樂町神宮教院に開く當日在京諸君及地方社員にして滞在する諸君の臨席せられし」²⁹とあり、出席した社員の名前とともに社長である福羽美静の祝辞と社員側から小中村清矩の答辞が掲載されている。そして、7～9 号に出品された古文書古物類の出品目録が掲載されている。ただし、この時点での出品物は、古文書や古物であり、染織品の出品はない。また、この秋季好古会が何度目の好古会なのかは文献の文字情報で把握することはできないが、明治 14 年(1881)に好古社が設立され、『好古雑誌』の初編第 1 号が明治 14 年 7 月 20 日に出版されていることから、第 7 号に掲載された秋季好古会は回数としてははじめのほうの会であろう。

現状、『好古雑誌』は第三編までしか実見することが出来ず、いつまで発刊されたのか定かではない。明治 17 年(1884)から次に文献上でこの会の記事が確認できる明治 23 年(1890)までの間が現状不明なため、好古会について網羅することは難しい。また、好古社については、明治 33 年(1900)、青山清吉³⁰が再興した³¹とのことである。再興というからには、一時期、何らかの理由で好

古社の活動が停滞していたのであろうと推測されるが、そのことについては現状ではよくわからない。

また、好古社からは、明治 25 年(1892)1 月 31 日(原文ママでは二月三十一日だが、おそらく次号の発刊より前であらうと考えられるのと、一の上に一を重ねて二にしていることから1月 31 日が妥当であらう)に第一編の出版がはじまった『好古業誌』の中にも好古会についての紹介がある。『好古業誌』第一編の中でも好古会については第 19 回好古会記事について明治 24 年(1891)10 月 25 日に秋季好古会を上野公園地内櫻ヶ岡日本美術協会列品館で開いたことが述べられている³²。また、第二編³³や第三編³⁴、第四編³⁵、第五編³⁶までに出品された書画などについて紹介されている。

この『好古業誌』のなかで染織品の出品については、文字情報のみではあるが確認できるのは、明治 27 年(1894)の春季好古会で、園基祥氏所蔵の「小忌衣」である。おそらく、これは、好古会の中で染織品の出品の初出であらう。

また、この後に出版された『好古類纂』(後述)の中でも、好古会記事について述べられている。明治 35 年(1902)の第 37 回においては、宮崎幸麿は、自身の友人である山田業精の所蔵する「婆羅門僧袈裟」を出品し、現在、染織品という分野にくぐられる袈裟が作品として扱われていることがわかる。

さらに、明治 39 年(1906)年 1 月 9 日の朝日新聞では、関保之助所蔵の「神代の服飾」を写生している様子がイラストで描かれている(図 3-1)ことから、おそらく、それ以前の好古会での取材をもとに描かれたものである。なぜ、新聞に掲載された日付けがこの日なのかについては、明治 39 年が好古社にとって創立 25 年の記念の年のはじめだからなのかともかんがえられるが、このイラストに文字情報が殆どないのでわからない。ただ、関保之助はその年から自宅で装束着用写生研究会を定期的に開催している³⁷ことから、好古会のために場所を設けて写生会を催していたと考えられる。そして、明治 39 年 1 月 9 日の新聞掲載日までの「好古会」における何らかの催しにおいて神代の服装が取り上げられていること、それを写生していることが文字情報のみでなく確認できる。



図 3-1 朝日新聞 明治 39 年(1906)1 月 9 日 朝刊 6 面より
資料提供:国立国会図書館

	展覧会名称	名称の表記	会期	会場	展覧会開催の有無	染織品の出品	出典	特記事項
1	秋季好古会		明治15年11月22日		有	無し	好古雑誌(2編7・8・9号)	
2	春季好古会		明治16年4月22日		有	無し	好古雑誌(3編3・4・5号)	
3	秋季好古会		明治16年				好古雑誌(3編9号)	
4								おそらく明治17年春
5								おそらく明治17年秋
6								おそらく明治18年春
7								おそらく明治18年秋
8								おそらく明治19年春
9								おそらく明治19年秋
10								おそらく明治20年春
11								おそらく明治20年秋
12								おそらく明治21年春
13								おそらく明治21年秋
14								おそらく明治22年春
15								おそらく明治22年秋
16								おそらく明治23年春
17	第17回秋季好古会		明治23年10月26日	浅草公園浅草神社事務所	有	不明	読売新聞(明治23年10月20日 朝刊3面)	
18								
19	第19回好古会	無し	明治24年10月25日	上野公園内櫻ヶ岡日本美術協会別館	有	無し	好古雑誌1編(1・2・3号)	
20	第20回好古会	春季好古会	明治25年5月1日	麹町区永田町日枝神社境内星ヶ岡茶寮	有	無し	好古雑誌1編(6・7号)	
21	第21回好古会	秋季好古会	明治25年11月20日	日枝神社	有	無し	好古雑誌1編(12号)2編(1・2・3・4・5)	
22	第22回好古会	春季好古会	明治26年4月23日	日枝神社内星岡茶寮	有	無し(装束図の図版2件出品有)	好古雑誌第2編(5・6・7・8・9・10号)	小杉樗邨演説・儀式や女官の装束図の出品有
23	第23回好古会	秋季会	明治26年10月15日	日枝神社内星岡茶寮	有	不明	好古雑誌第2編(11・12号)	井上頼園の演説有
24	第24会好古会	春季好古会	明治27年5月27日	星丘茶寮	有	有	好古雑誌第3編第5号	小島玄(園基祥氏蔵)1点出品有
25								
26								
27								
28	第28会好古会	秋季好古会	明治29年11月15日	麹町区山王社内なる例の茶寮	有	無し	好古雑誌第6編上	
29	第29会好古会	春季会	明治30年6月27日	麹町区日枝神社なる例の茶寮	有	無し	好古雑誌第6編下	
30	第30会好古会	秋季会	明治30年12月19日	日枝神社境内なる星岡茶寮	有	無し	好古雑誌第7編上	
31								
32								
33								
34								
35	第35回好古会		明治34年5月12日	星ヶ岡茶寮	有	おそらく無し	朝日新聞(明治34年5月14日朝刊2面)	
36		好古会秋季総会	明治34年11月17日	浅草区向柳原町松浦伯爵邸蓬莱園	有	不明(上古以来の核時代の物品)	朝日新聞(明治34年11月13日朝刊3面)	
37	第37回好古会		明治35年4月20日	牛込区小川町	有	有	好古会記事	
38	第38回好古会		明治35年9月24日	上野公園内櫻ヶ岡日本美術協会別館	有	有	好古会記事	
39	第39回好古会		明治36年6月4~10日	上野公園内櫻ヶ岡日本美術協会別館	有	無し	好古会記事	
40	第40回好古会	秋季好古会	明治36年11月21・22日	麹町区有楽町神宮寺齋本部	有	無し	好古雑誌2編第5集好古会記事	
41	第41回好古会		明治37年6月13~20日	上野公園内櫻ヶ岡日本美術協会別館	有	有	好古雑誌2編第5集好古会記事	女官服1点(帝室博物館所蔵)、松浦社長所蔵の上下5点、熨斗目2点、陣羽織1点、片衣1点、松平子爵所蔵26点
42	第42回好古会	秋季好古会	明治37年11月11~13日	上野広小路櫺館	有	無し	好古雑誌2編第6集好古会記事	
43	第43回好古会		明治38年5月24~28日	上野公園内櫻ヶ岡日本美術協会別館	有	有	好古雑誌2編第7集好古会記事	松平子爵所蔵甲冑下着1点
44	第44回好古会		明治38年11月4・5日	本郷区湯島切通し坂上饅祥院	有	無し	好古雑誌2編第11集好古会記事	
45	第45回好古会		明治39年6月10日	神田神社境内開花楼	有	無し	好古雑誌3編第2集好古会記事	
46	第46回好古会		明治39年11月3・4日	本郷区湯島切通し坂上饅祥院	有	無し	好古雑誌3編第4集好古会記事	
47	第47回好古会		明治40年10月17~19日	神田神社境内開花楼	有	無し	好古雑誌3編第11集好古会記事	文学博士木村正綱「帽というものに就いて」
48	第48回好古会		明治41年3月6~9日	上野公園櫻ヶ岡美術協会列品館	有	有	好古会記事	文学博士小杉樗邨「中古以来女装服飾沿革の一斑」、「特別陳列 徳川時代扶助風俗に関する諸品目録」この陳列会には東京帝室博物館蔵の狂言装束6点、松浦社長蔵の衣服・装束などの染織品29件の出品あり
49	第49回好古会						好古雑誌3編第12集好古会記事	
50	第50回好古会	春季大会	明治42年3月4日~7日	上野公園日本美術協会列品館	有	不明	朝日新聞(明治42年2月19日朝刊4面)	

表 3-1 「好古会」について

分野	筆者	掲載号	発刊年	内容(論文名称も含む)
工 藝	小杉 榎 邨	第1編第1集	明治33年9月	織繡染色
		第1編第2集	明治33年12月	刺繡
		第1編第12集	明治36年6月	織繡染色
		第2編第1集	明治36年11月	金襴
	横井時冬	第2編第6集	明治38年4月	茶屋染と友禪染
装 束	黒川真頼	第1編第3集	明治34年4月	服飾大意
	内柴御風	第1編第7集	明治35年4月	木原楯臣直垂考未完
		第1編第9集	明治35年9月	木原楯臣直垂考承前未完
		第1編第10集	明治35年12月	木原楯臣直垂考完結
	小杉 榎 邨	第2編第4集	明治37年6月	雅亮装束抄略解未完
		第2編第6集	明治38年4月	上古衣服未完
		第2編第7集	明治38年5月	上古衣服承前未完
		第2編第8集	明治38年9月	上古衣服承前
		第2編第9集	明治38年11月	女子の衣服未完
		第2編第10集	明治39年2月	女子の衣服承前
風 俗	小杉 榎 邨	第1編第1集	明治33年9月	奈良朝時代の着服の一斑附東寺辛櫃、(散楽圖の中)
		第1編第8集	明治35年7月	女装沿革圖説明
	石本秋園	第1編第7集	明治35年4月	女装沿革
		第1編第9集	明治35年9月	女装沿革
		第1編第10集	明治35年12月	女装沿革
		第1編第11集	明治36年4月	女装沿革
		第2編第1集	明治36年11月	女装沿革
		第2編第7集	明治38年5月	女装沿革承前
		第2編第8集	明治38年9月	女装沿革承前
		拾遺第2編	明治41年12月	女装沿革織田豊臣時代承前完結
	青山清吉	第2編第3集	明治37年4月	時行修容未完
		第2編第11集	明治39年5月	時行修容承前
		第2編第12集	明治39年6月	時行修容承前
		第3編第1集	明治39年8月	時行修容婦女承前未完
		第3編第5集	明治40年6月	時行修容承前未完
		第3編第8集	明治41年1月	時行修容婦女承前未完
		第3編第11集	明治41年7月	時行修容婦女承前未完
		第3編第12集	明治41年9月	時行修容婦女完結
		宮崎幸麿	第1編第12集	女性沿革安永年間婦女の髪かたち
	内藤趾叟	第1編第5集	明治34年9月	徳川家紅葉山御宮社参時第弍圖

表 3-2 『好古類纂』内 染織・服飾に関する論文など

② 好古社からの発刊物『好古類纂』について

『好古類纂』は明治 33 年(1900)～明治 42 年(1909)の間に、第一編から第三編まで各 12 集で 36 冊、拾遺が二編あり、計 38 冊の文献である。この 38 冊の中で、染織・服飾に該当する部分を抜き出すと表 3-2 になる。工芸部類と装束部類と風俗部類である。それらを論じた人について部類ごとに紹介すると以下である。

工芸部類：小杉榎邨、横井時冬³⁸

装束部類：小杉榎邨、黒川真頼³⁹、内柴御風

風俗部類：小杉榎邨、内藤趾叟⁴⁰、石本秋園(模写のみ)、宮崎幸麿⁴¹、青山清吉

かかわった人のなかで、3 つの部類すべてに論考をかいているのは小杉榎邨のみである。これらの論考の内容について順に述べる。

・工芸部類

工芸部類には小杉榎邨と横井時冬が論考を書いている。

小杉楯邸の論文は四論考ある。タイトルを順に並べると、「織繡染色」(第一編第一集)、「刺繡 天壽國の曼陀羅の繡地」(第一編第二集)、「織物染色」(第一編第十二集)、「金襴」(第二編第一集)である。「織繡染色」では織繡と染色、それぞれの歴史背景を述べるのみならず、染色については、臈纈と纈纈について模写による図でも紹介している。また、「刺繡 天壽國の曼陀羅の繡地」では、刺繡について、「天壽国繡帳」を模写の図版で紹介しながら、推古天皇や用明天皇のころの刺繡について論じている。また、「織物染色」では、錦と綾について述べ、醍醐天皇のころの延喜5年の全国の綿絲織物の調査についても紹介している。また、錦については「法隆寺傳赤地錦」、綾は「東大寺傳綾」を模写して紹介している。「金襴」についても「興福寺金襴」「富田金襴」などという風に各地の様々な金襴について模写でも示しながら紹介している。

また、横井時冬は、「茶屋染と友禪染」(第二編第六集)という論考を書いている。横井は、茶屋染と友禪染それぞれの起源について、述べている。この論考の中で特筆すべきことは、京都瑞泉寺の豊臣秀次の側室所用とされる小袖裂を示し、当時、茶屋染の起源を桃山時代とする説があったと述べていることと、現在友禪染の技法として一般的な技法であるとされる筒引き糊の方法とともに楊子糊の技法を図(図 3・2)でも紹介していることであろう。



図 3・2 『好古類纂』第 2 編 6 集より

・装束部類

装束部類には黒川真頼と内柴御風と小杉楯邸による論考がある。

まず、黒川真頼「服飾大意」(第一編第三集)では、冠について模写し、それぞれ個々の用途などについて紹介している。

内柴御風による論考は、「木原楯臣直垂考未完」(第一編第七集)、「木原楯臣直垂考」(第一編第九集)、「木原楯臣直垂考完結」(第一編第十集)で直垂について模写し紹介している。

小杉楯邸は、「雅亮装束抄略解未完」(第二編第四集)、「上古衣服未完」(第二編第六集)、「上

古衣服承前未完」(第二編第七集)、「上古衣服承前」(第二編第八集)、「女子の衣服未完」(第二編第九集)、「女子の衣服承前」(第二編第四集)と5回にわたり、女子の衣服について述べている。ここでは、太古から時代をおって、維新前までの女性の衣服について述べている。

第三編と拾遺には装束という括りでの論考はない。この装束部門においては、個々の学者の論考の細かい分野わけがあり、論じるテーマが統一されていることが窺える。

・風俗部類

風俗部類では、小杉楹邨と石本秋園や青山清吉らの模写による図版を掲載し、衣服や髪形などの沿革を紹介している。

小杉楹邨は「奈良朝時代の着服の一斑附東寺辛櫃、(散樂圖の中)」(第一編第一集)、「女装沿革」(第一編第八集)と題し論考を出している。小杉は、奈良朝時代の風俗について述べた後に、教王護国寺蔵の「散樂図」を紹介しながらこの時期の衣服と髪型などの風俗について述べている。

石本秋園は8回にわたり、女性の衣服の変遷について古画の模写により紹介している。「女装沿革」(第一編第七集)、「女装沿革」(第一編第九集)、「女装沿革」(第一編第十集)、「女装沿革」(第一編第十一集)、「女装沿革」(第二編第一集)、「女装沿革承前」(第二編第七集)、「女装沿革承前」(第二編第八集)、「女装沿革織田豊臣時代承前完結」(拾遺第二編)である。この中で現在、慶長頃とされる風俗画に描かれた女装についても徳川時代として紹介している(図3・3)。



図3・3 『好古類纂』第1編9集「女装沿革」

また青山清吉は男性と女性の髪形の変遷について絵画資料を用い、それを抜き出し説明とともに紹介している。「時行修容未完」(第二編第三集)、「時行修容承前」(第二編第十一集)、「時行修容承前」(第二編第十二集)「時行修容(婦女)未完」(第三編一集)、「時行修容承前未完」(第三編五集)、「時行修容婦女承前未完」(第三編八集)、「時行修容婦女承前未完」(第三編十一

集)、「時行修容婦女完結」(第三編十二集)である。この中で、第三編一集に「慶長古屏風の画」として絵に描かれた女性の髪形も模写で表している(図3・4)。



図3・4 『好古類纂』第3編1集「慶長古屏風の画」

宮崎幸麿は時期を安永年間に限定し、自身の論考を模写とともに第一編十二集のなかで、「女装沿革安永年間婦人の髪かたち」として紹介している。内藤耻叟も第一編五集の中で「徳川家紅葉山御宮社参次第并圖」の中で男性の衣服について述べている。

また表紙に使用した図版の説明も各所にみられ、第一編の九集、十一集にて松浦屏風、第十二集にはその集の表紙の文様の説明が確認できる。また第三編では口絵の説明はすべて小杉樞郎がしていることが特徴といえるだろう。この中で、第一集には縹縹、第四集には菊桐文様、第六集には杜若文様、第七集には蝶文様、第八集の書画部類に小杉による光悦および光琳についての論考がある。また、第十一集には公家と武家の腰巻、第十二集には唐織について書かれている。

これらをとおして、小杉が『好古類纂』の出版において広い分野にわたり論考を出し、それらの一部は現在の染織・服飾研究の基盤に大きく寄与しているのではないかと考えられる。

3) 集古会

① 集古会について

集古会のはじまりは、東京大学の人類学・考古学者であった坪井正五郎の研究室に在籍した大野延太郎、八木槌三郎、林若吉が発起人を務めた「集古懇談会」がはじまりとされる⁴²。そこに、さまざまな人々がかかわったとされる。『集古會誌』の中には、土器や石器といった考古学資料、古画、古文書といった国文学・国史学・歴史学の分野の資料、さらに人々の生活にまつわる衣類や食器、古銭から玩具まである。これらは、第 18 回に課題が設けられてからは、そのテーマに沿い、分野を横断し出品され、検証されている。

会の発展のスピードは比較的早い。明治 32 年(1899)までの『集古會誌』においては、会員は一種類だったが、明治 33 年(1900)の『集古會記事』には名誉会員、賛助会員、通常会員と組織が細分化されていることが確認できる。これは、明治 32 年(1899)7 月 22 日に第 22 回例会において、規則の改正、会長や幹事とは別に外部に評議員を置くことなどを決めたということを受けたものである⁴³。その後、会則が『集古會記事』の表紙裏に記され、より多くの人が集古会にかかわり、参加することにつながったのであろう。実際に「第二十二例會の時には總員五十四人なりしが三十三年一月廿九回例會の時には總員百五十七人に及べり」⁴⁴とあり、会員の増加が確認できる。

『集古會誌』の「集古會記事」によると、「第 1 回」は明治 29 年(1896)1 月 5 日正午から東京上野公園大佛前韻松亭⁴⁵にて開催された。集古会の活動記録である「集古誌」「集古會記事」「集古會誌」「集古」は、昭和 55 年(1980)に思文閣出版より、全 8 巻にまとめられ復刻されている。それによるとこの会は昭和 19 年(1944)まで続いたとされる。この会の発起については

今回我々の發起にて集古懇話會と云ふ者を設立せり會の目的は其名に示すが如く凡ての古器物を集めて彼我打ち解け話し合ふと云ふにあり即ち汎く世の同好者を會し各自所有の古物を携帶して互に品評を下し傍ら經驗を語り考説を述べ以て談笑の間に智識を交換するを旨とす、會員は開會毎に集合したる人々より成り別に制規を設けずして何人も隨意に入會するを得ること、せり世間同好の諸氏は陸續賛同あらんことを希望す

帝国大學寄宿舍	佐藤傳藏
小石川區指ヶ谷町九十二番地	大野延太郎 ⁴⁶
發起者 神田區駿河台南甲賀町九番地	八木槌三郎 ⁴⁷
麴町區四番町十三番地	林 若吉 ⁴⁸
渡臺中	田中正太郎

とかかれている⁴⁹。要約すると、「集古会」は古物について意見を交換しあう同好会のようなもので、おのの自身の所有する古物を持ち寄り、批評し、論考を述べ、互いの知識を交換する場所であり、この会への参加の規定は特に設けず、随時入会できるとされていた。

② 集古会における染織品の出品について

明治 29 年(1896)4 月 26 日に神田中町 1 丁目 4 番地富岡方にて開催された第 3 回の集古会記事の中に林若吉所蔵の「那覇婦人所用衣服」がある⁵⁰がこれが「集古会」における染織品の初出であろう。

次に、明治 32 年(1899)9 月 25 日に富岡にて開催された第 17 回では、元禄年間を中心とした婦女子に関する物品を紹介している。この会では染織品が出品されるだけでなく、「會員清水晴風氏の盡力にて従来元禄古物を携帯したる一派の同志者十数名本会に入会し」⁵¹とあるように、元禄の古物を所蔵する会員が増えた。そして、「次會より題を設けて出品することとし第十八例會に扇面及盃第十九例會は正月に際すれはとて七福神に因めるものと決し」⁵²とあるように、第 18 回からは課題がきめられることとなった。

この第 17 回では計 62 件の元禄年間の古物が出品され、その中で染織品は、以下の 6 件である。

婦人用縫模様 裂寛永頃より天保頃迄	七種	清水晴風氏
縫模様振袖裂 釜屋出と云ふ	二枚	同
元禄年間婦女儀式用縫模様振袖	一枚	根岸武香氏
婦女人形の袖	三重	同
古代釜屋出仕模様婦人小袖	一重	野口彦平氏
絹縮白茶地古代釜屋仕模様留袖	一重	同 ⁵³

これらの染織品が現存のどの染織品であるかはわからないものの、名称がつけられていることがわかることと、元禄年間として紹介された古物であることから、すくなくともこの会に集うひとのなかである程度、時代判定をされていることが確認できる。この染織品の所蔵者は 2 名で一人は玩具人形の収集家であった清水仁衛(晴風)で、もう一人は野口彦平とある。野口彦平は大彦という呉服商で、染織品を収蔵していた。それらの染織品は現在、「大彦コレクション」として東京国立博物館に収蔵されている⁵⁴。

そして、明治 34 年(1901)の第 31 回で、有職物、楽器、女装、古瓦が課題とされたのである。ここでは衣服と櫛や帽子といった女子の服装品が出品されている。この中で衣服は、13 件出品され、作品名称や製作年代や作品解説がつけられている。これらを抜き出すと次のとおりである。

一 桂 松かさね松菱の模様	一襲	東京 松浦伯爵
一 袴 紅及濃	二腰	同
一 婦人火事装束	一具	同
頭巾○羽織○小袴○胸當總て猩々緋○內衣紅白二領○襦袢○帯		
一 簀狹子	一個	同
一 女小袖 寛政時代	一枚	同 野口彦平

羽二重裾模様壁色五所紋 紋ハ三つ追柏 裾及び襟の模様は花桐纈纈にして地は

藍に茶色なり

一 同 同時代

羽二重裾模様五所紋 三迫柏 地は茶色にて模様の色は黒と浅黄を用ゐる白の纈纈にて香の圖を出たせり

一 同 同 一枚 同

紋縮緬地みなと鼠五所紋 同上 古代模様を各色にて染貫或は縫取にて裾襟に散布したり以上三點は無垢ともいふ

一 同 下着 同 一枚 同

本龜綾無垢白地に雪中山水を繪かき鳥と樹木の縫取なり

一 同 單物 同 一枚 同

絹縮の八掛附單物五所紋 三迫拍 地色藍鼠裾模様四季の花鳥を輪畫に抜き其中に四季の花鳥を友禪染縫取と纈纈にして頭はしたるものなり

一 同 同 一枚 同

紹の單物白茶地裾に各種の楓葉を散布し其中へ友禪纈纈彩繡にて各種の文様をあらはせり

一 被衣 文化時代 中裁 一枚 同

羽二重濃花色地腰明き山道と稱する模様にて茶と紺の染分けなり

一 同 同 中裁 一枚 同

紹の腰明模様白地に金砂子にて霞を出し腰より裾に若松の文様を現せり

一 同 萬延時代 一ッ身 一枚 同

紹の鶺鴒色四季の花を全軀に染出せり⁵⁵

上記の作品解説となりうる文字情報は、生地のことや、技法、文様がどのように施してあるのかである。また、時代も記載されており、先に述べた元禄時代に続き、時代判定がなされている。また、現在は大まかに江戸時代後期あるいは、幕末とされるこの時期について細かく時代判定をしている。

さらに、課題外出品としてこの第31回に模写図版と共に出品されている染織品がある(図3・5)。それは、現在、東京国立博物館所蔵の「重要文化財 白練緯地松皮菱竹模様小袖」(図3・6)である(指定名称は重要文化財「白地竹文辻が花染小袖」)。この染織品には次のような詳しい作品解説が付けられている。所蔵者は前述の野口彦平で、解説執筆者は不明である。

徳川家康着用小袖及帯 一着 野口彦平

小袖ぬぎに賜はりし物にて由來書に

一御紋付御小袖 地羽二重白紫染分竹絞り模様 一御紋付御帯 金箔摺模様 右二品
慶長十五年庚戌年從東照宮様十世鷲正次拝領被附世々令傳來也文政四年辛巳年七月
吉日鷲十六世藤原定賢花押とあれと委しく調ふるに地質ハ練緯にて紋附腰文様なり紫松

皮菱肩貫染葵丸の内三葉葵五つ所紋色浅黄纈纈大きき壹寸貳分鯨尺白地竹の模様纈纈にて幹ハ革色に浅黄結目鹿子葉は纈纈の上へ浅黄にてかきわりにせし也裏地ハ深紅福島絹なり寸法ハ袖壹尺貳寸五分小袖人形ハ分袖口六寸袖幅九寸肩幅九寸總丈四尺衿壹尺八寸身幅後前とも壹尺同衽幅六寸五分棲下壹尺三寸五分襟巾四寸貳分○帶ハ唐草金箔摺模様に菊葵の紋を金泥にてゑかく⁵⁶



図 3-5 『集古』 第 1 巻より



図 3-6 重要文化財 白練緯地松皮菱竹模様小袖 東京国立博物館蔵

国立博物館所蔵の国宝・重要文化財を紹介するウェブサイト「e 國寶」にはこの小袖の作品解説が掲載されているので以下に引用する。

小袖とは袖口を小さく縫い合わせた、衿仕立(あわせじたて)のきもので、表地と裏地の間にうすく真綿が入る。経糸(たていと)に生糸、緯糸(ぬきいと)に練糸(ねりいと)を用いて平織にした練緯地を、肩の部分で大胆に紫の松皮菱形に縫い締め、身頃を紫と白に染め分けている。右裾から力強く太い竹の幹と、若竹とが肩に向かって交差し、若竹の葉が肩と裾に大きく垂れている。竹は匹田絞り、幹や葉は絞りの輪郭に沿って細い墨線によって描き起こされ、一部に描き絵が施されている。紋は丸に三葉葵の五つ紋で絞りと墨線の描き起こしによって表されている。紅地菊桐文摺箔帯が付属品として現存する。付属文書によれば、狂言驚流の家元が慶長 15 年(1610)に家康により拝領したという。能狂言を好み、自らも舞ったと記録が残される家康であるから、演能用として詠えた可能性のある小袖と見解を持たれる一領である。

これらの解説を比べると、伝来や生地練緯などについてはおおそ同じ内容で、技法の解説は東京国立博物館のものの方がより細かく分析されている。明治 34 年(1901)3 月開催の第 31 回「集古会」の出品目録であることから、この『集古會誌』上に書かれている内容は、その数カ月前には確定されていなければならないと考える。そのことから考えると、染織品は、「集古会」においては、他の古物同様に研究されていたのであろう。

さらに、野口彦平は、明治 35 年(1902)の第 37 回集古会「課題 雛人形と雛道具」において課題外出品として、「御殿用織物 数十切」を出品している⁵⁷。この出品物は、模写による図版はないものの織物の細かい内容が書かれている。この後も、野口彦平は、明治 38 年(1905)5 月の第 53 回「課題 戦争並に勝負に關するもの」に「諺かるた 一組」と「嵯峨人形 武者 一体」を出品している⁵⁸。これらを通して、明治 30 年代には染織品についての調査研究が行なわれ、今日の展覧会における作品解説にも近い解説がつけられていることが確認できる。

③ 「集古会」と染織・服飾研究に関わる人たち

この会が大きく組織化されていく中で、服飾・染織研究という視点で「集古会」をみると 3 つの事が確認できる。野口彦平の参画、関保之助の動向、「好古社」に関わる人たちの参画である。この中の 2 つ野口彦平と関保之助について述べる。

③ ー1 野口彦平の参画

野口彦平については、明治 32 年(1899)6 月 16 日号の『集古會誌』の会員名簿には名前がないが⁵⁹、明治 33 年(1900)12 月 30 日発刊の『集古會誌』には会員名簿の甲種通常会員の中に名前が掲載されているので、明治 33 年 6 月～12 月までの間に会員となり、自身が所蔵した染織品をこの会へ提供したのである。野口彦平は、元禄の古物を取り上げた明治 32 年(1899)年の第 17 回「集古會」では出品していたものの、会員ではなかった。おそらく、会員になったのは、「晴風の人脈によって、近代科学の研究者というカテゴリに含まれない収集家・愛好家といった人々が集古会にくわったのである」⁶⁰と中井淳史の指摘にあるように、研究者ではなく染織品のコレクターとして参加をしていたのであろう。

また明治36年(1903)の『集古會誌』では、名簿の掲載があり、名前が彦平であったが、明治37年(1904)の会誌の名簿では、彦兵衛となっており⁶¹、現在、東京国立博物館での表記と同じになっている。また明治39年(1906)5月発行の『集古會誌』では、会員名簿の表記の仕方に変更がみられる。通常会員には、「研究蒐集又は趣味を有する品目」という項目が追加されている。野口彦兵衛は「古衣装類」と紹介されている⁶²。この項目は、幅広く、この会の主旨を再度、確認することができる。また、この時点で野口彦兵衛以外に服飾・染織の分野に関することが書かれている人は、「服装圖案」と記入している「神田區台所町八 呉服商」とある吉野龜次郎である⁶³。この図案などがどのようなものであったのかについてはわからないものの、服飾品が研究や蒐集の対象であることが確認できる。

③-2 関保之助の動向

明治31年(1898)4月20日『集古會誌』に関保之助は、「埴輪土偶 埴輪舎主人 関保之助」として会誌に掲載した図版の説明をしている。この時点では会員名簿に名前の記載がある。しかし、明治32年(1899)6月16日発行の『集古會誌』以降にだされた『集古會記事』の会員名簿に関保之助の名前はない。ただ、「集古会」に全く、かわりがなくなったのかといえそうではなく、明治35年(1902)5月10日に外神田の青柳亭にて開催された第38回の「集古会」においては、課題が「甲冑武器、附兜人形菖蒲刀の種類」とあり、関保之助は「四半指物掉付一本、萌黄絲威胴丸一領、保呂串付一個」の計3点を出品しており⁶⁴、以降も会員名簿に名前がないものの、出品が確認できる⁶⁵。

関保之助は、明治28年(1895)から、東京帝室博物館美術部で調査・蒐集を行った人で、大正8年(1919)から昭和8年(1931)まで京都恩賜博物館、奈良帝室博物館と関西を拠点に活動していた⁶⁶。この間に関保之助は京都で、昭和6年(1931)から始まった染織祭の時代判定に携わっている。これらの業績から染織・服飾の分野で先行研究に取り上げられる研究者である。

また、この頃の関保之助の活動でもうひとつ重要なのが自身も武具・甲冑を蒐集していたこと、明治39年(1906)以降は自宅で装束着用写生研究会を定期的に開催していたことである⁶⁷。

(2) 東京における染織・服飾研究の慶長頃の染織品について

好古社、集古会などの冊子の中で「慶長小袖」についての記述があるのかを調べてみる。小杉楯邨は、『好古類纂』において「慶長小袖」を始めとする染織品自体について時代判定はしていない。しかし、『好古類纂』では、3度にわたり慶長期の女性の風俗について述べている。まず、1つめは、『好古類纂』第1編第8集の「女装沿革」である。

徳川幕府の初期中期時代江戸の風俗

こゝに模す所は、一古屏風に彩色する風俗畫にして、慶長元和ごろのものなるべし。そもそも徳川家時代の風俗は、最初足利家季世、織田、豊臣兩家を経たれども、その大よそ、まづ非常の差異ある事なきが如し。中期元禄のころほひにいたりても、なほはしばしこの慶元時代のありさまはのこれりしが如く見ゆ、かるた、たばこなどといふもの、天正年間より、慶長年間に

かりて、舶來せし事は、既に先輩の考證もあるが如く、これらのものを、めづらしげにもてあそべるを見て、その當時の景況おもひ起されたり。なほつぎつぎうつし出る所に、またいはんとす。

68

ここには、現在、「慶長小袖」とよばれる染織品については書かれていないものの、たばこやかるといふ舶來品が描かれていることで、この描かれた風俗を慶長期あるいは元和期と推定している。

2番目は、『好古類纂』第1篇9集である。現在、大和文華館所蔵で松浦屏風として知られる「国宝 婦女遊楽図屏風」の一部を模写し、口絵に掲載し(図3-7)、その解説が書かれている。解説を書いた人についての表記がないもの、この冊子の校閲は小杉楹邨のよるものなので、小杉であると考えられる。



図3-7 『好古類纂』第1編9集より

屏風の畫地は金箔打にして六枚折一雙を松浦伯爵家に所藏し給ふ其傳へには又兵衛風俗畫といふよしなるが彩色及びその風俗のある様を按ずるに又兵衛にしては最も古く慶長以前より慶長ごろに下らざるものの如しかるたの遊戲もめづらしくそのはやり出そめしころほひの寫生圖なるべく紙中所狹ければ半雙を二つにたちきりて二度に出さんとするなり而してこの古畫屏風一雙あるを小半雙づつ志ばらく四度ばかりに口絵の所に縮圖せり世間にいふ所の又兵衛とは少しく趣を異にする感あり必慶長とほからぬ時代の風俗畫なり⁶⁹

とある。これには、この風俗画の製作年代を慶長頃としている。その製作年代をもとに、小杉樞邨の女装沿革は論じられ、ここに衣服も含めた小杉樞邨の「慶長頃」の風俗についての一定の時代判定を見出すことができる。

さらに第2編10集では「慶長頃」の衣服について第1編11集の口絵に掲載された「国宝 婦女有楽図屏風」の別の場面の模写(図3-8)の中の女性一人を抜き出し(図3-9)、「この図様は織田豊臣の両家の時代、天正、文禄ごろのをりを経て、徳川幕府の初期、慶長、天和、寛永の頃ほひに係る美少女のすがたなりき」⁷⁰と紹介している。個々の時代の細かい説明はないものの、女性がどのような衣服の制度にともない何を着ていたのか、またどのように衣替えをしていたのかなどについて述べている。



図3-8 『好古類纂』第1編11集より



図 3-9 『好古類纂』第 2 編 10 集より

また『好古会記事』にも小杉による服装についての論考がある。この記事のなかで明治 41 年 (1908) 3 月 6 日から 9 日に上野公園櫻ヶ岡美術協会展館にて第 48 回好古会が開催された (表 3-1, 48)。ここでは、前社長の福羽美静の遺品と徳川時代婦人風俗につて展覧したとされる。その中で小杉の演説があり、その記録が『好古会記事』に記載されている。演題は「中古以来女装服飾沿革の一斑」である。藤原時代から年代順に女装の沿革を述べた中に「慶長、元和、寛永」についての部分のこの頃の小袖について述べている。以下に引用する。

其小袖にも、地黒、地赤、などといふ綸子地を染まして、縫ものしたるしたて、又其のうちかけの文様、地質など、定りとしては有ませねど種々の縫物、金銀箔入のものもありました。⁷¹

綸子を黒や赤に染め、様々な縫い(刺繍)と箔があったことを述べ、地色についての定義が定まっていない、現状の「慶長小袖」と重なる部分であろう。これら、三つの論考において小杉楳邨は、「慶長小袖」という用語は使用していないものの、現在「慶長小袖」と呼ばれる染織品についての説明や、「慶長から寛永頃」の女装についても言及している。小杉のこうした研究は、明治時代における染織品の時代判定に関わりがあらうと考えることができる。

また、一方で、「集古会」は、明治 45 年 (1912) 3 月 25 付けの日出新聞において、京都でも会が開催されていたようであるが、『集古』などに記録をみつけることはできなかった。別の会とも考えられないわけではないが、記事を引用すると

既報の如く昨日午後一時より同四時まで岡崎町京都府立図書館樓上に於て集古會例会を開く當日の出展課題は『維新前渡米の和蘭物』及び『對をなすもの』と云ふ規程に基き出品したるものにして中にも來觀者の目を惹きたるもの和蘭物の中に多く……(中略)……其他對のものゝ部にては三村竹清氏藏各地方産箸六十餘種、骨牌、雛人形などにて當日は好青の日曜日とて來觀者頗る多く非常に賑ひたちと尚ほ同會の本年度に於る開會日及出品課題が五月

十二日より十五日まで同所にて『大津繪』九月二十二日に『秋に關するもの』『紙に關するもの』『慶長より元祿に至る古物』十一月十日は『古經類』『婦人服飾品』『餅に關するもの』等なりと

72

とある。しかし、この時期の「集古會誌」をたどってみても、京都における開催はない。また明治 45 年(1912)に青柳亭にて第87回集古会が開催されているものの、この時の課題は「丸きもの」、「肖像」である⁷³。そして、この新聞記事で書かれた、明治 45 年(1912)の 9 月 22 日、すなわち大正元年の 9 月 22 日に「集古会」が開催されているのかということだが、大正元年(1912)9 月 21 日に青柳亭にて第 89 回が開催されており、この時の課題は、「肌につくもの」、「麴町日本橋區に關するもの」である⁷⁴。また、大正元年(1912)11 月 9 日に、青柳亭で、第 90 回が開催されている。課題は「車輛船舶に關するもの」、「繪馬扁額類」、「麻布京橋に關するもの」である⁷⁵。この前後の「集古会」において新聞記事に書かれた課題で開催された「集古会」は確認できないことと、京都での開催の確認ができない現状において、この新聞記事に書かれた会がどのようなものであったのかは定かではないが、新聞記事にかかれた「集古会」の出品作品がどのようなものであったのかが確認できたとしたら、一部の人たちの中ではあるものの、「慶長から元祿の古物」がどのようなものであったのかを知ることができただろう。

(3)まとめ

明治時代の東京において、重要なことは、東京国立博物館の前身である帝国博物館の設立と、それにとまなう事業の進化と整備が核にあると考えられることである。その中の、国史や歴史、考古学という研究の中で、慶長期の染織品も考察をされた。そして、小杉楡邨により、明治 35 年(1902)には風俗画を使用した慶長頃の女装も考察され、明治 41 年(1908)には、現在のいわゆる「慶長小袖」の概念である、黒・赤などを綸子に染め刺繍や摺箔があることを小杉が述べている。このことから、現在のいわゆる「慶長小袖」の概念が生み出されていったのであろう。

第3節 明治時代の京都における染織・服飾研究史

(1)京都の美術研究における染織品について—明治時代の京都美術協会の活動を中心に

京都において、明治時代以降、染織品はどのように美術品として認識され、展覧会などで紹介され、研究などの対象となっていたのであろうか。呉服製作をはじめとする多くの工芸品の生産拠点としての京都という視点で考察する。

京都では、京都新聞の前身である「日出新聞」が明治 18 年(1885)年に創刊されている。「日出新聞」の記者であった金子静江は、明治 30 年(1897)3 月 18 日から 4 月 7 日まで 15 回にわたり「京都博覧会沿革記」を連載している。その連載によると、京都では、富豪であった三井八郎右衛門、小野善助、熊谷久右衛門を会主として、明治 4 年(1871)10 月 10 日から 11 月 10 日に国内の作品 166 点、西洋品 39 点、支那品 131 点の計 336 点を展示して、本願寺にて「京都博覧会」を開いており、その出品物は専ら古物であったと記録されている⁷⁶。すなわち、明治 4 年(1871)の

時点で古品を公開する展覧会が開催されている。そして、翌年の明治 5 年(1872)には、博覧会を開催するための組織「博覧会社」を組織してその保護を申請しつつ⁷⁷、「京都博覧会」は開かれ、会場を 3 か所にわけ、その1つの知恩院では呉服物類として生糸、染糸、西陣織物、絹布類、麻、麻布類、綿類、綿布類を展示した⁷⁸。また、明治 6 年(1873)には、仙洞舊院の庭先を借り、陳列区画を定め、珍宝に属するものや冠服などの古物も展覧されていることが確認できる⁷⁹。その後、明治 20 年(1887)、博覧会社は、「京都新古美術展覧会」を開催し、この際、古物は国内外のもので明治以前のものであることとしており、出品物の中に織物、刺繍とあることから染織品も含まれている⁸⁰。この「博覧会社」とその後発足する、京都美術協会や同会により開催された「新古美術展覧会」との関わりについては、『京都美術協会雑誌』⁸¹に「我美術協會ハ京都博覧會の心臓タリ、血液タリ」⁸²とあるように、この後に述べる「京都美術協会」の発足や、その後の発展に影響を与えたのである。

京都に、帝国京都博物館が開館したのは、明治 30 年(1897)5 月 1 日である⁸³。この時、博物館の収蔵品の蒐集方法にも九鬼隆一の考えが反映されていたという。それは、明治 23 年(1890)の時点で、奈良・京都の帝国博物館落成時には、京都府・奈良県下の社寺の宝物を博物館へ移し、観覧料のすべてを出品の評価格に応じて出品各社寺に分配することを規則に盛り込んだ⁸⁴。この実施の為、京都では、博物館の完成が近づいた明治 29 年(1896)に近隣の社寺の神官や住職、実業家などに博物館を見学させ、建物が堅牢でいかに安全かを示し、宝物の寄託を推奨したという⁸⁵。このように、帝国博物館は東京より 7 年遅れたが、産業と美術工芸が密接に関係してきた土地柄であったこともあり、京都では、独自の美術研究団体である「京都美術協会」が発足している。そこで、次に、「京都美術協会」の活動を中心に、明治時代の京都における美術工芸と、その中で、研究される染織品について考察する。

1) 京都美術協会の活動について

京都美術協会の活動について京都では、明治 23 年(1890)、「京都美術協会」が発足した。この会から、機関誌である『京都美術雑誌』⁸⁶、『京都美術協会雑誌』⁸⁷、『京都美術』⁸⁸が名前をかえて順次発刊されていた。また、「新古美術展覧会」などの展覧会も開催していた。

まず、『京都美術雑誌』は、1 号が明治 23 年(1890)10 月、2 号が明治 25 年(1892)10 月に発刊されている。『京都美術協会雑誌』は 1 号(明治 25 年 7 月)～155 号(明治 38 年(1905)6 月)が、『京都美術』は、1 号(明治 38(1905)年 9 月)～48 号(大正 8 年(1919)12 月)までが発刊されている。これらは、雄松堂出版より平成 11 年(1999)にマイクロフィルムにされ出版されている。その出版に際し、当時、東京芸術大学助教授であった佐藤道信、京都市美術館学芸課長であった平野重光が推薦文を寄稿した。その中で佐藤道信は、

京都美術協会と『京都美術協会雑誌』は、明らかに東京中心の日本美術協会と『日本美術協会報告』『絵画叢誌』などを意識したものだ。「日本」の名を背負った東京に対して、この京都の組織とメディアは、日本美術の淵源たる京都美術の振興が、日本美術全体の振興につ

なると、やや控え目に言う。しかし内容は、東京のメディアと同様に海外情報を数多く盛り込み、郷土の古美術名品の論説も、じつはこれが「日本美術史」なのだという自負に支えられている。『京都美術協会雑誌』は、京都の地元情報はもとより、一地域をこえた視野で日本と西欧をみすえた、もう一つの近代日本として見ると、とても面白い気がする。⁸⁹

平野重光も、

明治 19 年(1886)、フェノロサが京都祇園・中村楼で絵画に関する講演を行った。東京の新しい気運に対し、京都の停滞気味を指摘し、しかし美術史的価値の高い京都の美術の、新時代にふさわしい躍進を期待するという主旨を述べた。これに参加した幸野楳嶺や竹内栖鳳らは、大いに刺激を受け、京都青年絵画研究会を設立して、展覧会や勉強会を始めた。(中略)京都における美術雑誌も、こうした近代化への熱い思いの中から生まれた。明治 23 年(1890)1 月、「美術工芸家と美術奨励家の結合をはかる」目的で、京都美術協会が発足し、より本格的な展覧会(新古美術品展)の開催と雑誌の発行を事業の主要な柱と位置づけた。東京では、既に諸展覧会と併行して『絵画叢誌』等雑誌の先行がいくつか見られたからである。

90

と、紹介している。この推薦文からよみとれるように、京都における美術全般を捉えた機関誌なのである。その為、先行研究では、多くの分野で引用されている⁹¹。中でもとくに、山田由希代⁹²、平光睦子⁹³の論考は「京都美術協会」をひとつの核とし、美術工芸の中での染織品についても論じている。また、坂口さとは「京都美術協会雑誌に見る明治期・大正期の京都における光琳派について」⁹⁴において、「京都美術協会」の冊子のなかでの光琳派を京都と工芸という視点でとらえている。先行研究のなかで特筆すべきことは、山田由希代が川島甚平を取り上げていることである。山田によって明治時代の京都においては、美術工芸の中に織りが工芸分野のひとつとして確立していたことが明らかにされた。

また、京都では、明治 18 年(1885)から、現在の京都新聞の前身である「日出新聞」が発刊されている。この新聞の中では、フェノロサや九鬼隆一の講演などについても紹介されている。フェノロサについては、村形明子による『アーネスト・F・フェノロサ文書集成 翻刻・翻訳と研究(上)』⁹⁵が出されたことにより日本での活動が詳しく紹介され、そのことを知ることができる。さらに、明治 19 年(1886)に始まった岡倉覚三や九鬼隆一らによる京都・奈良の寺社を中心におこなった古美術調査が行われている。この調査に関しては、日出新聞の記者金子静江による同行取材が行われており、このことについては、竹居明男によりまとめられている⁹⁶。そして、今回取り上げる、「京都美術協会」の動向や、そもそも、この会が起こるきっかけとなった「内國勸業博覧会」についても記載されている。「京都美術協会」については「京都美術協会」は『京都美術雑誌』第 1 号に、

○協會ノ起因 京都ニ美術協會ヲ設立スルノ必要ヲ説クヤ久シ矣而シテ氣運未ダ熟セズ或ハ一時之ヲ設クルモ久シカラズシテ廢シ遽カニ盛ナルモ忽チニ衰フル如キヲアラフヲ恐レ

故サラニ其設立ニヲ延バズモノモアリシカ遂ニ昨年十二月京都ノ美術工藝家内國勸業博覧會出品ノ事ニ付キ會合セシ席ニ於テ美術協會設立ノ議出テ之ヲ賛成スル者立ニ數十人ノ多キニ及ビタルヲ以テ之レヨリ發起人タル人々ハ屢々集會シテ會則等ノ協議ヲナシ草案已ニ成リテ之レヲ同志ニ頒チ本年一月九日ヲ期シ發會式ヲ行フトナレリ⁹⁷

とある。明治政府が殖産興業政策の一環として開催した博覧会である「内國勸業博覧會」は 1877 年(明治 10)に第 1 回、次いで第 2 回は 1881 年(明治 14)、3 回は 1890 年(明治 23)、4 回は 1895 年(明治 28)、第 5 回は 1903 年(明治 36)と計 5 度、開催された。「内國勸業博覧會」の第 3 回(図 3-10)を開催するにあたり、「京都美術協會」は結成されている。「内國勸業博覧會」は、農商務省が主管し、出品は天産人工の全般にわたったが、これに日本画、洋画、彫刻、工芸も加わり、政府は製作費を補助して出品を勧奨したものだが、京都では、発送費用などを京都府で負担をしていたことが『日出新聞』において確認ができる⁹⁸。



図 3-10 第 3 回の「内國勸業博覧會」の会場見取り図

(日出新聞 明治 23 年 1 月 26 日の付録) 資料提供: 国立国会図書館

「京都美術協會」は、明治 23 年(1890)1 月 9 日、建仁寺で発會式を行い始まった⁹⁹。明治 23 年(1890)2 月 6 日の日出新聞には、

京都美術協會の品評會 同會にて隔月行ふべき品評會は第 1 次として來る三月十五日鴨東有樂館にて、繪畫品評會を開き新畫を品評する事とし参考品として古畫を陳列するよし是に茶器品評會を併せ新製の茶器を品評し同じく参考品として茶式にかゝる古器物を陳列なし¹⁰⁰

とあり、この次に機関雑誌が4月から発刊されることと、その題目が『京都美術雑誌』がきまったという報告がある¹⁰¹。

そして、3月15日に「三月陳列會」、5月8日に「五月陳列會」が行われ、7月6日には「七月陳列會」が行われている。この「七月陳列會」では、織物縫物の陳列会とあり、新製品と古物の染織品の展示がされたことが確認できる¹⁰²。その後、9月、11月にも陳列会は行われ、翌年明治24年(1891)も1月、9月、11月に陳列会をおこなっており、それは、陳列会を年3回にするという規定の改正にともなうものであった。それとともに、図案会の開催が同時に行われるようになった¹⁰³。

また、この『京都美術雑誌』第2号には、「北政所桂之裂」(図3-11)も模写が掲載され、作品解説が次のように掲載されている。

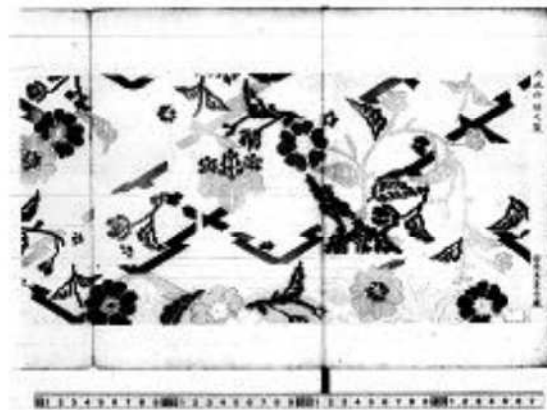


図3-11 北政所桂之裂

『京都美術雑誌』内 資料提供:国立国会図書館

○北政所桂之裂 我國ノ織物ハ古來其精巧ヲ極メタルモ中古應仁ノ戰亂ヲ經テ頗ル衰替ニ赴キ永祿元龜ノ頃尤モ甚シトス天正ノ代ニ至リ漸ク美術品トシテ注目スルモノアリタルモ當時ノ製品ハ専ラ綸子紗綾ノ類トス金襴緞子錦厚板等ハナカリシ此北政所桂ナル唐織ノ如キハ古來日本支那朝鮮印度ノ製ニ見サル處ニシテ天正慶長ノ間ニ西陣ニテ此織方ヲ發明シタル者アリシナリ其ノ名ハ詳ナラサルモ新ニ織軸ヲ出シクル者ト云フヘシ意匠ノ優美ナル配色ノ穩雅ナル決シテ庸工ノ手ニ成ル能ハサルナリ(以下略)¹⁰⁴

この裂は模写であり、現存のどの染織品かは確認がとれないものの、おおよそどのような染織品かは推定できる。このような裂は、現在、おおよそ桃山時代に時代判定されていることが多いが、この裂は天正慶長期に織方が發明されたと紹介しており、現在の時代判定より、少し、遅いように思われる。いずれにせよ、この記述により、染織品がこの会の初めから取り上げられていることが確認できる。

2) 「新古美術展覧会」について

「新古美術展覧会」は、『京都美術協会雑誌』¹⁰⁵や『日出新聞』¹⁰⁶によると、明治 28 年(1896)にこの展覧会のことが書かれ始め、『京都美術協会雑誌』第 41 号¹⁰⁷に、「本月十五日元觀業博覽會場内美術館に於て新古美術展覧會の名を以て開會となり」¹⁰⁸と紹介されており、明治 28 年(1896) 10 月 15 日からこの展覧会が始まったことが確認できる。そして、この展覧会が、大正 2 年(1913)まで開催されていることが確認できる。その始まりについて、明治 28 年(1895) 10 月 15 日の『日出新聞』において、

●新古美術展覧会開場

紀年祭中の最も美觀たるべきは、蓋し京都美術協會の催しなる元博覽會場の美術館に於ける新古美術の展覧會なるべし、即ち是れ博覽會の美術館に、時代品展覧を合わせたもの、會員各名家の新作物に、社寺其他の秘藏なる古器物を陳列し、皆美術及び美術工藝の模範参考の価値を備えたるものとす¹⁰⁹

と掲載されている。

『京都美術協会雑誌』第 40 号¹¹⁰には、明治 28 年(1895) 9 月 8 日の役員会で規則を議定し、これを公布した。その総則には「本會は美術及美術工藝品ノ改良進歩ヲ圖カラシムルヲ為」¹¹¹とあるように、美術と美術工藝の改良と進歩を目的としている。このことは、「京都美術協会」の発足理念を基盤に生み出された展覧会といっても過言ではない。そもそも京都美術協会では、明治 23 年(1890)から「京都美術博覽會」という陳列会が開かれている。このときの記録である『京都美術博覽會品目』¹¹²によるとこの展覧会の開催時点でも、新製品と参考品を同時に展示し、衣服の出品も確認ができる¹¹³。この「京都美術博覽會」が明治 23 年(1891)にはじまった「京都美術協会」の品評会であるかについてはわからないものの、参考品(古美術)と新製品を同時に展示するという展覧の形態は「新古美術展覧会」につながっていると考えていいだろう。

3) 「第 5 回内國勸業博覽會」と「古美術展覧会」

「京都美術協会」は、前述したように「内國勸業博覽會」における京都の出品物の内容の充実などを目的として結成されている。その「内國勸業博覽會」は全部で 5 回開催され、第 5 回展は、明治 36 年(1903)に大阪で開催された。「第 5 回内國勸業博覽會」(図3-12)における特徴は、規模が最大だったことや会期が 153 日間で最長であったことなどである¹¹⁴。明治 36 年(1903) 1 月 1 日の「日出新聞」には、18 面の 1 ページを使用し、この会場の見取り図を掲載している。また、その前の京都で開催された「第 4 回内國勸業博覽會」の会場見取り図(図3-13)¹¹⁵と見比べても、大きさや建物の数でも最大の博覽會といわれることがわかる。



図 3-12 「第 5 回内國勸業博覧會」の会場見取り図
 (日出新聞 明治 36 年 1 月 1 日 18 面) 資料提供:国立国会図書館



図 3-13 「第 4 回内國勸業博覧會」の会場見取り図
 (日出新聞 明治 28 年 4 月 1 日 4 面) 資料提供:国立国会図書館

「京都美術協会」は、この「第 5 回内國勸業博覧會」の開催された年である明治 36 年(1903)には、明治 28 年(1896)から毎年岡崎の美術館で開催していた「新古美術展覧会」の開催をせず、代わりに古美術のみで展覧会を開催している。その展覧会が明治 36 年(1903)3 月 15 日から開催された、「古美術展覧会」である。なぜ、「新古美術展覧会」の開催を見送ったのかについては、「第 5 回内國勸業博覧會」への出品で、「新古美術展覧会」の為に、さらに新製品を製作する暇がないが、単に、古美術のみを陳列するのではなく、古式飾十六種を設けて、古来伝えられた儀式に関する装飾を紹介しているとのことである¹¹⁶。

この記録は、明治 36 年(1903)7 月に『古美術展覧会出品目録』¹¹⁷として出版されている。この目録によると、出品作品は、1566 点で、3 月 15 日に開幕し、7 月 12 日に終了し会期は 102 日間で、会期中に展示替えをしたことも書かれている。さらに、展覧会の観覧者は 10 万人以上、美術工藝の発達、銘品の保存の必要性を考えるきっかけとなり、歴史の参考となったことなどが、この展覧会を開催した利点であったこと¹¹⁸が書かれている。

4) 京都の染織・服飾研究について—『京都美術雑誌』、『京都美術協会雑誌』、『京都美術』における染織品の紹介を中心に

この「京都美術協会」の冊子のなかでは、裂や図案などについて紹介するページがある。このことは、京都において、織や染により製作された染織品が美術工芸の中に組み込まれていることが基盤となっている。『京都美術雑誌』第 1 号のこの冊子の発刊の趣旨の中で以下のように述べている。

何ヲカ京都ニ美術雑誌ヲ發行スルノ要ト云ヤ京都ハ繪畫ニ織物ニ陶器ニ銅器ニ繡綉縹縹彫刻染物漆器木具等多クノ美術工藝家アリテ皆其技術ノ進歩ヲ謀ルニ切ニシテ其意匠ヲ養ヒ其考案ヲ資ケンカ為メニ古今名工大家ノ論説ヲ讀ミ製作ヲ見ルハ實ニ希望スル所ナリ¹¹⁹

とあるように、染織品は織物、繡、縹縹、染物として美術工芸のなかに存在していることが確認できる。また、この会の会頭の北垣國道は京都府知事であるがそれ以外は、美術工芸に実際に携わる人たちである。5 人の幹事の中に西村総左衛門、15 人の評議員の中には飯田新七、川島甚平、伊達彌助の 3 人が名を連ねており、このことから、染織品は京都の工芸の一つと考えられているとことがわかる¹²⁰。そのことが、この協会で、染織品や染織に関わる名工である織工、染工などが取り上げられ、美術工芸のなかでの染織分野の地位を確立することにつながっているであろう。

前述した、「北政所桂之裂」だけでなく、明治 25 年(1893)の『京都美術協会雑誌』第 6 号¹²¹には、図画に「古代綾錦」「本派本願寺藏金欄裂帖の内金紗」がある。特に、「古代綾錦」は、模写とそれらの色を細かく記し、「凡そ 300 年前京都西陣の製造物となるべし」¹²²と説明が書かれている。この時点で、凡そ 300 年前とされるので、1600 年くらいの染織品であると推定されている。また、「本派本願寺藏金欄裂帖の内金紗」のほうは、和久田金欄で、地色は松葉色であることが記されている

明治 26 年(1894)の『京都美術協会雑誌』第 10 号¹²⁴では、図画のコーナーに瑞泉寺蔵の「秀次侍妾和歌掛物ノ表装裂」(図 3-14)が掲載されている。これについては、さらにこまかく生地や鹿の子、刺繍といった技法まで紹介されており¹²⁵、この裂がなになのかを検証することができる。



図 3-14 秀次侍妾和歌掛物ノ表装裂

『京都美術協会雑誌』内 資料提供: 国立国会図書館

また、この図画の作品名称の紹介の横にこの裂の説明が、明治 25 年(1893)の『京都美術協会雑誌』第 6 号に¹²⁶掲載されていることが、書かれているので引用する。

秀次公侍妾辞世和歌二十幅ノ裱装 瑞泉寺蔵

文祿四年七月關白秀次公高野ニ遁レテ自裁ス其侍妾三十餘人三條河原ニ戮セラル其亡骸ヲ瑞泉寺ニ埋ム侍妾各辭世ノ和歌アリ二十幅ハ則チ遺筆ナリ一見當時ヲ想像スレハ球沈ミ蘭摧ケ以テ泣然タラサル得ス再視スレハ其装漢皆是レ侍姫ノ桂ヲ以テ製スル處詠歌装衣相對シテ殺伐時代ヲ胸裏ニ繪カハ誰カ此數幅ニ向ツテ去ルニ忍ヒン桂ハ當代ノ製ニ係シモノニテ

刺繍アリ摺箔アリ染物アリ匹田纈纈ト僞スルモノ實ニ此時節ニ創始セシモノナラン想フニ秀次公ノ奢侈逸樂タル侍姫ノ服装ノ如キハ極メテ華麗ニ極メテ驕傲ニ善シ美ヲ尽セシモノナラン然レドモ今其遺品ヲ見レバ模様配色総テ温藉ニシテ織物ノ粗ナルガ如キハ亦以テ當代ノ質素タルヲ證スルニ足ラン刺繍ノ如キ粗ナリト雖ドモ繫絲ハ自カラ乱レタル處ナク摺箔ノ如キ既ニ剥落スルト雖モ其品位ハ頗フル優等ナル金箔ヲ用ヘリ染色ノ如キハ稍褪色ヲ見シト雖モ地合ヲ損スル色ナクシテ紅紫ヨク今ニ保存シ意匠ノ如キハ尤モ巧ニテ目下ノ模範トナスヘキナリ歴史上美術上三條橋畔ヲ離レ得ヘカラサル好幅ナリ¹²⁷

この裂は現在、「瑞泉寺裂」とよばれる染織品群である。瑞泉寺のホームページには、文祿4年(1595)7月15日、豊臣秀吉の甥の豊臣秀次が秀吉の命により、悪逆の汚名と、謀反の罪を着せられ、切腹させられた。秀次の一族である4人の若君と1人の姫君、そして側室として仕えた女性たち34人の合計39人も同時に処刑された。その後、角倉了以が、慶長16年(1611)、高瀬川の開削工事をした際、豊臣秀次たちの菩提を弔うために瑞泉寺を建立したとある。

この小袖裂は、綸子の地が使用されていること、鹿の子絞りが使用されていることが図画の中に書き込まれている。そうすると、桃山時代の文祿期までに製作された小袖に、すでに綸子の使用や金糸や鹿の子絞りの使用していたことになるが、これは、現在の小袖変遷史から考えると、侍女たちが着用していた小袖と言い切るのは無理があろう。

これらから、瑞泉寺裂が、女性たちの着用していた小袖ではない可能性は極めて高いものの、この『京都美術協会雑誌』第10号がだされた明治26年(1894)の時点では、辞世の句の掛け軸の表装に使われていること、また、この20幅の表装に使用された裂は、この時点では、秀次の時代の染織品であると書かれていることが確認できる。

そうであるとすれば、この時点で、染織品の技法などについても、刺繍、摺箔、染、匹田纈纈などを調査分類し、なんらかの根拠のもとに時代判定をしたことになる。この辞世の句とその表装に使用した染織品が、もっともらしく結び付けられている。ここに時代判定の基準があるのかについては、わからないが、明治26年(1894)の時点では、今のような小袖変遷の流れについての研究は確立されていなかったのであろうと推測される。

(2) 京都における染織・服飾研究の慶長頃の染織品について

明治39年(1906)の『京都美術』第3号¹²⁸に「有栖川裂」(図3-15)とともに、「慶長年代染繡裂」が図画(図3-16)、解説共に掲載されている。



図 3-15 有栖川裂
『京都美術』内 資料提供:国立国会図書館



図 3-16 慶長年代染織裂
『京都美術』内 資料提供:国立国会図書館

この「慶長年代染繡裂」には以下のように解説がつけられている。

○慶長年代染繡裂

某君所蔵

此裂某家に傳へ瑞泉寺の襲藏と比較對照して慶長年代の所製と認むる所なり、地は撰糸の優等品にて濃紫に六瓣花を置き扁額を散布す、是亦岩佐又兵衛筆と稱する古畫に往々見る處の模様にして其時代を認むる一證ともすべきなり、纈纈を染法に施し額縁及び菊花を刺繡とす、染繡相俟ち當時の光彩陸離たるを想像さるゝものなり¹²⁹

この解説によると、前述した瑞泉寺裂と比較検討し、慶長年代の裂としていることが書かれている。また、模様についても触れ、これが、岩佐又兵衛の絵画に描かれていて、それを時代判定の根拠にしているのである。岩佐又兵衛は、慶長期に絵画を描いた人とされ、この、『京都美術』に掲載されている「慶長年代染繡裂」が現在のどの染織品かが特定できないものの、纈纈の技法を使用し、紫を染、額の縁と菊の花は、刺繡を使用していることがこの文献により確認ができ、明治 39 年(1906)ころの京都に染織品の時代判定における「慶長頃」の染織品の考え方がわかる。

(3)まとめ

「京都美術協会」は、文化行政を国家として担う東京とは違う、京都ならではの役割を担っていたことが、その活動から確認ができる。「内國勸業博覽會」への出品の為に、古いもの「古美術」を参考に「新製品」を製作するだけでなく、その為の研究や考察をしていたといっても過言ではないだろう。これは、周りに「古美術」が多く存在していたことも、また、産業としての染織・陶芸・金工などの工芸家が存在していたことも大きかったであろう。

同時期の東京では、明治 15 年(1882)に、有栖川宮幟仁親王の令旨を奉戴して東京市麹町区飯田町に創設された「皇典講究所」、明治 14 年(1881)に福羽美静と松浦詮、小杉楹邨、井上頼圀らにより国粹保存の為に設立したとされる¹³⁰「好古社」、東京大学の人類学・考古学者であった坪井正五郎の研究室に在籍した大野延太郎、八木槌三郎、林若吉らの「集古会」など様々な研究会が存在した。東京ではアカデミックな人たちを中心に明治時代以前の日本の歴史について研究しており、歴史を軸にした風俗画やその時代判定などの中で染織品は取り扱われる傾向にあった。

しかし、京都では、「京都美術協会」の会員に多くの工芸家が名を連ね、自身の製作をしながら過去の研究をするというスタイルをとっていた。他に大きな美術を研究する団体はなく、「京都美術協会」に求心力があったので、美術と美術工芸についての考え方が一定の範囲で統一され、それを基盤に、研究と製作をし、それらの発展に一丸となって邁進した風潮があった。このことが、おそらく、明治・大正・昭和戦前と時代を経た染織・服飾研究における、東京と京都の違いに影響を与えたのではなかろうかと考える。そのことが、日本における染織研究史について、その始まりや、発

展の経緯などが明確でないことに大きな影響を与えているのではないかと考える。そのような中、京都においての染織研究に的を絞り考察したことにより、京都では、明治時代から織・染という分野で美術工芸の中に染織品が組み込まれていたことをあきらかにし、あくまでも工芸というくくりで、この分野の研究が進んだことが明らかとなった。

第4節 大正時代の染織・服飾研究史—研究者の視点

大正時代にはいると、モノクロ図版や模写などを活用し、染織品を紹介する書籍が出されるようになる。そこには、所蔵者や染織品の名称などが記載されているものがある。そこで、それらを辿り、大正時代から昭和戦前期にかけて、染織・服飾研究がどのように進み、「慶長小袖」という概念が成立していったのかを考察する。

(1) 東京の研究者の視点

大正時代以降、政治や文化の中心であった東京では、東京国立博物館の前身である東京帝室博物館を中心に研究が行われている。ここで、研究者として挙げるべきは、高橋健自、溝口楨次郎、関根正直である。彼らは大正 15 年(1926)4 月 24 日東京美術学校講堂にて服飾をテーマに講演をおこなっており、この講演内容は昭和 5 年(1930)に帝室博物館より『東京帝室博物館講演集 第4冊』¹³¹として刊行されている。それだけでなく、昭和8年(1933)、和田辰雄による『日本服装史』¹³²にも、服飾研究の沿革について大正時代の研究者について以下のように紹介している。

大正以降、斯界の研究には更に格段の發達を遂げ、最近物故さられた關根正直博士は、公武家服飾の研究者として「服制の研究」及び「装束(甲冑)圖解」を、同じく高橋健自博士は概説的研究書として「日本服飾史論」及び「歷世服飾圖説」を遺された。何れも後生を益する所の多い研究である。¹³³

次に京都の研究者として述べる江馬務以外にも

櫻井秀氏の「日本服飾史」及び「平安朝女装の史的研究」等、伊藤赴氏の「日本服飾史」(中央美術社刊日本風俗畫大成)などがある。尚武家服飾の研究家には關保之助氏及び猪熊淺磨氏があり、斎藤隆三氏は近世の研究に没頭されてゐる。¹³⁴

とある。

櫻井秀は『日本服飾史』¹³⁵の中で服飾研究について、「史的叙述の対象として過去の服飾を選択するときに、史料に関する知識以外に、人類学(特に土俗学)、社会学、心理学、美学、経済学の知識が必要である」¹³⁶と述べている。また、伊藤赴は、「實物で具體化した日本服飾史」¹³⁷と題して服飾変遷を紹介している。

高橋健自は、文学博士であり、東京帝室博物館鑑査官である。大正 12 年(1923)8 月 10 日に、

『服飾沿革図』¹³⁸という書籍を出版している。68 点の図版とともに近代までの男女の衣服を紹介する書籍である。高橋健自の文章などは残念ながら掲載されていないが、この時点で「慶長小袖」などの小袖の様式区分や細かい時代判定などを高橋健自はしなかったと考えられる。

その後、大正 15 年(1926)4 月 2 日から 25 日の会期で、東京帝室博物館では、「服飾特別展覧會」が開催された。この展覧会の記録は『服飾特別展覧會案内』¹³⁹として残されている。この展覧会では、日本の服飾変遷を紹介し、主に天皇や皇族の服飾の変遷と武家の男女の衣服を展示したことが確認できる。また、この展覧会開催にともない、「上古の服飾」と題して、講演が行われ、その記録も『東京帝室博物館講演集』¹⁴⁰として発刊されている。

しかし、昭和 4 年(1929)に聚精堂書店から『歴世服飾圖説(上・下)』¹⁴¹が出版され、高橋健自がその中で日本服飾を 5 つに分け、その 4 期を小袖中心時代とし、室町時代末から江戸時代末とし、論じている。ここでは、男女の衣服を総論というかたちで紹介しており、陣羽織や腰巻などがなにであったのかを大きく紹介している。高橋健自は日本の衣服全般を研究しており、その他の出版物をみても考古学などの分野であることから「慶長小袖」などの細かい小袖の様式などを検証していたとは考えにくい。

関根正直は 1899 年 4 月 10 日の官報によると東京女子高等師範学校教授となっている。明治時代に皇典講究所で「徳川時代の風俗」などについても講演をおこなっていた人物である¹⁴²。東京帝室博物館の講演は「奈良時代及平安前期の服飾」である¹⁴³。

また、溝口禎次郎は東京帝室博物館鑑査官であり¹⁴⁴、東京帝室博物館の講演は「服飾と美術の関係に就て」である。溝口禎次郎については、戦後の『MUSEUM』にも論考があることから、和田辰雄が『日本服装史』を執筆した時点では、物故でなかったためにあえて記述をしなかったのであろう。この溝口禎次郎の講演のなかで、ポイントは服飾の分野は普段は風俗史の範囲のものであることである¹⁴⁵。この講演以外で溝口禎次郎が服飾についての論考を見出すことはできなかった。

また、和田辰雄の記述にはないが、大正 14 年(1925)、森川六太郎から『日本衣服史』¹⁴⁶が出版されている。筆者は専門史家ではない¹⁴⁷といいながら、時代ごとに衣服の変遷を述べたものである。この書籍の中には、「慶長小袖」についての記述はなかった。

(2) 京都の研究者の視点

大正時代、京都には、染織品コレクターの野村正治郎や、図案家たち、呉服商など多くの染織品にかかわる人たちがいた。そのなかで、研究者として活動したのは江馬務、森川清太郎だろう。江馬勉については、和田辰雄の『日本服装史』にも「江馬務氏の「日本風俗沿革説」「日本風俗史綱」及び日本服飾史(雄山閣刊日本風俗史講座)等」¹⁴⁸と昭和の研究者として紹介されている。

江馬務は、風俗研究家として知られ、多くの著書を残している。それらは昭和 51 年(1976)、中央公論社より『江馬務著作集』(全 12 巻、別巻 1 冊)¹⁴⁹として出版されている。もともと、京都市立絵画専門学校で吉川観方らを指導した。明治 44 年(1911)に風俗研究会を組織し、『風俗研究』を刊行した。大正 8 年(1918)には風俗研究所を設立した。江馬務は、風俗という視点で服飾研究を

おこなった人である。ここからは、江馬が大正時代から昭和戦前期に、「慶長小袖」と呼ばれる染織品をどのように考察していたのかを辿る。

江馬務は野村正治郎が大正 8 年(1919)に出版した『誰が袖百種』¹⁵⁰の作品解説を書いている。また、この作品解説のみを別冊にした『誰が袖百種解説 全』¹⁵¹という冊子がある。この附録に江馬務による「室町時代季世より江戸時代中期に至る小袖の変遷」¹⁵²という論考がある。この序に『誰が袖百種』の解説を江馬務が担当した経緯などが書かれている。この解説書には奥付けがないのでわからないものの、『誰が袖百種』の発刊から、時間はそれほど経ず出されていると考えられる¹⁵³。

江馬務によると、日本の服飾史は「藤原時代」と江戸時代の 2 回興隆期があるという。「江戸前期」は、学者により様々だが、江馬務は風俗という見地で、慶長 5 年(1600)より、享保元年(1716)としている。

江馬務はこの論考で、小袖の変遷について述べているものの、「慶長小袖」や慶長頃の服飾の形態などについては論じていない。しかし、綸子をはじめとする生地についてや、刺繍や摺箔などの技法について、その変遷を細かく論じている。

また、昭和 11 年(1936)に『日本服飾史要』¹⁵⁴を著わし、服装の変遷について年代をおって紹介しているが、「慶長小袖」や慶長頃の染織品については論じていない。『風俗史図録』の中で、「233 図 武家の家庭」、「234 図 桃山時代武家婦人風俗」において、現在、「慶長小袖」と呼ばれる染織品のような小袖を着用した女性が図版として掲載されている。

江馬務の服飾変遷の考え方は、生地や着装などを随筆や文献で読み解き、色や文様は絵画資料を基におこなっているということであろう。その為、その中の一様式である「慶長小袖」などについては、特段、論じていない。また、江馬務のこの考えは、その後も続いたと考えられる。「風俗研究会」では、江馬が中心となって『歴代風俗写真集』という図版集が芸艸堂より大正 5 年(1916)から 11 年(1922)にかけて 17 冊出版されている。その中の「14 の 3」に「桃山時代の婦人風俗」と題されるページがあり、現在、「慶長小袖」に識別される様式を紹介している。千總で大正期に製作したレプリカの小袖を指し示し、その特徴を綸子で左右対称ではないこと、この服装は寛永頃までおおよそ同じであると述べている。このことから江馬務らは、「慶長小袖」といわれる小袖を桃山時代にいれながら、現在、「慶長小袖」と呼ばれる小袖として特別視をしていなかったと考察できる。

その後、江馬は、昭和 12 年(1937)6 月 16 日、松坂屋京都仕入店にて行われた時代衣装鑑賞会にて、現在「慶長小袖」と呼ばれる松坂屋コレクション「染分綸子地御所車花鳥文様繡箔小袖」を出品し、「染分綸子地縫箔御幸文様小袖(慶長時代)」と紹介している。この鑑賞会には松坂屋所蔵の衣裳 20 点、裂 12 点、工芸品 3 点、図案部が制作した作品 10 余点が紹介され現在、「慶長小袖・裂」と呼ばれる染織作品群は慶長時代とある。一方で、江戸時代初期という表記の作品もあり、それらは天和・貞享・元禄・正徳・享保までをさしている。このことから江馬務は、「慶長小袖」は慶長時代を含む桃山時代に組み込み、その頃製作されたものと考えていたのであろう。

一方、森川清太郎は、昭和 3 年(1928)に『日本刺繍史』¹⁵⁵を発刊した際の編集者である。森川清太郎については、人物事典などに記載がないものの、『日本刺繍史』の奥付に発刊された時点では、京都刺繍同業組合代表者と記載されている¹⁵⁶。また、序は江馬務によるもので、「刺繍同業

組合からその方面の研究者たる森川清太郎氏と村田春録氏」¹⁵⁷とあることから、おそらく大正年間の刺繍という分野の研究者であろう。残念ながら、この書籍の中には、桃山時代から慶長頃の刺繍などについては書かれていない。

第5節 大正時代の染織・服飾研究史－研究者以外の視点

(1) コレクターの視点－野村正治郎の出版物のなかで検証された「慶長小袖」

大正時代から昭和戦前期に染織品コレクターとして知られるのは野村正治郎であろう。野村正治郎の蒐集した染織品の多くは、現在、千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館に所蔵されており、コレクション形成などを含め、丸山伸彦、澤田和人が研究している。野村正治郎の染織品蒐集などについても細かく紹介されているので、それらを参考にすると、出版物や展覧会などでの記録を知ることができる。そこで、出版物などをおし、野村正治郎の指し示す「慶長小袖」について考察する。

まず、大正 8 年(1919)、野村正治郎は『誰が袖百種』¹⁵⁸を出版する。これは野村正治郎の所蔵品で小袖の袖の形をした染織品を紹介する出版物である。上巻に 50 点、下巻に 50 点の計 100 点の染織品が掲載されている。誰が袖という題名のように、染織品が袖の形で掲載されている。染織品の名称が記載されており、一つ一つ解説もつけられている。ただ、現在、「慶長小袖」と呼ばれる染織品の掲載はあるものの、小袖の作品名称、解説に「慶長」という言葉はでてこない。解説は前述のとおり江馬務である。作品名称は、上巻の 1 が「紗綾地藤菊千切文様小袖」とあり、100 点すべて、生地・技法・形態の順に記されている。江馬務による解説では、生地や、技法について述べ、江馬務の時代判定が付けられている。また、この『誰が袖百種』については、昭和 5～7 年(1930～1933)に『続誰が袖百種』¹⁵⁹が出版されるが同じ形態で、上巻に 50 点、下巻に 50 点、計 100 点が掲載され、作品名称も『誰が袖百種』同様である。

これらを所蔵していた野村正治郎は、その翌年の大正 9 年(1920)に『友禅研究』¹⁶⁰を出版する。第2章第3節で述べたとおり、この中に「慶長小袖」の江戸時代の呼称とされる「縫箔小袖」という語がある。野村正治郎によると室町時代末期頃、摺箔と刺繍の応用が始まり、徐々に進化した¹⁶¹とされる。さらに「慶長時代の縫箔は専ら黒であつたが此時代からぼうし染法に依りて白に抜き、紅、浅黄或は藍などが染入れられた」¹⁶²とある。

ここで、重要なのは、野村正治郎の「慶長小袖」は黒地であつたということである。そして、ぼうし染めで白い生地を黒く染め、そこに紅や浅黄や藍などが入れられたということである。このことは、大正 15 年(1926)に発刊される『慶長風俗展覧会図録』における野村正治郎の考え方にも表れている。『慶長風俗展覧会図録』には小袖・裂・産着計 43 点が掲載されている。天正・桃山・慶長・寛永と時代区分されていて野村正治郎の染織品は小袖 2 点、裂 4 点の計 6 点である。その中に「慶長時代小袖」と時代判定され掲載されているのは、国立歴史民俗博物館所蔵の「[重要文化財]黒綸子地桐唐草入大葉模様絞縫箔小袖」である。この染織品は、平成 25 年(2013)に同館より出版された『野村コレクション服飾 I』¹⁶³で江戸時代初期と時代判定されており、現在「慶長小袖」に分類されている染織品である。さらに、野村正治郎所蔵の『慶長風俗展覧会図録』で「寛永時代裂」と

紹介される染織品の三点のうち二点は、現在「慶長小袖」の典型とされる白・紅・黒紅の地の様式を踏襲した染織品である。

これらを総じて野村正治郎は、黒地の「慶長小袖」が慶長期にあり、そこにぼうしという白で染めない部分をつくり、そこに紅などを入れていくという、黒地→黒・白(黒・白紅)という変遷があったと考えているのであろう。そのことによって、現在、典型的な「慶長小袖」とされる黒・白・黒紅の3色の地の「慶長小袖」を『慶長風俗展覧会図録』においては、寛永時代としているのであろう。

大正時代に『友禅研究』などを出版した野村正治郎は、昭和に入ってから自身も所蔵する染織品を掲載した書籍を出版している。昭和2年(1927)の『小袖と振袖』¹⁶⁴では100点の小袖と振袖をカラー図版で紹介している。文字情報は、笹川臨風による序と野村正治郎自身によるはしがき、目次のみである。この書籍には現在「慶長小袖」と呼ばれる染織品の掲載はない。また作品名称についても、「1 みずからくり 地鬱金綸子小袖 慶安前後」のように書かれている。目次の上部に年代についての注釈があり、江戸時代の前期・中期・末期と表現している。そして、各期の年号については、前期は4代将軍の頃の明暦から5代将軍の在職中の約60年、中期は8代将軍の享保から安永末に至る約60年、末期は天明以降とある¹⁶⁵。「慶長小袖」「寛文小袖」のように、年号をとり入れた作品名称は存在しない。昭和6年(1931)にだされた『御所とき江戸とき』¹⁶⁶でも江戸中期から末期の小袖の掲載をしているが、着用する季節、名称、時代、旧蔵者がしるされており、こちらも作品名称の中に年号は入っていない。このことは、昭和5～17年(1930～1942)に出された『続・誰が袖百種』でも同じで、たとえば「1 黒綸子地 藤に山櫻 縫箔 又平の頃」のように作品名称に時代を示すものは、入っていない。さらに、自身が出版した『誰が袖百種』、『小袖と振袖』、『御所とき江戸とき』、『続誰が袖百種』、『時代小袖雛形屏風』においては、作品名称などの目次はおおよそ、生地の種類、(着用する季節)、小袖名称、時代、(旧蔵者名)が記されており、名称と時代が別記されている。小袖名称は、生地、加飾技法、形態の順に記されており、統一感がある。

『時代小袖雛形屏風』¹⁶⁷には、小袖屏風100図が掲載されている。この書籍では、慶長頃あるいは文禄慶長頃と掲載されているのは8点である。

- 8、地黒綸子地なし縫箔模様御裃¹⁶⁸ 文禄慶長頃
- 10、地染綸子地なし模様御裃 文禄慶長頃
- 11、地染分綸子地なし縫箔模様御裃 慶長頃
- 12、地黒綸子地なし縫箔模様御裃 慶長頃
- 13、地紅綸子地なし縫箔模様御裃 慶長頃
- 14、地黒綸子地なし縫箔模様御裃 慶長頃
- 31、地白綸子地鹿の子入縫箔文様御裃 慶長頃
- 32、地綸子鹿の子きわ箔文様御裃 慶長頃

この8点において、野村正治郎が「慶長頃」と時代判定する染織品の生地は綸子で、地の色は黒、赤、白の単色のものと染め分けのもの、技法も縫箔(繡箔)と鹿の子など、現在、「慶長小袖」と

よばれる染織品にグルーピングされるものである。そのことは大正時代の『友禅研究』の頃の考え方からすると少し違和感を覚える。

野村正治郎は、大正時代においては黒地のものを「慶長頃」としており、黒地にぼうしで染めない部分に紅を染め分けたものはそのあとの寛永頃としていた。これは、大正 15 年(1926)に出版された『慶長風俗展覧会図録』においても踏襲されている。しかし、昭和に入ると、現在の「慶長小袖」の捉え方と同じようになっていった。

『友禅研究』に対する一部の学者からの批判の中で新たな見解を見出したのかもしれない¹⁶⁹。この『時代小袖雛形屏風』の中で野村正治郎が「慶長頃」という言葉で指し示す染織品の変遷はこの後の戦後の研究の中で、丸山伸彦の時代判定と比較し、検証する。

(2) 呉服製作に関わる人たちの視点

大正時代に入ると、染織品を掲載した書籍がだされるなかで、現在のコレクターの研究などで紹介されることがすくない旧蔵者たちがおり、それは呉服製作に関わる人たちである。その中で、現在、いわゆる「慶長小袖」とされる染織品の旧蔵者について検証する。

大正時代において、染織品の所蔵者として重要なのは図案家たちの所蔵品である。そこで、ここからは、個々の図案家の活動と所蔵品を通して、かれらの「慶長小袖」について考察する。現存する「慶長小袖」の中で、現在典型的な「慶長小袖」といわれる 3 点「小袖〈繡箔風景四季花文〉」「染分風景花卉模様繡箔小袖」「染分綸子地御所車花鳥文様繡箔小袖」のうち、「小袖〈繡箔風景四季花文〉」「染分風景花卉模様繡箔小袖」の所蔵者であった田村春曉と、「染分綸子地御所車花鳥文様繡箔小袖」の所蔵者であった岸本景春について以下に詳しく述べる。

1) 田村春曉と「慶長小袖」

現在、文化庁所蔵の旧鐘紡コレクション「小袖〈繡箔風景四季花文〉」の先行研究は染織品自体の工芸的側面のみの説明がなされている。そのため、この小袖の所蔵者の変遷に関しては、河上繁樹が日本の染織品コレクションの形成について述べた際に、長尾美術館から鐘紡株式会社を経て、現在文化庁に所蔵された経緯を記述した¹⁷⁰以外はほとんど論じられていない。

そこで、筆者が前論文¹⁷¹にて見出した、田村春曉(1885～没年不詳)という人物に着目する。田村春曉は、この「小袖〈繡箔風景四季花文〉」の旧蔵者の中で先行研究において論じられてこなかった長尾美術館以前の所蔵者であり、図案家であり、京都市立美術工藝学校の教員であり、染織品コレクターでもあった。そのことをふまえ、田村春曉が「小袖〈繡箔風景四季花文〉」を含む「慶長小袖」の所蔵者として戦前、書物の出版などに協力した痕跡を辿りながら、染織研究史にどのような影響を与えたのかを考察し、近代の染織研究史における「慶長小袖」の所蔵者の変遷とその過程で発生した「慶長小袖」という用語の解明に近づけたい。

① 田村春曉について

田村春曉がどのような人物であったかということについてはほとんど論じられていない。先行研究では平光睦子が、「京都図案会」の活動に関する論文の中で、田村春曉を同会の会員として紹介

している。それによると、春曉は明治 36 年(1903)に設立された「京都図案会」に所属していた図案家で、明治 42 年(1909)にはこの会を脱会し、「如月会」という会を設立し、その後発足した友禅図案家を中心とした「関西図案会」に合流していった¹⁷²。また、田村春曉は『明治人名辞典』¹⁷³には

君は京都の圖案家なり田村清二郎氏の三男、明治十八年一月京都に生る、家代々禁裡御簾商たり夙に西山翠嶂の門に繪畫を學び傍ら圖案を獨修す屢々京都美術展覽會に出品し毎回優等賞を受領す又三越呉服店の懸賞圖案募集に應じ一等賞を得ること二回方今都下有数の圖案家たり(京都市下京區東中筋通高辻北入)

とある。すなわち、御簾商を営む家に生まれ、繪畫を学び、圖案を独学で学び展覽會に圖案を出品して賞を得、圖案家として活躍した。さらに、織田萌が昭和 4 年(1929)に出版した『染織圖案變遷史』を横川公子が『叢書・近代日本のデザイン』第 39 卷¹⁷⁴に載録するなかにも田村春曉について記述されている。この時点では、住所は京都市六角油小路東とあり、京都市立美術工藝學校で教鞭をとっていることが紹介されている。一部を抜粋すると

君は、關西染織圖案界の重鎮として知られてゐる、現京都市立美術工藝學校に於て教鞭を執り學究肌の人にして且つ技術上に於て卓越せる優秀なる靈筆を藏せる藝術家である、されど百世を率ひる藝術家として完きものありて所謂アート、フォア、アートを奉ずる。

一派の如く藝術はそれ自ら、獨立せる價值を有するものなれば、藝術は藝術そのものゝ爲にあるべきものにして人生の爲にあるべきものでないと云ふ様な藝術至上主義者の様に唯美主義、耽美派等に属する人ではなく、學究的ではあるが追の實業家との間に處して絶へず交渉の頻繁なるだけ克く事物を解してゐる。

筆者をして謂わしむれば新時代的の藝術家であると思ふ。

即ち、アート、フォア、アート、と、アート、フォア、ライフを克く調和して實社會に處し、ヨリヌキ研究を重ね眞摯的創作品を製作して産業藝術家としての實を擧げんと日夜精進研鑽をなしつつある人である。¹⁷⁵

とある。この後に記述されている圖案については次に述べるが、この文章により、当時、田村春曉が圖案家として学識者からどのように評価されていたのかがわかる。

これらの人物紹介を踏まえ、圖案家と教員という職業人としての田村春曉と、染織品コレクターとしての田村春曉について述べてみたい。

② 職業人としての田村春曉

②-1 圖案家としての田村春曉

田村春曉が圖案家であったことは明治時代から大正時代にかけて、圖案を圖案會に出品していることからわかる。前述の『染織圖案變遷史』の中にも

染織圖案家としては完全無缺の人である、されば夙に繪畫を克くするは勿論にして染織圖案に筆硯を練る事三十數年我國最初の圖案團體たる京都圖案會に於ても重きをなして常時活躍を續け其後同團體が多數會員を擁し横拳を樞にするの徒輩の漸次増加すると同時に終に其統制を缺ぐに至るや、氏は明治四十二年突如京都圖案會より脱退したものである。

とある。田村春曉が所属した図案會の図案集などから図案家としての活動を検証する。

②-1-1 「京都図案會」と「関西図案會」

「京都図案會」は明治 36 年(1903)に設立された¹⁷⁶。明治 42 年(1909)に、田村春曉がこの會を脱會するまでの出品作品が『京都圖案』¹⁷⁷に以下のように掲載されている。

明治 40 年(1907) 第 5 號 ほほづき

明治 41 年(1908) 第 3 卷第 7 號 厂來紅

である。そして、「京都図案會」を脱退し、「如月會」を経て、「関西図案會」に合流していった¹⁷⁸後の出品状況を以下に紹介する。

まず、「関西図案會」の出版物として、国立国会図書館のデジタルコレクションには『関西図案會大典記念 作品集 上・下』と『関西図案會 第 28 回作品集』が公開されている。これらの作品集は「関西図案會代表 田村春曉」が編集者で発刊されている。春曉の作品は大正 4 年(1915)の『関西図案會大典記念 作品集 上・下』には、上巻に 1 点、下巻に 4 点掲載されている。個々の作品名称は掲載されていない。大正 5 年(1916)には、『関西図案會 第 28 回作品集』に 1 点出品しており、こちらも作品名称の記載はない。

②-1-2 その他の図案出品

また、大正 11(1922)年には仏教芸術院出版部から『大正図案』¹⁷⁹が出版されている。ここには全 10 図あり、そのうち田村春曉は、「時雨する頃」という図案が第 2 図として掲載されている。他には染織家の山鹿清華(1885～1981)や皆川月華(1892～1987)などが出品している。

さらに、田村春曉は子弟の図案家たちの製作した図案を発表する「田村社中展覽會」を 2 回開催しており、第 1 回目は大正 11 年(1922)8 月 25 日、第 2 回は大正 12 年(1923)年 1 月 10 日に作品集が発行されている。両書とも序を村上文芽が書いている。第 1 回目の序には村上文芽が「7 月 20 日に八坂俱樂部でこの展覽會を見た」こと¹⁸⁰が書かれている。第 2 回目の序は「此月 16 日に第 1 回目と同じく八坂俱樂部で展覽會を見た」¹⁸¹とあり、この序の日付は、「大正壬戌の年師走の日」とあるので、展覽會は大正 11 年(1922)12 月に開催されていたことがわかる。展覽會を開催し、その後作品集が出版されたのであろう。また、この序には、図案家として、さらにその教育者としての田村春曉の素晴らしさ¹⁸²が述べられている。

田村春曉の出品は大正 11 年の第一回展のみである。出品作は以下の 12 点である。

イソップ物語より

朝日下萬象

歡喜
遠山曉色
花野
泊り狩
白禽紅樹
相思
照羽
如月の頃
洞庭秋色
残る雪

また、昭和 6 年(1931)に「綵工會」が『慶事衣裳展観図録』¹⁸³という図録を出版している。この図録は、本式衣裳・略式衣裳・訪問着・その他で構成され、春曉は、その略式衣裳の中に「小袖 高山百花 八掛高山蝶」を出品している。

そして、野口安左衛門が大正 15 年(1926)10 月に非売品として製作した『友禅の変遷』によれば、田村春曉は享保年間創業の呉服商である野口安左衛門商店¹⁸⁴の代表的な図案家でもあった。しかし、現時点で野口安左衛門商店で田村春曉の製作した図案を紹介した展覧会の図録や図案集を見出せていないので、その図案を検証することはできない。

②-2 京都市立美術工藝学校教員としての田村春曉

前述の『染織図案変遷史』を紹介する『叢書・近代日本のデザイン』第 39 巻の中に「京都市立美術工藝学校で教鞭を執り」¹⁸⁵とあり、さらに

美術學校圖案實習科の教師として同校に教鞭を執るに至り以て今日に至れるものにして今や京都圖案界の古老として篤望厚く、元老株の社交團體、六面會の一員にして圖案家協會、伊藤萬商店の藤佳會を初め各種の團體に関係なし益々斯界のため貢獻されつゝある業界の功勞者である。¹⁸⁶

とあるように田村春曉は京都市立美術工藝学校の教員であった。さらに、村上文芽が昭和 2 年(1927)に出版した『近代友禅史』を横川公子が『叢書・近代日本のデザイン』第 40 巻¹⁸⁷に載録する中で、この出版物が刊行された時点(昭和 2 年)の京都市立美術工藝学校のカリキュラムとともに教師の紹介があり、織物図案が山鹿清華で、染物図案は田村春曉とある。絵画の教師は別に森守明と名前があるので、田村春曉は染物の図案のみを教えていたと考えられる。

京都市立美術工藝学校は、明治 13 年(1880)7 月 1 日に京都御所内に設けられた京都府画学校がもとで、明治 22 年(1889)年 12 月 17 日に京都市による運営が始まり、学校名を変えながら明治 27 年(1894)8 月に京都市美術工藝学校、明治 34 年(1901)5 月 5 日に京都市立美術工藝学校となった¹⁸⁸。そして、明治 42 年(1909)、京都市立絵画専門学校が生まれた¹⁸⁹。その京都市

立美術工藝學校と京都市立絵画専門学校には校友会が組織され、校友会誌が『美術及び美術工芸』、『美』、『二葉』¹⁹⁰である。この『二葉』は「ふたば」とよみ、京都市立絵画専門学校・美術工藝學校校友会々報と中扉に書かれている。年度ごとに刊行され、年中行事や学則、在校生や卒業生や教員の名簿などで構成されている。非買品と書いてあることから、学校関係者に配布されたものであろう。田村春曉が京都市立美術工藝學校の教員であったことについての記録を『二葉』の中にも見出すことができる。

大正十四年中繪美兩校記事

八月三十一日 美工教諭猪飼嘯谷先生ハ願ニ依リ退職セラル

同日 山鹿清華、田村春曉、山田江秀ノ三先生ハ美工校教員ヲ囑託セラル¹⁹¹

とあり、大正 14 年(1925)秋から教員をしていたことが確認できる。

さらに、『二葉』など京都市美術工藝學校や、その後の京都市立芸術大学などからだされた文献には田村春曉が自身で書いた文章は見いだせていない。しかし、どのような教員であったかについてのに、昭和 9 年～25 年(1934～1950)の京都市立絵画専門学校の教員であった加藤一雄によって書かれた文章¹⁹²が残されている。それによると、田村春曉が教えていたのは西陣織の衣裳や帯にのせる模様¹⁹³で、その頃から友禅模様の名匠¹⁹⁴と言われていたという。そして、田村春曉は建仁寺の禅居庵に住み、羽織袴に草履で教壇にたっていた¹⁹⁵という。また、無精髭で芸術家には見えず、田村春曉は芸術や文化を口にした記憶は加藤一雄にはない¹⁹⁶とのことである。このことから田村春曉が図案の発表を自ら幾度となくしている一方で、教員でありながら、論考などがないのは、芸術や文化については自ら論じ、発言をしなかったからではなかろうか。そのことが、今日、田村春曉という人物についての研究がなされていないことにつながるのではないかと考える。

②-3 染織品コレクターとしての田村春曉

染織品コレクターとして田村春曉が、自身の所蔵品について論じた文章は見出せていない。また、先行研究にてコレクター田村春曉について論じられたこともない。ただ、大正時代から昭和初期にかけて刊行された出版物に田村春曉の所蔵する染織品の掲載を実見することから、これらを紹介し、田村春曉の所蔵品について検証する。

a 『綾錦』¹⁹⁷

『綾錦』は全 10 巻と「古鑑」1 巻からなる計 11 巻の書籍で、第 1 巻は大正 5 年(1916)9 月 15 日に発刊され、第 10 巻は大正 14 年(1925)11 月 5 日に出版されている。この 10 巻の内容を表(表 3-3)にまとめてみると、テーマを設けて編集されていることが見受けられる。

次に田村春曉の所蔵品を抜き出し、その特徴を考察するため、この 10 巻の中で小袖を中心に編纂され、かつ、時代判定を掲載している第 2 巻と第 5 巻についてまとめ、所蔵者の収蔵品の特徴を表にすると(表 3-4)・(表 3-5)になる。さらに、第 6 巻は能衣裳とあるものの、田村春曉の所蔵品が掲載されており、一点は、慶長年間と時代判定がなされているので、この第 6 巻も表(表 3-6)に

する。

	発刊日	編集者	内容	時代表記	田村春晩所蔵品	田村内容	他の慶長裂
第1巻	大正5年9月15日	池田有蔵	正倉院裂・埃・外国裂	有	無し		無し
第2巻	大正5年12月5日	池田有蔵	小袖・能装束(裂)	有	無し		野村正治郎・能衣裳
第3巻	大正6年7月15日	池田有蔵	名物裂	無し	無し		無し
第4巻	大正7年3月15日	田畑庄三郎	外国裂	無し	無し		無し
第5巻	大正7年10月15日	田畑庄三郎	小袖・能装束(裂)	有	有	慶長小袖	無し
第6巻	大正9年11月15日	田畑庄三郎	能装束	有	有	能衣裳(慶長1・桃山2)	無し
第7巻	大正10年11月15日	田畑庄三郎	小袖裂・外国裂	無し	有	外国裂・幡2	無し
第8巻	大正10年6月15日	田畑庄三郎	更紗裂	無し	無し		無し
第9巻	大正12年12月15日	田畑庄三郎	外国裂	無し	無し		無し
第10巻	大正14年10月15日	田畑庄三郎	袈裟など	無し	無し		無し

表 3-3 『綾錦』の内容一覧

	桃山	慶長	寛永	寛文	元禄	享保	宝暦	明和	安永	天明	寛政	文政	嘉永	その他	表記無	計
野村正治郎		1	2	3												6
遠藤九右衛門										1		1				2
中西文三郎										1						1
江馬務															1	1
矢代仁商店						1		3								4
中村半兵衛									1		1					2
矢代庄兵衛											1					1
杉浦三郎兵衛										1					1	2
出雲路通次郎													1			1
家成伊助					1										1	2
塚本惣助															1	1
岡岩太郎														1		1
中西文三郎						1										1
岡本橘仙	1															1
下村正太郎															1	1
大村彦太郎															1	1
高等工藝学校															1	1
鈴鹿山町															1	1
計	1	1	2	3	1	2	0	3	1	3	2	1	1	1	8	30

表 3-4 『綾錦』第2巻内容一覧

	慶長	貞亨	宝暦	寛政	表記無	計
碓井小三郎					1	1
田村春曉	1				3	4
黒田善助					1	1
野村正治郎			1	1	1	3
杉浦三郎兵衛					4	4
中野徳兵衛					2	2
清水半兵衛					2	2
福田浅治郎					3	3
前田利為					1	1
田中利兵衛					1	1
長田喜太郎					1	1
家成伊助					1	1
中村半兵衛					1	1
中西文三郎					1	1
西村治兵衛					1	1
田中吉郎兵衛					1	1
田中彌一					1	1
藤田彌助					1	1
岩崎奇一					1	1
西陣織物館		1			1	2
寺社					3	3
町内会など					3	3
計	1	1	1	1	34	38

表 3-5 『綾錦』第 5 巻内容一覧

	能衣裳	慶長年	桃山時	計
田村春曉		1	2	3
根津嘉一郎	38			38
日本織物会社	1			

表 3-6 『綾錦』第 6 巻内容一覧

この 10 巻の中の田村春曉の所蔵品について下に一覧にすると

第 5 巻 4 点記載あり

発刊:大正 7 年(1918)10 月 15 日発行

作品名称 図版番号 2 綸子地友禅刺繍入草花匹田模様裂

図版番号 3 其二

図版番号 6 綸子地松、草花、匹田模様打敷(慶長頃)(図版 3-17)

図版番号 7 綸子地友禅刺繍船模様帛紗

(なお、この図版番号6の「綸子地松、草花、匹田模様打敷(慶長頃)」は現在、「慶長小袖」の優品の一つとしても名高い個人蔵 重要文化財「染分風景花卉模様繡箔小袖」が打敷の形で紹介¹⁹⁸されていることが確認できる)

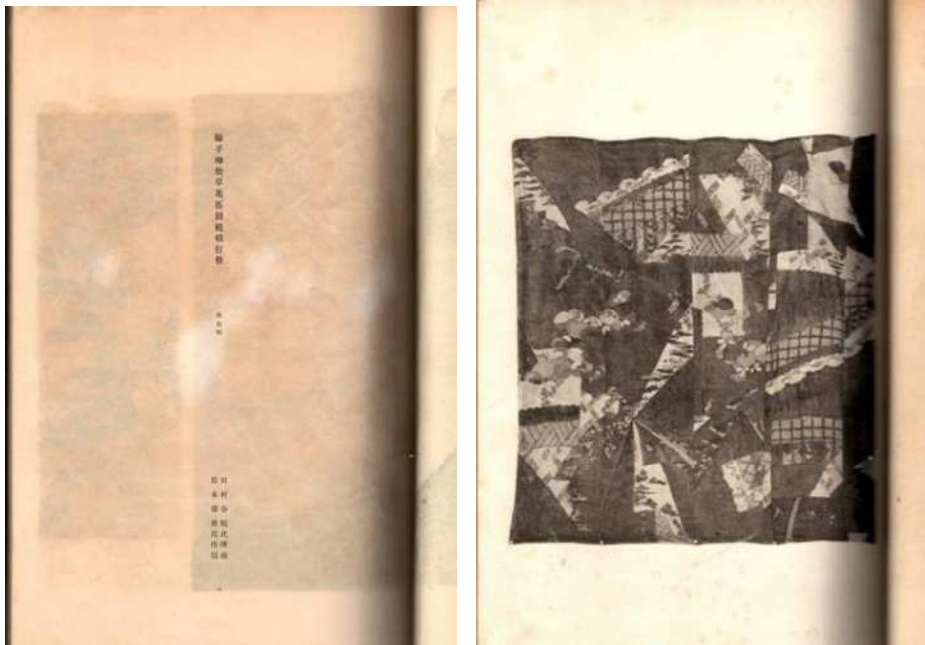


図 3-17 『綾錦』(第五卷)

第6巻 3点記載あり

発刊：大正8年(1919)年5月15日発行

作品名称 図版番号 36 繡箔能衣裳 慶長年間(図版 3-18)

図版番号 37 繡箔松二梅模様能衣裳 桃山時代

図版番号 38 繡箔立涌二窠唐草模様能衣裳裂 桃山時代

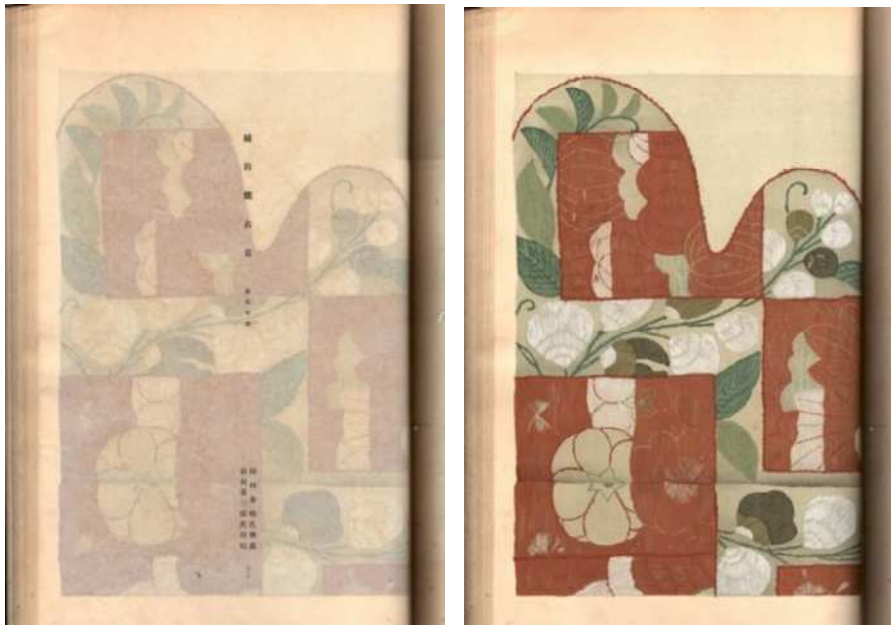


図 3-18 『綾錦』(第六卷)

第 7 卷 3 点記載あり

発刊：大正 9 年(1920)11 月 15 日発行

作品名称 図版番号 10 古代蒙古人皮繡(アップルケー)裂

図版番号 32 刺繡幢幡(図版 3-19)

図版番号 38 刺繡裂

(なお、この図版番号 32 の刺繡幢幡は二点が対で掲載されており、田村春曉が所蔵していたものは片方である。この田村春曉が収蔵していた幡は、現在岸本景春旧蔵品として昭和 7 年(1932)より旧松坂屋京都染織参考館の所蔵となり、松坂屋コレクションとなっている。(図版 3-20)

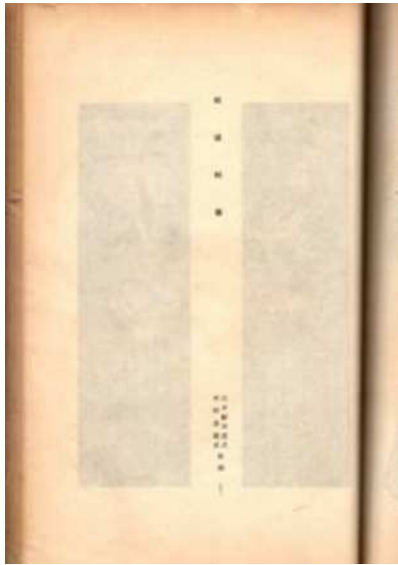


図 3-19 『綾錦』(第七卷)



図 3-20 薬師如来種子幡

さらに、この『綾錦』に掲載された染織品の中で他に慶長頃とされる裂を紹介しているのが第二巻の野村正治郎の能衣裳(図版 3-21)である。これは一部を模写したものか全体の一部のものなのか定かでないが、模写されている。全図の図版が掲載されておらず、これが現在の国立歴史民俗博物館の野村コレクションであるかが確定できないため、検証は難しいものの、おそらく繡箔の技法で製作された染織品であろうと考えられる。

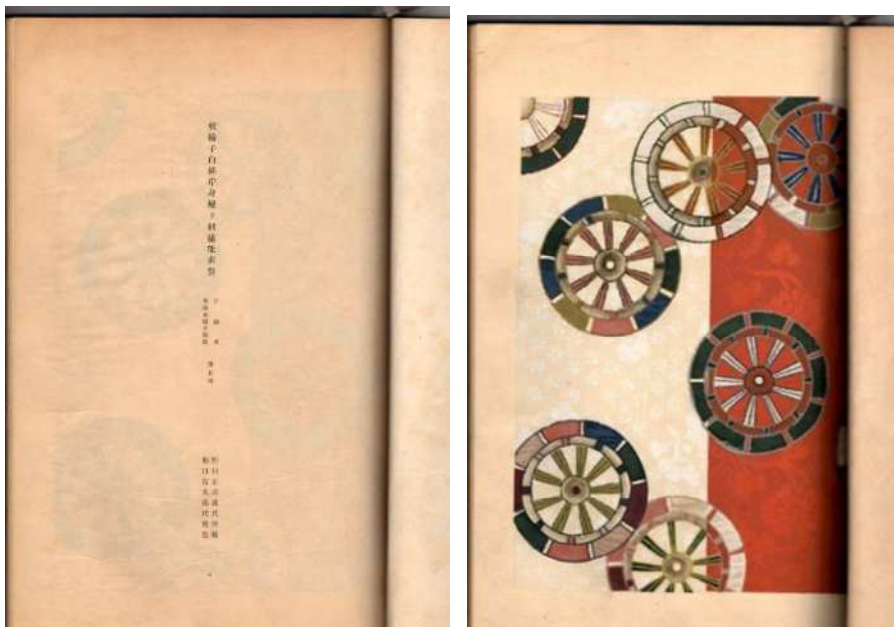


図 3-21 『綾錦』(第二巻)

また、昭和 2 年(1927)3 月に『八重かすみ』¹⁹⁹が田畑庄三郎によって出版されている。『八重かすみ』は、『綾錦』の追版として出版されており、装丁などが違うものの『綾錦』同様、模写や実物のモノクロ図版も掲載されている。ただ、掲載された染織品の名称に変化を見出すことができる。作品名称に『綾錦』では使用されていない言葉で「慶長裂」という言葉とともに紹介されているのである。その中で、特筆すべきは、田村春曉所蔵の「慶長裂」が模写で4点(図版 3-22)掲載されていることである。その4点は図版番号 15 から 18 の「慶長裂繡箔模様」という作品名称で掲載されている。



図 3-22 『八重かすみ』の慶長裂

これらは裂なので、全図がわからないものの、4 点すべて地色が白・紅・黒紅の現在において典型的な「慶長小袖」と言われる「小袖(繡箔風景四季花文)」のような裂である。この『八重かすみ』の中で、名称に「慶長」とある染織品は田村春曉の 4 点のみであるが、現在「慶長裂」とされる染織品は他に 1 点あり、これは京都・瑞泉寺所蔵の「桃山裂繡箔模様」と名称がついている。これらの出版物から、田村春曉の所蔵品には「慶長小袖・慶長裂」が多くあることがわかる。

また、『綾錦』には所蔵者が明記されている。それらは、野村正治郎や、根津美術館の根津嘉一郎、田畑家、西村總左衛門など今日の日本の染織品コレクターとして知られる人々である。その一方で、彼ら以外は西村治兵衛、矢代仁商店などといった現在も呉服商として呉服製作に関わる人達、あるいは田村春曉のような図案家の名前を確認できる。そして、その染織品の多くは、所蔵者を替え今日まで受け継がれているのである。

b 『繡縵帖』²⁰⁰

岸本景春、山鹿清華、田村春曉の三人の所蔵品を掲載し、大正 7 年(1918)12 月 15 日芸艸堂より出版された『繡縵帖』という書籍があり、中扉に「豊臣氏執政時代より徳川氏の末期に至る」と題した 3 冊である。1 に 30 点、2 に 32 点、3 に 32 点で計 94 図が収められている。カラー図版は模写であり、モノクロ図版は写真である。その出版物の巻一と巻三に、現在、慶長裂と伝えられる染織品の模写 2 点を実見できるものの、モノクロ図版は裂の形で掲載されているため現在の染織品との照合は不可能であろう。さらにその染織品の所蔵者、時代の細かい判定や名称などもないため、こ

の出版物から田村春曉の染織品に対する考え方を見出すことはできない。しかし、巻一にある序文で、所蔵者である岸本景春、田村春曉、山鹿清華が知人であることが述べられ、「慶長以来の刺繍摺箔及び綵纈等の品位他の高尚技術の卓越たるものを數種を選び」²⁰¹とあり時代判定を示唆する文面が確認できる。

c 『友禅の変遷』²⁰²

前述の『友禅の変遷』という冊子では、「小袖〈繡箔風景四季花文〉」を図版とともに「摺箔小袖（慶長時代）」と紹介している。この出版物では明らかにされていないが、同時期に開催された「慶長風俗展覧会」の記録である『慶長風俗展覧会図録』に「小袖〈繡箔風景四季花文〉」の所蔵者が田村春曉であることが紹介されているので、田村春曉の所蔵品として考えてよいであろう。

d 『慶長風俗展覧会図録』²⁰³



図 3-23 『慶長風俗展覧会図録』表紙・該当図版
(現在の「小袖〈繡箔風景四季花文〉」文化庁所蔵)

大正 15 年(1926) 12 月出版の『慶長風俗展覧会図録』(図版 3-23)について述べる。この文献は東京銀座の松屋呉服店(現在の松屋銀座)で開催された展覧会の図録である。「慶長風俗展覧会」の会期は松屋の社史に掲載されていないが、読売新聞の広告²⁰⁴にて 10 月 1 日から開催されていることがわかる。また、この展覧会について、松屋顧問会という会のメンバーである正木直彦の日記である『十三松堂日記』に(大正 15 年)「九月十九日午後五時より松屋顧問會議に出席して慶長時代品の展覧會の事を取極む」²⁰⁵、(大正十五年)「十月二日午後松屋に行きて慶長式新模様陳列并に参考慶長風俗展覧會を觀る」²⁰⁶とある。出品物の所蔵者は、野口安左衛門と田村春曉、

野村正治郎、洋画家の岡田三郎助、笹川臨風である。田村春曉は 23 点染織品を出品しており、桃山時代小袖は 1 点、慶長時代小袖は 1 点、寛永時代小袖は 2 点で、小袖は計4点出品している。また、桃山時代裂は 8 点、慶長時代裂は 4 点、寛永時代裂は 7 点で裂は 19 点出品している。

この『慶長風俗展覧会図録』の時代判定には「桃山」「慶長」「寛永」の用語があり、時代と年号の区別なく用いられていることがうかがえる。『慶長風俗展覧会図録』に掲載されている「慶長小袖・慶長裂」を一覧にすると(表 3・7)のようになる。そして、この図録に掲載された染織品には田村春曉以外で慶長時代小袖が一点ある。野村正治郎の所蔵品であり、現在、国立歴史民俗博物館所蔵の「[重要文化財]黒綸子地桐唐草入大葉模様絞縫箔小袖」である。この染織品は、平成 25 年(2013)に同館より出版された『野村コレクション服飾 I』で江戸時代初期と時代判定されており、現在「慶長小袖」に分類されている染織品である。さらに、野村正治郎所蔵の「寛永時代裂」と紹介される染織品の 3 点のうち 2 点は、現在「慶長小袖」の典型とされる白・紅・黒紅の地の様式を踏襲した染織品であり、田村春曉の「慶長小袖」とは言葉が指し示す内容が異なり、一冊の出版物の中で統一されていないことがうかがえる。また、岡田三郎助の「慶長時代裂」の中に江戸時代中期頃の友禅染の裂が 1 点ある。これらを総じて考察すると、それぞれの時代判定がバラバラで、おそらく所蔵者の見解がそのまま記載されているのであろう。

掲載頁	この時点の作品名称	分類	この時点の所蔵	地色	この時点の図版	備考
1	慶長時代小袖	小袖	田村春曉	黒・赤・白		現在も「慶長小袖」と言われる 「小袖〈繡箔風景四季花文〉」(文化庁所蔵)
3	慶長時代小袖	小袖	野村正次郎	黒		現在、江戸時代初期の染織品とされる 「黒綸子地桐唐草入大葉模様絞縫箔小袖」 国立歴史民俗博物館所蔵
11	慶長時代裂	裂	田村春曉	黒		
16	慶長時代裂	裂	田村春曉	黒		
18	慶長時代裂	裂	岡田三郎助	黒・白		
18	慶長時代裂	裂	岡田三郎助	黒		
19	慶長時代裂	裂	岡田三郎助	黒		
20	慶長時代裂	裂	田村春曉			現在「辻が花」とされる
20	慶長時代裂	裂	田村春曉			能装束裂
22	慶長時代裂	裂	岡田三郎助			現在、「友禅染」とされる

表 3-7『慶長風俗展覧会図録』内の慶長時代小袖・慶長時代裂

e 『染織名品展覧会目録』²⁰⁷

『染織名品展覧会目録』は目録自体に奥付がないので、発刊年や出版社や編集者などはわからないが、表紙に『染織名品展覧会目録』と書かれ、展覧会の会場となった恩賜京都博物館と会期（昭和6年〈1931〉4月9日から4月22日）が掲載されている。この展覧会は京都で、染織祭といわれる催しが4月12日に行われることに際し開催されたとある²⁰⁸。飛鳥奈良時代から明治時代までの染織品319件と裂帖4件、参考品として絵巻物や図、染の型など5件、合計328件が展示されたことを目録から確認できる。この中で田村春曉の所蔵品を抜き出してみる。

足利時代:1件1点あり

47 赤地日鳳凰花枝紋薬師三願經文刺繍裂 額装

桃山時代:6件6点あり

58 白地藤花ニ紙散肩裾模様小袖

64 濃及赤地染分草刺繍小袖裂卓袱

73 練緯地立涌窠唐草松梅春草繡模様裂 額装

74 黒地石疊紋盡シ繡裂 額装

84 松皮取描繪草花模様絞り裂

85 藍地藤菊模様絞り裂

徳川時代:3件3点あり

105 霞取色紙草花刺繍能衣装

140 磯邊鹽汲繡入茶屋染小袖

141 綸子地摺箔繡入小袖

と以上のように10点出品している。文字情報のみで、これらの時代区分なども誰が行ったのかは定かではないが、この展覧会の目録には田村春曉が大正年間に所蔵していた2点の「慶長小袖」である「小袖〈繡箔風景四季花文〉」と『綾錦』に打敷の形で掲載された、現在個人蔵の「染分風景花卉模様繡箔小袖」に相当するものはないと考える。

以上、a～eの5点の出版物の中で『綾錦』、『慶長風俗展覧会図録』、『染織名品展覧会目録』については、出版時かそれ以前に展覧会が開催されていることが出版物の文字情報²⁰⁹やその他の文献など²¹⁰から確認できる。これらの出版物のみで、田村春曉が所蔵していた染織品は網羅しきれないと考える。さらに、田村春曉が自身の染織品蒐集について述べた文章を見出すことが出来ない為、田村春曉の染織品の特徴を論じることはできない。時代判定がされている文献が少ない中で論じることに限界があるものの、『綾錦』、『慶長風俗展覧会図録』には現在、「慶長小袖」として知られる染織品が掲載されている。さらに、『染織名品展覧会目録』の桃山時代として紹介された37件のうちで田村春曉の染織品は6件掲載されており、これは、全所蔵者の中で一番多い。これらのことを総じて考えると、田村春曉の収蔵品は、特に桃山時代から江戸時代初期の蒐集品の

露出が文献上多いことが特徴であろう。また、積極的に自身が所蔵する染織品を、出版物や展覧会に提供し、その結果、呉服の図案デザインの深化や、染織・服飾研究の発展に寄与したであろうと考えられるが、田村春曉による図案に、所蔵していた染織品の文様の影響がみられるなどといった直接の関連性を見出すことはできていない。

②-4 田村春曉と「慶長小袖」

大正3年(1914)5月20日、芸艸堂より『微古帖』が発刊される。大正6(1917)年10月15日までに10巻が発刊されている。序・目次・奥付けなどはないものの、様々な工芸品の模写をしていることは確認できる。様々な工芸品とは陶磁器や金工など多岐にわたり、染織品も模写されている。特筆すべきは、染織品に「慶長裂」「宝暦裂」などといった時代判定とも読み取れる文字情報が掲載されている事である。第10の中に田村春曉による「慶長裂」の模写(図3-24)が掲載されている。この裂が誰の所蔵品かについては、わからないものの、黒紅の地で刺繍と鹿の子絞りによる染織品であることが確認できる。このことは、前節で述べた野村正治郎による考え方とも一致する。この一点だけで、「慶長裂」の指し示す染織品を確定することはできないものの、なんらかの「慶長裂」に関する考え方があるのではないかと推測できる。



図 3-24 『微古帖十』 表紙及び「慶長裂」

田村春曉は、教え子の加藤一雄の論考に書かれているように芸術や文化を口にしたことはなかったとされる。よって、現在、「慶長小袖」の優品とされる「小袖〈繡箔風景四季花文〉」「染分風景花卉模様繡箔小袖」を所蔵していたことを自ら発信したことはないであろうと考えられる。ただ、田村春曉はそれらが大正年間(1912～1926)には確かに所蔵していたのである。「小袖〈繡箔風景四季花文〉」は田村春曉—長尾欽彌(長尾美術館)—鐘紡美術館—文化庁。「染分風景花卉模様繡箔小袖」は田村春曉—個人という来歴を辿る。さらに、もう一点の「慶長小袖」の代表作である松坂屋コレクションの「染分綸子地御所車花鳥文様繡箔小袖」は旧蔵者が岸本景春である。大正9年(1920)出版の『綾錦』の第7巻に、岸本景春旧蔵品で現在松坂屋コレクションとして伝来する幡「刺繡幢幡」が田村春曉の所蔵品であることが紹介されている。また、岸本景春も田村春曉と同じ京都図案会に出品していた記録が確認できたことと、岸本景春と山鹿清華と田村春曉の三者の旧

蔵品で大正7年(1918)12月15日に芸艸堂より『繡縹帖』を出版していることから田村春曉と岸本景春の両者はかなり深い交流があったと考えられる。その為、松坂屋コレクションの「慶長小袖」も、田村春曉の旧蔵品である可能性が残されているが、現状、文献において確認がとれていない。もし、三点とも田村春曉旧蔵であった場合は、「慶長小袖」という染織品を田村春曉がどう考察し、コレクションしたかという視点が重要になるため、その可能性も視野に入れつつ研究を続ける必要がある。

田村春曉は、図案家であり、京都市立美術工藝学校の教員でありながら染織品のコレクターであった。図案家としては、京都図案会などに属し、精力的に制作し、発表した。さらに後進に発表の機会を提供するなど、この業界の発展に寄与したと考えられる。京都市立美術工藝学校の教員として後進の指導にもあたっている。大正期から昭和初期の出版物に所蔵する染織品を提供したり、展覧会に出品したりしたことから、この時期は染織品を所蔵していたことがわかる。そして「小袖〈繡箔風景四季花文〉」は、昭和10年(1935)には長尾欣彌の所蔵品になっていることから、おそらく昭和9年(1934)迄に手放したのではないと考えられる。長尾欣彌をはじめ、その頃の染織品コレクターらの残した文章の中に田村春曉の名前を見出すことができないので、田村春曉の染織品に対する考え方やその蒐集については明らかではない。多くの出版物への図版提供による協力を考察すると、その時期まで残された染織品を公開することへの意欲を感じる。田村春曉の染織品コレクションについて解明することはかなり難しいが、この時代の他の染織品にかかわる人々に研究範囲を広げていくことにより、この解明を少しでも進めたい。また、「田村社中展覧会」などに出品した田村春曉の弟子達の図案も調査する必要がある。

『綾錦』をはじめとする大正期の出版物では田村春曉のような図案家をはじめ、矢代仁商店ほか呉服製作にかかわる商店などが染織品を収蔵していたことが確認できるが、これらについても現状、論じられることはほとんどない。彼らは所蔵品を製作のデザインソースとして使用していたのではないかと考えられる。そして、その際、それらの染織品を時代判定しつつ、新たな流行を生み出しデザインに生かしていたのではなかろうか。

2) 岸本景春と「慶長小袖」

岸本景春とはどんな人物であったのだろうか。現在、岸本景春を人物辞典などで調べると刺繍作家と紹介されることが多い。刺繍作家であることを踏まえ、詳しく紹介する。明治22年(1888)、西陣で代々昆布を商う家の一人息子に生まれ、高等小学校を出たあと、工芸図案家の神坂雪佳に師事し、図案を描き、出品するようになる。さらに生涯親交を重ねた綴織作家の山鹿清華と一緒に古代裂や名物裂の蒐集から外国の織物まで研究を重ねた。昭和5年(1930)に第11回帝展に出品した刺繍作品が初入選した後、刺繍作家として活躍した。昭和35年(1960)、72歳でなくなった²¹¹。岸本景春が図案を描いていた頃は染織品を収蔵していた頃とも重なる。染織品の蒐集について岸本景春自身が論じた記録などはないが、この時期に生み出された図案と染織品やその図版提供による出版物や展覧会への協力を以下にまとめてみる。

① 岸本景春と図案について

岸本景春は、明治 42 年(1909)、京都図案会から田村春曉が脱退しつくった関西図案会の設立会員の一員である。関西図案会の大正 5 年(1916)発刊の作品集の会員紹介欄に岸本景春の名前と出品作品が紹介されている²¹²。それ以前の京都図案会には会員などの名前が掲載されていないことから、京都図案会とは関係がないのであろう。この岸本景春により出品された図案(図3-25)は平面図案でありながら、重ねて文様を表現していることからすると刺繍という視点で図案を描いていたのであろう。



図 3-25 岸本景春の製作した図案

『関西図案会作品集』内 資料提供:国立国会図書館

②岸本景春と出版物

岸本景春が小袖や裂などの染織品を収蔵していたことは、岸本景春自身がそのことについて論じたりした記録などについては見つけることができなかったため、その蒐集の意図などを知ることはできなかった。しかし、大正期以降に出された染織・服飾の文献へ染織品の図版を貸し出し、出版への協力をしていることは確認ができる。出版順に、岸本景春の収蔵品を掲載した出版物を紹介する。

a 『繡綴帖』²¹³(一～三巻)大正 7 年(1918)12 月 15 日

これは、編輯者に田村春曉、山鹿清華、岸本景春とあり、第一巻には模写 5 点、モノクロ図版 25 件、2 には模写 5 点、モノクロ図版 25 件、第三巻には模写 5 点、モノクロ図版 26 件で計 91 件掲載されている。作品名称や所蔵者などは銘記されていないので、岸本景春の所蔵品の特定はできないものの、第一巻に碓井小三郎²¹⁴による序があり、大正 7 年(1918)にはその当時、染織品の研究者が存在したこと²¹⁵や田村春曉、山鹿清華、岸本景春が知友であることを述べている²¹⁶。この「研究者」が誰なのかについてはわからないものの、所蔵者であり関西図案会を中心に図案家として活躍する田村春曉、山鹿清華、岸本景春の 3 氏ではないことがうかがえる。このことは大正 5 年

(1916)に第 1 巻が出版された『綾錦』²¹⁷で、序文などに文学博士などによる寄稿があることもつながると考えられる。『綾錦』には岸本景春の所蔵品の掲載はないものの、大正 9 年(1920)に発刊された第 7 巻で編集者である田畑庄三郎の所蔵品の模写をしている(図 3-26)。



図 3-26 『綾錦』 第七巻 岸本景春の模写した図版

b 『近松時代風俗展覧會図録(小袖の巻)』²¹⁸ 大正 11 年(1922)12 月 15 日発行

高島屋呉服店(大阪市南區長堀橋南詰)にて販売となっているので、高島屋大阪店で展覧会が開催され、その図録として製作され販売された書籍だろう。ここには全部で 51 図版が、掲載されているが、岸本景春の所蔵品で 1 点が全図と部分図を掲載しているため、全部で 50 点である。岸本景春所蔵品は全部で 5 点あり、これらをぬき出してみる。

- 3 総鹿の子模様時代裂地
- 9、10 加賀友禅小袖
- 19 加賀染子供袖なし
- 22 麻地友禅小袖
- 32 時代しのぶ染小袖裂地

である。これらの中で 3 の総鹿の子模様裂地と 32 の時代しのぶ染小袖裂地以外の 3 点の染織品は、現在松坂屋コレクションとなっていることが確認できる。本論文で論じている「染分縷子地御所車花鳥文様繡箔小袖」とともに松坂屋が譲り受けた染織品であろうと考えられる。

c 『花小袖』²¹⁹大正 14(1925)年 6 月 10 日

この出版物には全部で 100 図掲載されている。この 100 点の所蔵者と時代区分などの内容は表 3-8 にまとめた。この中で岸本景春の所蔵品は 16 点掲載されている。それをぬきだしてみると以下である。

- 7 菊絞り(慶長頃)(図 3-27)
- 10 花詰め霞(寛文)紕地総刺繍
- 14 大菊小菊(貞亨)綸子白地緋藍地絞り
- 22 作り菊(元禄)綸子白地
- 23 花蔓七寶(寛永頃)綸子地(図 3-28)
- 33 小花だすき(寛永頃)綸子地
- 34 桐に鳳凰文字(享保)綸子白地藍染分け
- 36 垣間の桐(元禄頃)黒地綸子染刺繍胡紋散し繡模様
- 53 菊しだり尾(元禄頃)
- 55 花のもとの流れ(享保頃)加賀染
- 58 捨扇(寶暦頃)白綸子刺繍
- 69 澤邊の鶴(享保の頃)縮緬地加賀有仙
- 70 遠州絞り(文化)綸子地
- 71 秋衣(正徳頃)薄絹地萩描繪
- 90 雪の汀(寛延)縮緬藍地茶染分け白抜模様
- 95 染分け幕(寛政頃)綸子地

この中で寛永までと時代判定された染織品のうち、慶長頃とされる「菊絞り」と名づけられた染織品は現在、「辻が花」と言われる染織品である(図 3-27)。また、寛永頃とされる「花蔓七寶」(図 3-28)は地色が黒紅の単色ではあるものの現在「慶長小袖・慶長裂」といわれる染織品である。

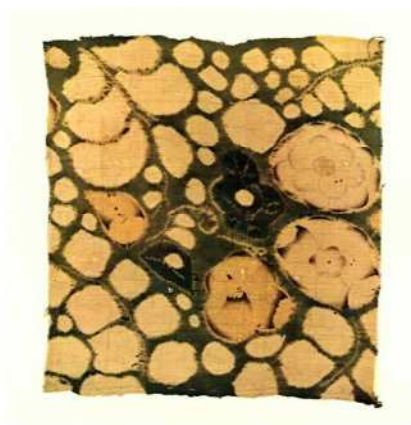


図 3-27 7 菊絞り(慶長頃)



図 3-28 3 花蔓七寶(寛永頃)綸子地

一方で、この出版物の中で、慶長頃と時代判定されている染織品は岸本景春以外の所蔵者の染織品で 5 点ある。

- 4 苦船に菊(慶長)綸子白地染分け摺箔刺繍 水上香邨蔵(図 3-29)
- 15 雲取菊梅(慶長)精好地 水上香邨蔵(図 3-30)
- 17 添へ杖(慶長)綸子茶地摺箔刺繍 水上香邨蔵(図 3-31)
- 19 柴垣に菊(慶長)綸子 水上香邨蔵(図 3-32)
- 21 深山(慶長)綸子地黒緋染分け摺箔刺繍 山鹿精華蔵(図 3-33)



図 3-29 苦船に菊(慶長)綸子白地染分け摺箔刺繍



図 3-30 15 雲取菊梅(慶長)精好地



図 3-31 17 添へ杖(慶長)綸子茶地摺箔刺繡



図 3-32 19 柴垣に菊(慶長)綸子



図 3-33 21 深山(慶長)綸子地黒緋染分け摺箔刺繍

この 5 点の中で山鹿精華が所蔵する「深山(慶長)綸子地黒緋染分け摺箔刺繍」は現在、「慶長小袖・慶長裂」と言われる地色を紅・黒紅・白に染分けた染織品である。地色を三色に染分けたものが一つしか掲載されていない。この染織品の時代判定には、岸本景春と山鹿精華の所蔵する染織品の時代判定が一つの文献のなかで大きく異なることから、おそらく所蔵者の考えかたが掲載されているのであろう。

	文禄	天正	桃山	慶長	元和	寛永	万治	寛文	延宝	天和	貞享	元禄	宝永	正徳	享保	元文	寛保	寛延	宝暦	明和	安永	天明	寛政	享和	文化	文政	計
鹿野秀峯	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	2	1	1	1	1	0	0	1	1	2	1	0	2	2	20
山鹿清華	0	1	1	2	0	0	0	1	0	0	1	5	0	0	3	0	1	0	0	0	0	1	0	1	1	2	20
水上香邨	0	1	0	3	2	2	0	1	0	0	0	0	0	1	3	0	1	1	1	0	0	1	0	0	2	0	19
田村春曉	1	1	0	0	1	1	1	2	0	1	1	4	0	1	3	0	1	0	3	0	0	0	1	0	0	0	22
岸本景春	0	0	0	1	0	2	0	1	1	0	1	3	0	1	4	0	0	1	1	0	0	0	1	0	2	0	19
計	2	4	1	6	3	5	1	5	1	1	4	14	2	4	14	1	4	2	5	1	1	4	3	1	7	4	100

表 3-8 『花小袖』内容

	寛永	寛文	貞享	元禄	宝永	正徳	享保	元文	宝暦	文化	文政	天和	
点数	2	2	6	8	1	8	8	2	7	8	10	3	65

表 3-9 『小袖幕』内時代区分

d 『小そで幕』²²⁰ 大正 14 年(1925)7 月 20 日発行

この出版物には 65 点掲載されている。江馬務による序には 65 点すべて岸本景春の所蔵品であることが述べられている²²¹。この出版物はすべてモノクロ図版であり、すべて裂の形で掲載されている。そのため、これらの染織品を検証することは難しいが、多くの染織品を収蔵していたことが表にすると確認できる(表 3-9)。さらに、名称とともに、元禄頃などと紹介をしていることで時代判定をしていることがわかる。

e 『綵霞帖』²²² 昭和 4 年(1925)8 月 20 日発行

この出版物には全部で 60 図版掲載されている。すべて岸本景春の所蔵品でこの中に「染分綸子地御所車文様繡箔小袖」が掲載されている。この出版物が、「染分綸子地御所車文様繡箔小袖」の文献上での初出であろう。この出版物での染織品の紹介には、

徳川時代 初期 慶長頃 小袖 縫箔

本紋綸子地 朱、茶、藍、黒ニテ種々ノ形状ヲ絞り鹿ノ子ヲ加へ

刺繡ハ鳳凰ニ御所車、枝桐、秋草、水禽ニ水草等

又茶地ノ處ハ様々ノ文様ヲ摺箔ニテ現ス

とある。この後、ほどなくして昭和 7 年(1932)以降にこれらの文献に掲載された岸本景春の所蔵品は松坂屋や鐘紡株式会社などへ譲渡されていくことになる²²³。

(3)まとめ

大正時代に入ると、モノクロ印刷の技術が進み、染織品をテーマにした書籍が多く出版された。そのことにより、染織品の分類が進んだとも考えられる。しかし、出版された書籍の多くは京都から出版されたことから、大正時代は京都を中心に染織品の分類が進んだ傾向にあった。そして、書籍の製作においては、現在のように、監修者が内容の根拠の確認をするといったことは行われず、所蔵者の情報にそって時代区分を目次や作品名称などの情報に記していたようである。そのことにより、時代判定に統一感はなく、現在のいわゆる「慶長小袖」の概念は確立されていない。しかし、現在、「慶長小袖」の優品として知られる重要文化財「小袖〈繡箔風景四季花文〉」(文化庁所蔵)は、慶長時代の染織品として書籍に掲載されていることが確認できた。

第6節 昭和から平成の「慶長小袖」

大正時代から、染織をテーマにした書籍が出版され、昭和戦前期にもこの傾向は続く。そこで細分化されて時代判定が行われていくことになる。

(1)昭和戦前期の研究者とコレクター

1) 明石染人

明石染人は鐘紡コレクションの蒐集に大きく寄与した人物の一人である。『日本染織史』²²⁴『上代日本染織史』²²⁵などの著書があるが、もともとは、明治43年(1910)から京都高等工芸学校助教教授であった。大正9年(1920)に鐘淵紡績株式会社に入社し、昭和9年(1934)には山科工場長となり、研究や蒐集にたずさわることとなった²²⁶。明石染人は、戦前に「慶長頃」の染織品についての論考を2度、出している。

1 つめは、昭和10年(1935)1月30日に発刊された、『星岡』²²⁷第51号の「慶長時代の染織を語る」²²⁸である。『星岡』の発行元は星岡窯研究所とあり、所在地は神奈川県鎌倉郡深澤村山崎2347とある。内容は主に工芸分野から星岡茶寮での料理についてなどである。明石染人は、慶長時代の染織の特徴について、模様染の方法は辻が花を改善してつくられた「帽子絞と稱する紫及び黒の絞染であつて、先づ地染を施し、絞つた白い個處に細線にて繪を描くもので、謂はば絞りと描繪との融合結合である。(これが、元祿絞の前驅をなす事は言ふ迄もない。)慶長末期となると、尚その上に刺繍が加つて、より一層技巧的になつてゆく」²²⁹と書いている。そして、「「慶長」と稱せらるるものの中には時代を少々下つた寛文頃の作品をも含んで居る事は研究者の注目を要する」²³⁰と述べている。

2 つめは、昭和11(1936)年8月13日に田中平安堂より長尾欽彌の所蔵作品による『桃山慶長繡縹精華』が出版されることになる。この中で明石染人は「慶長裂」について深く考察をしている。

茲に好事家に注意を促したいのは、世俗『慶長裂』と稱せられるものの中、技法、文様より見て眞の慶長時代より少々時代が下つたものの類似的な作品、即ち寛文時代裂が多分に存在することである。慶長は桃山時代の直後の継承であつて技工的には未だ完璧に達してゐない

處に價值を認めなければならぬ。慶長時代裂の特徴は前述の如く絞染黒地—主として鐵漿媒染によるもの—に箔押し(又は箔置き、置き箔とも云ふ)を以て種々の模様を置いたものが多い、この技法は勿論桃山時代に端を撥し、明の印金法(支那では銷金と稱する)の轉用であつてこの時代に隆盛を極めたものである。この箔押しは型紙を用ひて文様の部分に下糊を塗し、未だ乾かぬ中に金箔を押して文様を出すのである。この上、適所に刺繍を加えて効果を増してゐる。縫箔又は絞縫箔と云ふのがそれである。この種の遺品は今日諸家に多く襲藏されてゐるが何分にも當時黒染に用ひた鐵漿媒染が不完全であつたため完存するのも稀れで、斷片が多く、しかも斷亂してゐるのも亦止むない事である²³¹

明石染人の、「慶長裂」の特徴は黒地であることである。また、「慶長裂」と呼ばれているものの中に、後の時代のものが含まれていることを、最初に指摘したのは明石染人である。この明石の指摘があつたからこそ、戦後研究の中で、比較的早い段階から多くの研究者が「慶長小袖」は慶長時代のものではなく様式を指す言葉であるという見解を述べる事ができたのではなかろうかと考える。

『桃山慶長 縞繡精華』は 20 点の裂をカラー図版で紹介している。特記すべきことは『慶長風俗展覧会図録』内で田村春曉の所蔵品とされた染織品が 5 点掲載されていることである。このことから、田村春曉の所蔵する染織品の一部が長尾欣彌に移動したことが確認できるのである(表 3・10)。

20 点の時代判定をみると「足利」2 点、「桃山」6 点、「慶長」8 点、「慶長末」4 点である。この田村春曉旧蔵品の中で、『慶長風俗展覧会図録』内で慶長時代とされ『桃山慶長 縞繡精華』にも掲載されている染織品は 1 点であり、『桃山慶長 縞繡精華』における名称は「胡蝶文様繡箔紋染裂」と紹介されている。それは白地に蝶の刺繍がある染織品である。この 1 点のみしか「慶長」としての共通作品がなく、この 1 点のみで「慶長」についての考え方の違いを検証するのは不可能であるが、『桃山慶長 縞繡精華』の中の「慶長」と「慶長末」について、黒の地色の染織品の明石染人の時代判定に一定の法則を見出すことができる。地色が黒の染織品は「慶長」8 点のうちの 5 点と「慶長末」の 4 点すべてである。そして使用されている技法は「慶長」は繡箔(縫箔)が 3 点、絞、刺繍が 2 点、「慶長末」は 4 点とも刺繍である。明石染人は技法として繡箔(縫箔)と絞と刺繍を「慶長」とし、刺繍のみのものを「慶長末」としている。よって、この『桃山慶長 縞繡精華』は、明石染人独自の時代判定の考え方とみてよいであろう。

	この時点の作品名称	来歴	慶長風俗展覧会図録	現在の様式区分	技法
1	桃山 菊藤花文様辻ヶ花染裂	田村春曉一長尾欽彌	P22桃山時代とあり	桃山	辻が花
2	桃山 桐花短冊文様縫箔裂			桃山	繡箔
3	慶長 花鳥蛤模様絞縫箔衣裳裂			慶長	繡箔
4	桃山 秋草文様縫箔肩裾衣裳裂	田村春曉一長尾欽彌	P12桃山時代とあり	桃山	繡箔
5	桃山 夏草文様染分け縫箔絞衣裳裂	田村春曉一長尾欽彌	P15桃山時代とあり	桃山	繡箔
6	慶長 秋草文様描繪絞染小袖裂			桃山	辻が花
7	足利 扇面短冊散し四季花模様繡箔絞染裂	田村春曉一長尾欽彌	P19寛永時代とあり	桃山(本稿では慶長と推定)	辻が花あるいは繡箔
8	慶長 胡蝶文様繡箔衣裳裂	田村春曉一長尾欽彌	P20慶長時代とあり	桃山	繡箔
9	慶長末 七曜絞菊水七寶文様刺繡衣裳裂			江戸中期	刺繡
10	桃山 桐櫻石疊模様辻ヶ花裂			桃山	辻が花
11	慶長末 菊花詰『萬』字文様刺繡衣裳裂			江戸中期	刺繡
12	慶長 鵜頭文様刺繡裂			不明	繡箔
13	慶長 春霞文様絞縫箔衣裳裂			慶長	繡箔
14	桃山 秋冬風景文様辻ヶ花小袖裂			桃山	辻が花
15	慶長 桜欄文様絞縫箔小袖裂			慶長	繡箔
16	慶長末 垣に菊花文様刺繡衣裳裂			不明	刺繡
17	慶長末 七寶文様刺繡衣裳裂			不明	刺繡
18	慶長 澤瀉紋、松龜甲双鶴文様絞刺繡衣裳裂			不明	刺繡・鹿の子絞り
19	足利 藤花文様描畫衣裳裂			不明	不明
20	慶長 源氏車花畑文様絞染刺繡裂			慶長	繡箔・鹿の子絞り

表 3-10 『桃山慶長 繡繡精華』内容

また明石染人は岡田三郎助が監修した『時代裂』²³²『時代裂拾遺』²³³の中でも「慶長裂」などの言葉についての解説をしている。『時代裂』は昭和 6 年(1931)から 9 年(1934)に 24 輯が、『時代裂拾遺』は昭和 9 年(1934)から 11 年(1936)に 12 輯が出版されている。裂をカラー図版で各輯に 6 ページずつ掲載している。これら 36 輯は、製作年代・地は様々で、掲載順序に規則性はなく構成されている。また、解説がつけられており、大隅為三、明石染人、大道弘雄、白川輝、鎌倉芳太郎の名前が執筆者に掲載されている。この『時代裂』及び『時代裂拾遺』の中で製作年代に慶長や作品名称に慶長を付け掲載されているのは以下である。

『時代裂』

11「黒地摺箔波模様絞染」	慶長時代(解説:明石染人)
37「刺繍桐立涌模様」	慶長年間(解説:明石染人)
53「赤黒絞染分桜模様縫箔綸子小袖裂」	慶長時代末期(解説:明石染人)
63「縫箔稲穂慶長裂」	慶長年間(解説:大隅為三)
67「秋草模様絞染摺箔」	慶長時代(解説:明石染人)
79 上「桐文様裂慶長繻」	慶長時代末期(解説:明石染人)
79 下「草花模様金泥画刺繍」	慶長初期(解説:明石染人)
90「草花流水疋田模様慶長裂」	慶長時代中期(解説:明石染人)
113「撫子模様絞縫箔慶長裂」	慶長(解説:大隅為三)

『時代裂拾遺』

33「縫箔四季模様慶長裂」	慶長時代(解説:大隅為三)
34 同	
39「黒綸子地菊模様慶長裂」	慶長時代(解説:大隅為三)
42「雪輪草花縫文慶長裂」	慶長時代(解説:大隅為三)

この 13 件の慶長頃の染織品に、明石染人と大隅為三が解説をつけている。『時代裂』においては、時代の表記が「慶長時代」「慶長年間」などと統一されていない。一方で、『時代裂拾遺』では、「慶長裂」と作品名称に記されているもののみ製作年代が慶長時代とされ、統一されている。『時代裂』においては、上記 13 点の解説の中に、「慶長小袖」につながる「慶長」に関する部分があり、それらの解説はすべて明石染人のものなので、まとめてみる。

「慶長」については、11 に「摺箔絞模様盛行の慶長時代」²³⁴や 67 に「構圖の典雅流麗と輕妙とは慶長全期を通じての特徴でもあつた。」²³⁵とある。

「慶長摺箔」については、作品名称や時代判定に「慶長」はない「36 菊竹模様縫箔染」に「慶長頃の摺箔は主として黒染の生地に行はれたものであつたが、絞染を併用する様になつて以来は、紅、藍、緑、又は黄地にも行はれてる事などは時代を区分するに十分な史的過程と見るべきであらう。」²³⁶とある。

「慶長繡」については、37 に「撚糸の彎曲性を利用する事は桐文のある部分の葉にも應用してある。これは、桃山時代に擡頭し慶長時代に全盛した技法の一で、所謂桃山繡、慶長繡の一特長とも云へる。」²³⁷とある。また、53 には「摺箔を終れば裂を繪枠に張つて白地を中心に紅地の一部分に向つて、櫻、松、紫苑等様々の草木を刺繡したものである。刺繡は、白、淡藍、藍、黄橙、緑、紫等の色系を用ひ、特に平絲が多く光澤ある紋綸子地と摺箔に調和を保たしめてゐる。これは慶長繡の一特徴とも言へる。」²³⁸。さらに、79 には「慶長繡の大まかな手法は桃山以來の傳統であり、それがやがて他の模様染と共同作業する様になつてから鋭さと細かい技巧が必然的に生まれてきたのは當然の成行であつた。(中略)色調の對照が思ひ切つた所の有る中に少々變化の乏しい點のあるのは識者の注意をさるゝ事と思ふ。併しそれが後世の刺繡の千紫萬紅的な變化のあるものと異なる所であつて、桃山繡が更にこれより變化が乏しいのを常態とする。これが、桃山、慶長繡の時代を見分ける一つの特徴と云へないことも無いと私は思つてゐるのである。」²³⁹と「慶長」が指す様々な言葉の意味を明石染人自身の解釈で紹介されている。

また、作品の時代表記やタイトルに「慶長」とはしないものの『時代裂』第3輯の16「葡萄に松皮菱模様絞染」の中で「慶長絞」については、明石染人が「足利時代の盛行した辻が花の大絞りから徳川時代中期の絞、鹿の子の全盛に至るまでの経路には単に麻布から絹布に移つたと云う外に、模様にも技法にも種々の變遷があつた。桃山絞染と云ひ或は慶長絞りと云うが如く時代の冠稱を以て十把一束に納め込むべく余りに多くのバラエテがある。」²⁴⁰と述べている。

この『時代裂』で確認できることは、技法は桃山時代の延長を前提に深化していると考えていることを読み取ることができる。これらの見解は、前述した明石染人が数年後に出す2つの論文に大きな影響を与えているのだろう。

2) 永島信子

第1章で触れたように、永島信子は昭和8年(1933)に『日本衣服史』を出版しているが、これは日本の衣服變遷の中で「慶長模様」を紹介した初めてのものであろう。永島信子は図版4点を紹介しながら、慶長時代の模様の特徴として「今までありましたあらゆる模様をば、他のあらゆる輪郭内に配した事で有りました」²⁴¹と述べ、今まであつた模様を輪郭内においたことを述べ、区画をまだ保っていることを述べている。

永島信子は、本章第2節に述べた小杉楡邨の教え子である。小杉楡邨は、開校まもない日本女子大学校にて美術と国文学の教授であつた。小杉楡邨が教壇にたつたであろうと推測される明治34年(1901)から亡くなる明治43年(1910)頃までに日本女子大学校の教え子などで該当する研究者は、『日本衣服史』²⁴²を執筆した永島信子である。この本の自序の中に、小杉楡邨の日本女子大学校での教授としての姿が書かれているので、下に引用する。

處が明治四十年頃には著者が日本女子大學の家政本科の二年生位だつた頃に、小杉溫邨博士の日本美術史の講義を學んだ事でした。其頃日本美術といへば、大そうハケましく唱へ出された頃で、日本美術史の編修も出來たり、又一方には大塚博士の西洋美術史などが

世に名高く、其の整美されたる講義も同校で伺ひました頃でしたゆゑ、小杉博士の名にし負ふ日本美術史こそは、それこそ大したものだらうとの期待の下に張りつめた氣分でノートにペンを構へたものでした。然るに博士はまづ上古時代衣服と題されて講ぜられましたが、夫は僅に一時間の中に五六行しかノートに採ることが出来た計りでありました。(本論にあり)想ふに師には美術即生活の根本主義があられたと見えます。日本美術史を講ずるに當りて、俗々たる繪畫彫刻を説き給はずに、かうした一見貧弱の極みなる上代衣服を構ぜらるゝ事こそ、却て容易ならぬものがあるだらうと、著者はしみじみ感じた事でした。ここで女學校以来の潜在意識が奮ひ立つて、まづ日本衣服史を體系づけ様と決心した譯でありました。一論文を師に提出しましてから、師は毎週一回位に上野帝室博物館に於て、繪卷物類を藏から出されて拜觀させて頂きました。そして仰せには、「かく平安期からは分明して居るが奈良朝以前が何うしても未だ明らかでない」との事でした。然して師はまもなく物故されたので有ります。²⁴³

この永島信子の『日本衣服史』から、小杉樞郎が『好古類纂』の中で論じた衣服の変遷史について、繪卷物などを用いて、調査・研究を重ね、後進の指導をおこなっていたことがうかがえる。そして、美術という研究領域の中に小杉樞郎は衣服を取り入れたことが確認できる。この『日本衣服史』に「慶長模様」についての紹介があることは、小杉樞郎の指導があり、永島信子は「慶長頃」の染織品についての見解があり、それは、小杉の影響を受けているのであろう。

3) 吉川観方

吉川観方は、京都絵画専門学校で江馬務に学び、明治 44 年(1911)に発足した「風俗研究会」に加わり、『風俗研究』の創刊に尽力した。日本画家であるが、染織品のコレクターとしても知られる。吉川観方の所蔵品により編集された出版物に昭和 6 年(1931)の『衣服と文様』²⁴⁴、昭和 10 年(1935)の『日本風俗大画集』²⁴⁵がある。

『衣服と文様』では、岡田三郎助の『時代裂』や野村正治郎の『誰が袖百種』のように染織品がカラー図版で掲載されている。この『衣服と文様』は、目次の初めには、「野村正治郎氏賛助 吉川観方先生編」とある。吉川観方と野村正治郎の交流については終生親密であった²⁴⁶ということで、野村正治郎は、おそらく所蔵している染織品の提供による協力であらう。

『衣服と文様』には、染織品が 54 点掲載されている。解説はなく、目次に 54 点について、形態、時代、生地などの分類、文様などが文字情報として載っている。作品名称に時代が表記されたものはないが、慶長頃と記されている染織品が掲載されている。また、現在、「慶長小袖・裂」にグループニングされる染織品の掲載が 4 点ある。

5 小袖裂 桃山時代天正頃(大略三百五・六十年前)

白綸子地、色々絞染め松に櫻、撫子縫摺箔文様

6 小袖裂 桃山時代慶長頃(大略三百二・三十年前)

白綸子地色々絞染め秋草縫箔模様

7 小袖裂 桃山時代慶長頃(大略三百二十餘年前)

黒紅絞綸子地、摺箔鹿の子四季草花色々絲縫文様

8 小袖裂 桃山時代元和寛永頃(大略三百一十年前)

黒綸子地、菊花色々絲鹿の子摺箔文様

である。ここで、注目したいのは、慶長期・元和期・寛永期を桃山時代に入れていることである。年代順に掲載され、明暦期・万治期の染織品の説明に初めて江戸時代とでてくることから、吉川観方の時代判定の基準を考察することができる。また、この4点の中で慶長頃とされる6と7は地色が黒・赤・白の3色であるのに対し、元和寛永頃とされる8は綸子の生地⁷⁷に地色が黒色単色であることである。

一方で、『日本風俗図集』では吉川観方は、風俗研究家という視点で、歴代の女性の服装を着用姿で紹介している。そのなかで、「42 縫箔の小袖 安土桃山時代」として掲載されているのは現在、「慶長小袖」として認識されている「染分綸子地御所車花鳥文様繡箔小袖」のレプリカである。戦後、吉川観方が出した『日本女装史』²⁴⁷においても、この考えは踏襲されていることから、一貫した考え方なのであろう。

また、昭和2年(1927)に、恩賜京都博物館で「慶長以降の女子風俗(其の二) 京都女子(浮世繪を通じて)」²⁴⁸と題して、講演をおこなっている。ここには、浮世繪を基に女子の髪型について述べている。注目したいのは、「私はくだらぬ風俗畫を描きます關係から、浮世繪を少しばかり集めまして、可なり永い間此方面の研究をして参りました」²⁴⁹とある。吉川観方の風俗・服飾研究は風俗画を基盤にしてきたということだろう。

4) 関保之助

関保之助は昭和2年(1927)の夏に、前述の吉川観方と同じ日に恩賜京都博物館で「慶長以降の女子風俗(其の一) 徳川御殿女中」²⁵⁰と題し、講演をおこなっている。講演内容は髪型や服装のことで、衣服については季節と服装について述べている。明治時代に好古会の写生会に染織品を提供している新聞記事などを第3章で述べたが、大正8年(1919)から昭和8年(1931)まで京都恩賜博物館、奈良皇室博物館と関西を拠点に活動していた²⁵¹。この間に関保之助は京都で、昭和6年(1931)から始まった染織祭の時代判定に携わっている。これは、昭和8年(1933)の『歴代服装図録一』²⁵²に記録された形で出版されている。内容は、上古・奈良朝・平安朝・鎌倉・室町・桃山・江戸時代前期・江戸時代後期と8期にわけて、その時代に応じた染織品を着用し、紹介するものである。桃山時代に区分された中の第94圖に「絞地繡箔鹿子」という名称で掲載されているのは、現在、個人蔵の重要文化財「染分風景花卉模様繡箔小袖」のレプリカである。

(2) 「慶長小袖」という言葉の誕生

ここから、現在、使用されている「慶長小袖」という言葉が文献上においていつから使われているのか、そしてその後どのように言葉として確立していったのかを検証する。

京都では、京都新聞の前身である日出新聞が、昭和 7 年(1932)年から昭和 15 年(1940)まで染織品を専門に取り扱った「染織日出新聞」という新聞を発刊していた。この新聞は、染織品である「きもの」を中心に、百貨店や呉服商などの出来事などについて書かれたものである。

その中で、昭和 8 年(1933)5 月 27 日に松坂屋について書かれた記事の中に、松坂屋は、秋冬の流行の標準として「明華模様」を打ち出すと紹介している。その構図の文章の中で「慶長衣裳」という表記がある。また、昭和 8 年(1933)、松坂屋の『秋の流行』²⁵³(図3-34)という呉服の商品カタログのような冊子において、打ち出された「明華模様」について紹介するため、「染分綸子地御所車花鳥文様繡箔小袖」は「御幸文様(慶長小袖)」という名称と図版とともに掲載されている。



図 3-34 『秋の流行』

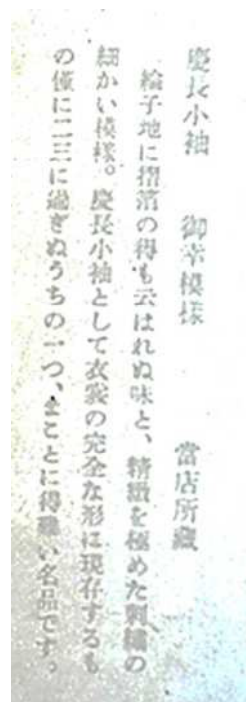


図 3-35 『秋の流行』文字部分

このページ左下部分を拡大したものが、(図 3-35)である。ここには、「慶長小袖として衣裳の完全な形の僅に二三に過ぎぬうちのひとつ」と紹介されている。その 2、3 点はなにかというと、「小袖〈繡箔風景四季花文〉」と「染分風景花卉模様繡箔小袖」が妥当であろう。それまでの文献とは違い、「慶長小袖」と紹介された冊子であり、おそらく「慶長小袖」という言葉の初出であろう。

しかし、社内には、専門家は在籍していない。『秋の流行』は松坂屋上野店から発信されている。その 2 つの事柄を念頭に考えると、上野店に近い、東京帝室博物館などの専門家、あるいは、東京美術学校の教授らの学識者などからそのように教えてもらい、文字情報として掲載したのであろうか。あるいは、本章第1節、第2節で述べたように明治時代に文字情報で、大正年間には図版とともに、東京では、「染分綸子地御所車花鳥文様繡箔小袖」のような染織品が「慶長時代小袖」または「小袖(慶長時代)」などと紹介されており、学識者のいう言葉の一部がぬけおちたのかもしれないが、松坂屋の記録などは何も書かれていないのでどちらともわからない。もしかすると、ライバル

であった三越がかつて「元禄小袖」のリバイバルなどで流行発信をした²⁵⁴ことに、なんらかの対抗心を持ち、同じ表記のしかたをし、流行発信としての基盤をもっているということを表現したかったのかもしれないが、現状ではわからない。

同じく昭和 8 年(1933)の秋に出版された、『日本染織商工史』²⁵⁵の口絵に「染分綸子地御所車文様繡箔小袖」は「絞綸子地絞縫摺箔御幸文様小袖(徳川時代(慶長頃))」と紹介されている。おそらく、この頃はこの小袖はこのような名称で呼ばれていたであろう。

昭和 10(1935)年 2 月に、松坂屋は千總より「染分綸子地花鳥御所車文様繡箔小袖」のレプリカを購入している²⁵⁶。レプリカ製作の意図や発注などについては、松坂屋・千總ともに資料が残っておらず、未確認であり、購入年月については松坂屋の資料に記載があるものの、千總には製作・販売の記録もないとのことである²⁵⁷。

吉川観方は、先にもふれたように、昭和 10 年(1935)10 月 15 日に『日本風俗大圖集』²⁵⁸を発刊しており、内容は歴代の女性の服装を紹介しているものである。第 42 図に安土・桃山時代の中年上層階級の婦人の衣服として千總にて製作したばかりの松坂屋所蔵の「染分綸子地花鳥御所車文様繡箔小袖」のレプリカを使用している(図 3-36)。前述したように「慶長小袖」は桃山時代の染織品という吉川観方の考え方なのであろう。

昭和 12 年(1937)6 月 16 日発刊の松坂屋社内報(図 3-37)では、京都仕入店にて行われた「時代衣装鑑賞会」にて「染分綸子地花鳥御所車文様繡箔小袖」を出品し、その中で「染分綸子地縫箔御幸文様小袖(慶長時代)」と紹介している。この鑑賞会には松坂屋所蔵の衣裳 20 点、裂 12、工芸品 2 点と図案部による新作 10 余点が紹介されている。この鑑賞会に出品されている染織品の中で現在、「慶長小袖・裂」とよばれる染織品群は慶長時代と紹介されている。その一方で、江戸時代初期と紹介されている染織品もあり、それらには天和・貞享・元禄・正徳・享保までの年号が細かく掲載されている。この会の鑑賞に際し、社内報に江馬務が寄稿している。この鑑賞会に出展した染織品の選定など、社内にはそれができる人員はいなかったため、江馬務による時代判定であろうと考えられる。江馬務の考え方は、吉川観方と同じく、慶長期は桃山時代に入り、「慶長小袖」は桃山時代に入れるという考え方であったのではなかろうかと推測できる²⁵⁹。この小袖は、松坂屋では長らく「淀殿所用」と伝承されてきたが、その理由はこの頃、「桃山時代」の製作とされたためであると考ええる。



図 3-37 松坂屋社内報 1937 年 6 月 16 日

その一方で、「小袖〈繡箔風景四季花文〉」は、どう表記されていたのだろうか。この小袖は 2 回図版が出版物に掲載されている。1 度目は、昭和 17 年(1942) 11 月開催の東洋美術国際研究會主催の『時代衣裳展観目録』²⁶⁰という図録である。もう一つは昭和 18 年(1943) 3 月発行の『時代衣裳圖録』²⁶¹である。2 つの目録に掲載されている全作品の所蔵者は「長尾家」であり、「小袖〈繡箔風景四季花文〉」はどちらの目録にも、図版 5 に「綸子地 染分四季花鳥文様縫箔小袖」という作品名称、時代区分は桃山時代で掲載されている。『時代衣裳圖録』には、帝室博物館の守田公夫は序のなかで「就中、綸子地染分四季花鳥文様縫箔小袖の存在は資料的に貴重なるもので、室町時代の小袖たる紫茶地扇面散文様摺箔小袖と共に雙璧の感がある」²⁶²と述べ、「慶長小袖」という言葉や、慶長期についての言及はなく、あくまでも桃山時代の染織品としている。

(3) 昭和戦後期の染織・服飾研究と「慶長小袖」

戦後、染織研究がどのように始まり、「慶長小袖」が小袖様式の中でどのように確立していったの

かどうか。「慶長小袖」については、昭和 8 年(1933)に言葉の初出を確認できているものの、戦前の他の文献などでは見出すことができていない。第 1 章で「慶長小袖」についての先行研究は紹介しているので、ここでは、戦後の研究者の桃山時代や江戸初期までの論考に調査対象をひろげ、言葉の確立を検証する。

まず、「慶長小袖」について書かれた論文は、今永清士「重要文化財 染分四季花鳥模様縫箔小袖」²⁶³である。この論文は昭和 39 年(1964)に掲載されている。それ以前にだされた論考を調査したところ、昭和 22 年(1947)に山辺知行は、「桃山・江戸期の文様の變遷」²⁶⁴という論考をだしているが、残念ながら「慶長小袖」については紹介がない。その一方で、「天文小袖」と呼ばれていた「重要文化財 小袖 黒綸子地小花鹿紅葉若松模様」(図 3-39)について、「慶長頃」の染織品であることを述べている。



図 3-39 重要文化財 小袖 黒綸子地小花鹿紅葉若松模様 東京国立博物館蔵

また、昭和 36 年(1961)に、『家庭科教育』の中に山辺知行が東京都竹早高校教諭の藤原スミ子との対談「染織工芸の伝統をたずねて」²⁶⁵で染織品の技法などについての変遷を紹介しているものの、桃山は「辻が花」で江戸にはいると雛型本から「寛文小袖」やそれ以降の「友禅染」について話しており、「慶長小袖」や「慶長頃」の染織品についての言及はない。

その為、なぜ、今永清士が、昭和 39 年(1964)に「慶長小袖」という言葉を使用したのかは、わからない。しかし、その後、山辺知行も北村哲郎も、「慶長小袖」の論文を書いていることから、研究者の中では、「慶長小袖」についての一定の共通認識があったと考えるのが妥当であろう。昭和 8 年(1933)から昭和 39 年(1964)までの約 30 年間に「慶長小袖」という言葉を文献上、見出すことはできなかった。しかし、この空白の約 30 年間に、「慶長小袖」の認識は研究者、特に東京国立博物館に所属する染織担当の研究者にはあったはずで、そのことが、昭和 39 年(1964)の今永清士の論文で、既成の学術用語のように使用されていることにつながるであろう。

その後、第1章で述べたように1960年代後半以降に、美術研究、染織・服飾研究の世界で「慶長小袖」という言葉が定着し、本章冒頭で述べた辞典の項目に組み入れられたことがわかる。

(4) 平成の染織・服飾研究と「慶長小袖」

平成に入ると「小袖」変遷をテーマにした展覧会などを通し、丸山伸彦や河上繁樹が「慶長小袖」について考察している。そこで、まず、戦前から所蔵者が変更され、その後、まとまった形で文献が出された旧野村コレクションにおいて、旧蔵者の野村正治郎と、国立歴史民俗博物館に収蔵されたあとにこのコレクションを研究対象としているのは丸山伸彦、澤田和人である。彼らにより監修された文献などの時代判定を検証することにより、大正年間、昭和戦前期と、その後の「慶長小袖」の考え方の変遷を検証する。

昭和13年(1938)野村正治郎は、所蔵していた小袖雛型屏風100点を掲載して『時代小袖雛型屏風』を出版した。ここに掲載された小袖屏風は昭和16年(1941)、恩賜京都博物館で開催された展覧会でも展示された。その後、これらを含む野村正治郎の染織品は、彼の死後、遺族とともに、アメリカにわたり、昭和34～35年(1959～1960)にニューヨークのメトロポリタン美術館で展示され、アメリカで保管されていた。その後、明治100年事業として日本に戻され、昭和58年(1983)に千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館の所蔵品となった²⁶⁶。

平成6年(1994)『近世きもの万華鏡—小袖屏風展』という展覧会が開催された。この展覧会は丸山伸彦の企画・構築によるものである。ほぼ同じ小袖屏風を出品していることから、野村正治郎の慶長頃の染織品と丸山伸彦の「慶長小袖」を比較検討することができる。そこで、野村正治郎が慶長頃と紹介した染織品を基準に、どのように丸山伸彦が捉えているのかを表(3・11)にした。

野村正治郎の「慶長小袖」は『慶長風俗展覧会図録』の時点は、地色が黒のみであった。しかし、『時代小袖雛型屏風』では、地色は染め分けまで入っている。野村正治郎による論考がないので、検証は難しいものの、地色に関する見解が大正時代から昭和という時間の流れとともに徐々に変化しているのがわかる。この変化の理由についてはわからない。一方で、丸山伸彦の「慶長小袖」は紅、黒紅、白の3色に染め分けた地色で、綸子である。技法も鹿子絞りが細かいことなど、構図などで「慶長小袖」を時代判定しており、その次の寛文小袖への過渡期の染織品も含んでいるからか、丸山伸彦の指し示す「慶長小袖」のほうが野村正治郎よりおおいのである²⁶⁷。小袖屏風については、国立歴史民俗博物館のHPに掲載されているが、この情報は『近世きもの万華鏡—小袖屏風展』からとある。さらに、丸山伸彦の監修によりこれを一冊にまとめた『国立歴史民俗博物館資料図録2 野村コレクション 小袖屏風』²⁶⁸も同館からだされている。

一方、澤田和人が作品解説を担当した、平成25年(2013)に国立歴史民俗博物館より出版された『野村コレクション服飾I』で『慶長風俗展覧会図録』の野村正治郎により時代判定された染織品とくらべてみる。対象とする染織品は国立歴史民俗博物館所蔵の「[重要文化財]黒綸子地桐唐草入大葉模様絞縫箔小袖」である。野村正治郎が大正年間に「慶長時代小袖」としていた小袖を澤田和人は、「黒紅綸子地 鹿子絞・刺繍・金刺繍・摺箔・縁箔 江戸時代初期」としており、「慶長小袖」という言葉を使っていない。

野村正治郎の『時代小袖離型屏風』の図版番号と文字情報	8	10	11	12
	地黒輪子地なし縫箔模様御簾襦 文禄慶長頃	地染輪子地なし板様御簾襦 文禄慶長頃	地染分輪子地なし縫箔模様御簾襦 慶長頃	地黒輪子地なし縫箔模様御簾襦 慶長頃
『時代小袖離型屏風』の画像と作品名称				
	「黒輪子地端に雪輪模様紋縫箔小袖」	「染分輪子地斜取り菊牡丹模様紋縫箔小袖」	「黒輪子地木葉板模様紋縫箔小袖」	「染分輪子地扇面花卉模様紋縫箔小袖」
丸山伸彦氏の見解 『近世きもの万華鏡—小袖屏風展』図録より	作品番号8:「黒輪子地端に雪輪模様紋縫箔小袖」 作品解説における「慶長小袖」の説明: 無し	作品番号10:「染分輪子地斜取り菊牡丹草履模様紋縫箔小袖」江戸前期 作品解説における「慶長小袖」の説明: 有り 内容: 輪子、虹、黒紅、白の3色で地を波浪形で斜め方向に染め分け、牡丹と草履を刺繍によってあらわした慶長小袖の意匠構成を示している。慶長小袖の底子は、粒が小さく密で、かたちが一様でなく、輪郭に滲みがない	作品番号11:「黒輪子地木葉板模様紋縫箔小袖」江戸前期 作品解説における「慶長小袖」の説明: 有り 内容: 底子は、慶長小袖の常で粒の周囲に補筆を施し滲みを消去している	作品番号12:「染分輪子地扇面花卉模様紋縫箔小袖」江戸前期 作品解説における「慶長小袖」の説明: 無いが、内容で、『むかしむかし物語』を引用し、「地無小袖」について述べている
野村正治郎の『時代小袖離型屏風』の図版番号と文字情報	13	14	31	32
	地紅輪子地なし縫箔模様御簾襦 慶長頃	地黒輪子地なし縫箔模様御簾襦 慶長頃	地白輪子地鹿の子入縫箔文様御簾襦 慶長頃	地輪子鹿の子きり箔文様御簾襦 慶長頃
『時代小袖離型屏風』の画像と作品名称				
	「染分輪子地端に松桜向鶴模様紋縫箔小袖」	「黒輪子地花入蘭模様紋縫箔小袖」	「染分輪子地草花模様紋縫箔小袖」	「染分輪子地蕪花模様紋小袖」
丸山伸彦の見解	作品番号11:「染分輪子地端に松桜向鶴模様紋縫箔小袖」江戸前期 作品解説における「慶長小袖」の説明: 有り 内容: 慶長小袖に多くみられる繡刺した地の染分け(絞り染)。2色以上領域にわたる文様の配置は慶長小袖では画期的なこと	作品番号17:「黒輪子地花入蘭模様紋縫箔小袖」江戸前期～中期 「寛文小袖」に分類している	作品番号15:「染分輪子地草花模様紋縫箔小袖」江戸前期 作品解説における「慶長小袖」の説明: 無し、しかし、文章内でこの作品を「慶長小袖」としている。	作品番号16:「染分輪子地牡丹模様紋小袖」江戸前期 作品解説における「慶長小袖」の説明: 有り 内容: 紅、黒紅、白という慶長小袖の常套的に用いられる組み合わせであるが刺繍が併用されていない。寛文小袖につながるもの

表 3-11 野村正治郎と丸山伸彦の「慶長小袖」に関する記述

図版はすべて 国立歴史民俗博物館蔵 画像提供: 国立歴史民俗博物館

平成 11 年(1999)に京都国立博物館で「花洛のモード—きもの時代—」という展覧会が開催された²⁶⁹。大きく 11 章にわけられ、第 3 章に「慶長小袖」をテーマとした、「残照の美—慶長小袖—」という章立てがあり、小袖などの染織品 11 点が紹介されている。この章立を含め、展覧会構築や作品選定、作品解説などにおいて小袖を含む染織品の部分を担当したのは河上繁樹である。ここで展示された「慶長小袖」について検証してみたい。

- 35 筋と円に草花文様小袖
- 36 山に桜円文散し繡箔(能装束)
- 37 染分松皮菱取り文様小袖
- 38 染分桜花に松鶴文様小袖
- 39 染分小手毬に松楓文様小袖
- 40 染分熨斗に草花文様小袖
- 41 柵に草花文様打敷
- 42 縞に鉄線唐草文様打敷
- 43 斜取り破垣文様小袖(屏風貼り)
- 44 草花文様小袖(屏風貼り)
- 45 三龍胆車に草花文様振袖

である。この中で、河上繁樹はこれら 11 点を大きくわけて桃山期から慶長期への過渡期的様相をしめすもの、慶長小袖、それ以降とわけている。過渡期とされるのは、35、36、45 である。35 には紫練緯地 絞り染・刺繍・摺箔とある。45 は黒練緯地 絞り染め・刺繍・摺箔とある。両方とも地が練緯である。

そして、いわゆる「慶長小袖」として紹介されているのは、37、38、39 である。地は綸子や紗綾に染め分けをしている。絞り染、刺繍、摺箔とある。そして、生地や技法は同じものの、40 は文様構成、41 は墨書の銘、42 は刺繍の方法、43、44 は「地無し」であることから「慶長小袖」とみなしている。

この河上繁樹の分類の中で、重要視したいのは、いわゆる「慶長小袖」と、桃山時代から江戸時代前期の過渡期とされる小袖を分類していることである。河上繁樹により、過渡期と紹介された 2 つの練緯地の小袖について、検討してみると、第 2 章でも述べたように、これこそが本来の「慶長小袖」なのではないだろうか。平成に入り、染織品の研究は進み、小山弓弦葉や澤田和人の論考が相次いで発表され、今まで、先行研究の踏襲という形で論じられてきた「辻が花」や「慶長小袖」についても新たな知見が加えられた。

第 3 節で述べた、明治 39 年(1906)、『京都美術』第 3 号に掲載されていた「慶長年代染繡裂」の説明に濃紫とあること、大正年間に野村正次郎が黒単色の「慶長小袖・裂」を慶長時代と紹介していたこと、明石染人が黒の地色の「慶長裂」を慶長時代といていたことから総じて、慶長頃の染織品は黒や紫で練緯であったのではなかろうかという、一定の「慶長頃」の染織品についての考え方

の存在を見出した。このことは、近年、澤田和人が見出した銘のある慶長裂により製作年代への再検討に近い考えであり、本来の「慶長小袖」の新たな考え方になるのではなだろうか。そのことが、先行研究で「慶長小袖」の「慶長」は年号とはかわりがない、あるいは慶長年間の製作ではないとしてきた、不可解な言説に対する説明の一助になるのではないだろうか。

第7節 まとめ

明治時代以降、東京と京都では、それぞれ、独自のアプローチで染織・服飾研究が行われていた。そのことにより、明治時代において、慶長頃の染織品についての考え方は、東京と京都では、違う認識であり、少ないながら指し示された情報は異なるものであった。東京のアカデミックな学術・研究の中で、小杉楡邨らにより、現在のいわゆる「慶長小袖」につながる概念が生み出された。

その後、大正時代にはいと、モノクロやカラー写真を使用し、染織品を多く掲載する書籍が出版された。そのことにより、「慶長時代小袖」、「慶長頃の染織品」は、視覚的に認識されるようになった。しかし、この時点においては、染織品の分類に統一性はなかった。

昭和戦前期は、桃山時代、慶長期の染織品について、細分化された時代判定が生み出された。その結果、現在の、いわゆる「慶長小袖」が「慶長小袖」と認識されるようになった。

戦後、研究者が「慶長小袖」を含む染織品を、論じる際、「慶長小袖」が慶長期に製作され、着用された客観的な事実がないことに気づき、慶長期に製作され着用されたものではない、あるいは、様式であるなどという見解で、先行研究がうみだされ、踏襲されてきた。

近年、慶長期の銘のある染織品を澤田和人が見出したことにより、先行研究とはことなる慶長小袖の染織品の見解が生み出された。その慶長裂は、練緯で黒の地色で、技法は鹿の子絞り、刺繍、摺箔であった。先行研究と澤田和人の見解の違いは、本章で見出した、明治時代以降の研究史の中で京都において慶長年間の染織品が濃紫である、あるいは、野村正治郎、明石染人が述べた紫や黒の地色であったことは、澤田の見出した客観的な事実と合致していた。さらに、第2章の『雁屋資料』に記載された「地無」の言葉で、練緯の生地「地無」が施されていたことについても、練緯の生地の染織品で地色を染め、鹿の子や刺繍、摺箔などの技法の染織品が元和9年にも発注されていたことから、現在、典型的とされる綸子の3色に染め分けた「慶長小袖」は、「地無」ではないとかがえられるであろう。しかし、すでに明治時代に小杉楡邨らにより生みだされた「慶長小袖」の概念は、現在まで整理もされず、踏襲されてきたことがわかった。

1 日本織物新聞社編 『染織辞典』、日本織物新聞社、1931年。

2 日本織物新聞社編 『染織辞典復刻版』、はくおう社、1974年。

3 板倉寿郎・野村喜八・元井能・吉川清経兵衛・吉田光邦 『原色染織大辞典』、淡交社、1977年。

4 板倉寿郎・野村喜八・元井能・吉川清経兵衛・吉田光邦 前掲註3、367ページ。

5 板倉寿郎・野村喜八・元井能・吉川清経兵衛・吉田光邦 前計註3、1212～1213ページ。

6 上村六郎・辻合喜代太郎・辻村次郎、『日本染織辞典』東京堂出版、1978年。

7 中江克己 『染織辞典』、泰流社、1987年。

8 中江克己 前掲註7、171～172ページ。

-
- 9 和田辰雄『日本服装史』、雄山閣、1933年。
- 10 小山弓弦葉『「辻が花」の誕生〈ことば〉と〈染織技法〉をめぐる文化資源学』、東京大学出版会、2012年。
- 11 小山弓弦葉 前掲註 10、8 ページ。
- 12 小山弓弦葉 前掲註 10、175 ページ。
- 13 東京国立博物館『東京国立博物館百年史』、東京国立博物館、1973年、1 ページ。
- 14 東京国立博物館 前掲註 13、37～39 ページ。
- 15 東京国立博物館 前掲註 13、39 ページ。
- 16 東京国立博物館 前掲註 13、243～244 ページ。
- 17 東京国立博物館 前掲註 13、253 ページ。
- 18 東京国立博物館 前掲註 13、253～259 ページ。
- 19 東京国立博物館 前掲註 13、258 ページ。
- 20 日出新聞 明治 21 年(1888)9 月 15 日。
- 21 朝日新聞 明治 34 年(1901)4 月 27 日 朝刊 7 頁。
- 22 林英男『近現代人名事典』、吉川弘文館、2001 年、418 ページ。
- 23 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』、第十一巻、1959 年、150 ページ。
- 24 昭和女子大学近代文学研究室 前掲註 23、148～149 ページ。
- 25 『好古雑誌』、第 1 号、編修:佐伯利麿、出版:吉川半七、明治 14 年(1881)7 月 26 日。
- 26 朝日新聞 明治 35 年(1902)9 月 26 日 朝刊 3 面。
- 27 好古社『好古雑誌』、第 2 編 8 号、好古社、明治 15 年(1882)12 月 23 日、9～16 ページ。
- 28 好古社『好古雑誌』、第 2 編 9 号、好古社、明治 16 年(1883)1 月 17 日、6～13 ページ。
- 29 好古社『好古雑誌』、第 2 編 7 号、好古社、明治 15 年(1882)11 月 25 日、9 ページ。
- 30 青山清吉は慶応 2 年(1866)～没年不詳。野間省一が日本書籍出版協会出版より 1968 年に出版した『日本出版百年史』には、享保年間創業の雁金屋青山堂の 8 代目が青山清吉であることや嘉永 6 年(1853)、明治 6 年(1873)の江戸・東京府の書籍問屋に名が記されていることが書かれている(1067～1070 ページ)。(生没年の出典:稲岡勝、『出版文化人物事典—江戸から近現代・出版人 1600 人』、日外アソシエーツ株式会社、2013 年、6 ページ)
- 31 稲岡勝『出版文化人物事典—江戸から近現代・出版人 1600 人』、日外アソシエーツ株式会社、2013 年、6 ページ。
- 32 前田健次郎『好古業誌』、第 1 編、好古社事務所、明治 25 年(1892)2 月 31 日(原文ママ)、25 ページ。
- 33 前田健次郎『好古業誌』、第 2 編、好古社事務所、明治 25 年(1892)2 月 20 日、25～28 ページ。
- 34 前田健次郎『好古業誌』、第 3 編、好古社事務所、明治 25 年(1892)3 月 24 日、25～27 ページ。
- 35 前田健太郎『好古業誌』、第 4 編、好古社事務所、明治 25 年(1892)4 月 25 日、30～32 ページ。
- 36 前田健次郎『好古業誌』、第 5 編、好古社事務所、明治 25 年(1892)5 月 28 日、23～34 ページ。
- 37 小山弓弦葉 前掲註 10、178 ページ。
- 38 横井時冬(安政 6 年～明治 39 年(1859～1906))は明治時代に活躍した日本経済史学の先駆者。文学博士。名古屋藩士の家に生まれる。明治 21 年(1888)高等商業学校教員となり、同校に新設された内国商業取調係の業務を担当する。帝国大学の書庫および史料編纂係・帝国博物館・内閣文庫・水戸彰考館などの所蔵文献資料、東京府庁へ引き継がれた旧幕府文書などを渉猟するとともに、各方面の古老からの記取調査を重ね、その成果となる『帝国商業史講義録』を刊

行した。また 31 年(1898)に同書を基礎にして『日本工業史』『日本商業史』を公刊。高等商業学校では 23 年(1890)に助教授、28 年(1895)に教授となっている。また、高等工業学校・商業教員養成所・早稲田大学商科などで講師もつとめる。(林英男 『近現代人名事典』、吉川弘文館、2001 年、1125～1126 ページ)

39 黒川真頼(くろかわまより)(文政 12 年～明治 39 年(1829～1906))は江戸・明治時代の国学者。上野国山田郡桐生町の機業家生まれ、13 歳の時に江戸の国学者黒川春村に国語・国文・音韻・和歌を学ぶ。18 歳の時、春村の遺言をうけ、その学統の後継者となり黒川の家名を継ぎ、翌年江戸へ移住し、門徒に教授する。明治維新以降は大学少助教・文部権大助教・元老院権大書記生を歴任、文部省・内務省・農商務省を通じて博物館博物館(東京国立博物館の前身)の創設時代に史伝・図書課長として貢献し、『工芸志料』『考古画譜』『古事類苑』帝王部の編纂を行い、多くの論文を発表し、東京大学講師・東京学士会院会員・御歌所寄人・内国勸業博覧会審査官を勤め、また帝国博物館・御歌所・帝国大学・東京美術学校・東京音楽学校に重要な位置を占めるなど幅広く学界・美術界にて活躍した。(林英男 『近現代人名事典』、吉川弘文館、2001 年、390 ページ)

40 内藤耻叟(ないとうちそう)(文政 7 年～明治 36 年(1824-1903))は明治時代の歴史学者。水戸藩士美濃部又三郎の次男として生まれ、内藤家を継ぎ、弘化 3 年(1846)家督を相続する。幕末時期は処罰され、隠居、削祿、謹慎を命ぜられ、東北地方を転々としたこともあったが、明治 7 年(1874)以降は大蔵省・東京府に勤め、11 年(1878)小石川区長、14 年(1881)群馬県中学校長、19 年(1886)から 24 年(1891)まで帝国大学文科大学教授、32 年(1899)には宮内省嘱託となり、この間、文筆活動に専心し、『(開国起原)安政記事』、『徳川十五代史』、『徳川実記校訂標記』など著書多く、また『古事類苑』の編纂にも関与した。(林英男 『近現代人名事典』、吉川弘文館、2001 年、733 ページ)

41 宮崎幸麿(みやざきちまろ)は舊石州津和野藩士で、嘉永 3 年(1850)に生まれる。本教神理学を大國隆正、福羽美静に受ける。明治 5 年(1872)上京し、太政官の職に就き、記録編輯に従事する。明治 14 年(1881)福羽美静が好古社を設立するにあたり、これを賞賛して監事となり『好古叢誌』『好古小集録』等を編纂した。明治 16 年(1883)に勤王の志士山縣大式の墳墓の発見をし、『寶明唱義實気記』を著す。同年、宮内省御用掛を兼務し、編纂局御用取り扱と成り、太政紀要編纂に従事する。明治 25 年(1892)年に、内閣記録課長となり法規分類大全編纂を擔當する。なお、宮崎幸麿については、明治 33 年(1900)に出された『日本現今人名辞典』日本現今人名辞典発行所 編・刊以降発刊された人物辞典などに掲載がないため、没年などについても不詳である。(高野義夫 『明治人名辞典Ⅱ 下巻』、1988 年、ページ掲載無)

42 東京大学附属図書館ホームページより。

43 集古会 『集古』、1、思文閣出版、1980 年、(オリジナルは林若吉:集古會誌)、161～163 ページ。

44 集古会 前掲註 43、161 ページ。

45 集古会 前掲註 43、19～20 ページ。

46 大野延太郎は、大野雲外の本名。(文久 3 年(1863)から昭和 13 年(1938))。越前国丸岡に

て出生。考古学者、画家として知られる。明治 25 年(1892)から帝国大学理科大学人類学研究室の図画制作を委嘱されるようにあり、考古遺物の実測図を作成し、教室の学者から重宝された。また、遠隔地への調査へも同行、発掘品の調査・整理・研究にあたる。そのうち、自身も考古学に興味を覚え、独自に研究を行うようになり、自身の考えを述べるようになった。(大高利夫、『明治大正人物事典Ⅱ文学・芸術・学術編』、日外アソシエーツ株式会社、2011 年、114 ページ)

47 八木奘三郎(慶応 2 年(1866)～昭和 17 年(1942))は明治・大正・昭和前期の考古学者。江戸にて出。明治 24 年(1891)に、帝国大学理学大学人類学研究室に「標本取扱」として勤め、その間、坪井正五郎の指導のもとに論文などを発表。明治 35 年(1902)年、大学を去り、1 年間、台湾総督府学務課嘱託として赴任する。無職の生活ののちに大正 2 年(1913)より、李王職博物館、旅順博物館、満州鉄道などに勤務した(白井勝美・高村直助・鳥海靖・由井正臣、『日本近現代人名辞典』、吉川弘文館、2001 年、1077 ページ)

48 林若吉は、林若樹の本名。書物収集家。(明治 8 年(1875)～昭和 13 年(1938))。東京にて出生。東京帝国大学の坪井正五郎が主宰する人類学教室に出入りし、考古学を修める。考古学以外にも書物、錦絵、玩具など幅広い趣味を持ち様々な物を収集、明治 29 年(1869)、坪井正五郎の人類研究室を主体に始まった趣味人同好会・集古會の中心人物として活躍、長く会誌「集古」の編集に携わった。収集の中でも書物に見るべき物が多く、大正期を代表する収集家の一人とされ、明治 37 年(1904)～昭和 7 年(1932)の 29 年間に集めた書名、冊数などを記録した「若樹文庫収得書目」を残した。(大高利夫、『明治大正人物事典Ⅱ文学・芸術・学術編』、日外アソシエーツ株式会社、2011 年、518 ページ)

49 集古会 前掲註 43、19 ページ。

50 集古会 前掲註 43、27 ページ。

51 集古会 前掲註 43、143 ページ。

52 集古会 前掲註 43、148 ページ。

53 集古会 前掲註 43、145～147 ページ。

54 小山弓弦葉 前掲註 10、180～183 ページ。

55 集古会 前掲註 43、255～257 ページ。

56 集古会 前掲註 43、268～270 ページ。

57 集古会 前掲註 43、380 ページ。

58 集古会、『集古』、2、思文閣出版、1980 年、175～181 ページ。

59 集古会 前掲註 43、159～160 ページ。

60 中井淳史、「集古の伝統 尚古の系譜—日本歴史考古学の近代」、『日本語・日本文化』、31 号、大阪外語大学日本語日本文化センター、2005 年、3 ページ。

61 集古会 前掲註 58、40 ページ。

62 集古会 前掲註 58、264 ページ。

63 集古会 前掲註 58、264 ページ。

64 集古会 前掲註 43、386 ページ。

65 集古会 前掲註 43、423 ページ。

66 小山弓弦葉 前掲註 10、179 ページ。

67 小山弓弦葉 前掲註 10、178 ページ。

68 好古社編纂部代表宮崎幸麿、『好古類纂』、第 1 編第 8 集、好古社、1902 年、6 ページ。

69 好古社編纂部代表宮崎幸麿、『好古類纂』、第 1 編第 9 集、好古社、1902 年、1 ページ。

70 好古社編纂部代表宮崎幸麿、『好古類纂』、第 2 編第 11 集、好古社、1906 年、11 ページ。

71 編者など不詳、『好古会記事』、7 ページ。

72 日出新聞 明治 45 年(1912)3 月 25 日 朝刊 2 面。

73 集古会『集古』、3、思文閣出版、1980 年、288～292 ページ。

74 集古会 前掲註 73、334～338 ページ。

75 集古会 前掲註 73、355～358 ページ。

-
- 76 日出新聞 明治 30 年(1897)3 月 18 日 2 面の金子静江「京都博覧会沿革記(1)」。
- 77 日出新聞 明治 30 年(1897)3 月 19 日 2 面の金子静江「京都博覧会沿革記(2)」。
- 78 日出新聞 明治 30 年(1897)3 月 23 日 6 面の金子静江「京都博覧会沿革記(4)」。
- 79 日出新聞 明治 30 年(1897)3 月 26 日 6 面の金子静江「京都博覧会沿革記(7)」。
- 80 日出新聞 明治 30 年(1897)4 月 7 日掲載面不明の金子静江「京都博覧会沿革記(15)」。
- 81 野村成之編『京都美術雑誌』、第 57 号、明治 30 年(1897)。
- 82 野村成之編 前掲註 81、2 ページ。
- 83 日出新聞 明治 30 年(1897)5 月 4 日 掲載面不明に「京都七條御料地なる帝室博物館は去る一日午前八時を以て開かれたり」とある。
- 84 東京国立博物館 前掲註 13、262～263 ページ。
- 85 東京国立博物館 前掲註 13、263 ページ。
- 86 京都美術協会『京都美術雑誌』は、1 号が明治 23 年(1890)10 月、2 号は明治 25 年(1892)10 月。
- 87 京都美術協会『京都美術協会雑誌』は 1 号(明治 25 年(1892)7 月)～155 号(明治 38 年(1905)6 月)。
- 88 京都美術協会『京都美術』は、1 号(明治 38(1905)年 9 月)～48 号(大正 8 年(1919)12 月)。
- 89 佐藤道信の推薦文、雄松堂のアーカイブ HP より。
- 90 平野重光の推薦文、雄松堂のアーカイブ HP より。
- 91 例えば、廣田孝「竹内栖鳳の絵画論」、美学、201 号、2000 年、37～46 ページなど。
- 92 山田由希代「近代京都における絵画と織物工芸との関係ー二代川島甚兵衛の企画力をめぐってー」、美学、219 号、2004 年、28～41 ページ。
- 93 平光睦子「明治期の美術工芸論における「嗜好」と「流行」ー京都論壇での展開からー」、待兼山論叢、第 39 号、2005 年、1～23 ページ。
- 94 坂口さとこ「京都美術協会雑誌に見る明治期・大正期の京都における光琳派について」、『デザイン理論』、46、2005 年、37～50 ページ。
- 95 村形明子『アーネスト・F・フェノロサ文書集成 翻刻・翻訳と研究(上)』、京都大学学術出版会、2000 年。
- 96 竹居明男『『日出新聞』記者金子静枝と明治の京都 明治二十一年古美術調査報道記事中心にー』、芸艸堂、2013 年。
- 97 谷口香嶠『京都美術雑誌』、第 1 号、京都美術協會事務所、明治 23 年(1890)、17 ページ。
- 98 日出新聞 明治 23 年(1890)2 月 7 日。
- 99 谷口香嶠 前掲註 97、17～18 ページ
- 100 日出新聞 明治 23 年(1890)2 月 6 日。
- 101 日出新聞 明治 23 年(1890)2 月 6 日。
- 102 谷口香嶠 前掲註 97、19～23 ページ。
- 103 谷口香嶠『京都美術雑誌』、第 2 号、京都美術協會事務所、明治 25 年(1892)、11～17 ページ。
- 104 谷口香嶠 前掲註 103、9 ページ。
- 105 京都美術協会 前掲註 87。
- 106 日出新聞 明治 28 年(1895)10 月 15 日。
- 107 野村成之『京都美術協会雑誌』、第 41 号、京都美術協會事務所、明治 28 年(1895)。
- 108 野村成之 前掲註 107、13 ページ。
- 109 日出新聞 明治 28 年(1895)10 月 15 日 1 面。
- 110 野村成之『京都美術協会雑誌』、第 40 号、京都美術協會事務所、明治 28 年(1895)。
- 111 野村成之 前掲註 110、25 ページ。

-
- 112 細辻昌 『京都美術博覧会品目』、明治 23 年(1890)。
113 細辻昌 前掲註 112。
114 国立国会図書館 HP「博覧会 近代技術の展示場より」。
115 日出新聞 明治 28 年(1895)4 月 1 日 4 面。
116 日出新聞 明治 36 年(1903)3 月 15 日 1 面。
117 京都美術協会 『古美術展覧会出品目録』、明治 36 年(1903)。
118 京都美術協会 前掲註 117、1～3 ページ。
119 谷口香嶠 前掲註 97、3 ページ。
120 谷口香嶠 前掲註 97、18 ページ。
121 野村成之 『京都美術協会雑誌』、第 6 号、京都美術協會事務所、明治 25 年(1892)。
122 野村成之 前掲註 121、口絵。
123 野村成之 前掲註 121、口絵。
124 野村成之 『京都美術協会雑誌』、第 10 号、京都美術協會事務所、明治 26 年(1893)。
125 野村成之 前掲註 124、口絵。
126 野村成之 前掲註 124、口絵。
127 野村成之 前掲註 121、40～41 ページ。
128 神坂雪佳 『京都美術』、第 3 号、京都美術協會事務所、明治 39 年(1906)。
129 神坂雪佳 前掲註 128、15 ページ。
130 昭和女子大学近代文学研究室 前掲註 23、148～149 ページ。
131 東京帝室博物館 『東京帝室博物館講演集 第四冊』、東京帝室博物館、1930 年。
132 和田辰雄 『日本服装史』、雄山閣、1933 年。
133 和田辰雄 前掲註 132、11 ページ。
134 和田辰雄 前掲註 132、11 ページ。
135 櫻井秀 『日本服飾史』、雄山閣、1924 年。
136 櫻井秀 前掲註 135、7～9 ページ。
137 『日本服飾史』(日本風俗畫大成 9)、中央美術社、1929 年。
138 高橋健自 『服飾沿革図』、関原勝三郎、1923 年。
139 東京帝室博物館 『服飾特別展覧會案内』、東京帝室博物館、1926 年。
140 東京帝室博物館 前掲註 131。
141 高橋健自 『歴世服飾図説(上・下)』、聚精堂書、1929 年。
142 『皇典講究所講演』、64、皇典講究所、1889 年。
143 東京帝室博物館 前掲註 131。
144 東京国立博物館 前掲註 13、520 ページに昭和 12 年の列品整理の掛係に名前があり、鑑査官であることが書かれている。
145 東京帝室博物館 前掲註 131、2 ページ。
146 森川六太郎 『日本衣服史』、献文社、1925 年。
147 森川六太郎 前掲註 146、序。
148 和田辰雄 前掲註 132、11 ページ。
149 江馬務 『江馬務著書集』、中央公論社、1976 年。
150 野村正治郎 『誰が袖百種』、芸艸堂、1919 年。
151 不明 『誰が袖百種解説 全』、(大正 8(1919)年の可能性が大きい)。
152 野村正治郎 前掲註 151、28～42 ページ。
153 前掲註 151 内 28 ページに「京都の素封家野村正治郎氏は・・・(中略)その珍藏の裂地の中より、粹を抜撰して漸く百種となし、『誰が袖百種』と題して梓行せられ、不肖のこれが解説を徴せらる。予年來風俗史及び工藝史を修め、嚮きに風俗研究會を起し、又氏の首唱より染織研究會を創立して大に氏の知遇をつつあり、氏の日頃の厚意に酬ひ、聊學界に稗盒せんと欲し、欣びて立どこ

ろにこの囑二應ず。されど素より菲才淺學、拙稿纔かに成れるも、内容空素、又讀むに堪えず、安んぞ又氏の素志に副ふを得むや。思ふて忸怩汗顔に堪えざるなり。而して本編の如きも氏の慇懃に遇ひて、別紙解説を経とし、予が従來歿頭せし研究を緯とし、駛筆兩三日にして成せるもの、元より完璧にあらず、ただ従來多く世に表はれざりし學說二三發表し得しは聊か予の光榮なれど、これも元野村氏の高教に俟つ所多く、衷心大に同氏の厚意を感謝に堪えざるなり」とある。そして、この文章の最後に、大正 8 年 11 月 26 日と記してある。

- 154 江馬務 『日本服飾史要』、星野書店、1936 年。
- 155 故金子錦二著(編集森川清太郎) 『日本刺繡史』、田中利八、1928 年。
- 156 故金子錦二著(編集森川清太郎) 前掲註 155、奥付。
- 157 故金子錦二著(編集森川清太郎) 前掲註 155、序。
- 158 野村正治郎 『誰が袖百種』、芸艸堂、1919 年。
- 159 野村正治郎 『続誰が袖百種』、芸艸堂、1930～1932 年。
- 160 野村正治郎 『友禅研究』、芸艸堂、1922 年。
- 161 野村正治郎 前掲註 160、126 ページ。
- 162 野村正治郎 前掲註 160、127～128 ページ。
- 163 国立歴史民俗博物館 『野村コレクション 服飾 I』、国立歴史民俗博物館、2013 年。
- 164 野村正治郎 『小袖と振袖』、芸艸堂、1927 年。
- 165 野村正治郎 前掲註 164、目次。
- 166 野村正治郎 『御所とき江戸とき』、芸艸堂、1931 年。
- 167 野村正治郎 『時代小袖雛形屏風』、芸艸堂、1938 年。
- 168 この『時代雛形屏風』において作品名称に書かれている襦褌(りょうとう)の文字はこの字ではないが、文字が入力できなかったため、この字を使用した。
- 169 野村正治郎 註 167 の自序の中に『友禅研究』において新説を発表したときに「或る学者は「定説の無いのをよい事にして」などゝ否定した。勿論定説は無いが、定説がなければこそ新しい研究を要するので、真面目な研究価値は実にその間に存在するのである(野村正治郎『時代小袖雛形屏風』芸艸堂 1938 年 自序)」とあるように自身の研究に対する心構えが読み取れる。
- 170 河上繁樹、河上繁樹、「近現代における染織文化財の価値形成—日本における国指定文化財と民間コレクションの動向を中心に—」、山野英嗣 『東西文化の磁場』、国書刊行会、2013 年。
- 171 荘加直子 2014 年度修士論文「慶長小袖の誕生と展開—名称と遺品の実態の解明—」、日本女子大学大学院家政学研究科、2015 年。
- 172 平光睦子 「京都図案会の活動と理念—明治期京都の染織図案」、『服飾文化学会誌』、12 号、2011 年、71～80 ページ。
- 173 高野義夫 『明治人名事典Ⅲ 上巻』、日本図書センター、1994 年、81～82 ページ。
- 174 横川公子 『叢書・近代日本のデザイン 39 染織図案変遷史』、織田萌・毛斯綸協会、ゆまに書房、2012 年。
- 175 横川公子 前掲註 174、399 ページ。
- 176 平光睦子 前掲註 172、71 ページ。
- 177 『京都図案』、京都図案会雑誌部、1907、1908 年。
- 178 平光睦子 前掲註 172、73 ページ。
- 179 『大正図案』、佛教藝術院出版部、1915 年。
- 180 田村春曉 『田村社中展覧会作品集 第一回』、芸艸堂、1922 年。
- 181 田村春曉 『田村社中展覧会作品集 第二回』、芸艸堂、1923 年。
- 182 田村春曉 前掲註 181、序。
- 183 綵工会 『慶事衣裳展観図録』、芸艸堂、1931 年。
- 184 丸山伸彦 「小袖意匠に学ぶ「野口コレクション」の美」、『美しいキモノ』、247 号、ハースト婦

人画報社、2014 年。

185 横川公子 前掲註 174、399 ページ。

186 横川公子 前掲註 174、399 ページ。

187 横川公子 『叢書・近代日本のデザイン 40 近代友禅史』、原作は村上文芽、ゆまに書房、2013 年。

188 京都市立美術工藝學校校友会 『京都市立美術工藝學校一覽』、1912 年。

189 松尾芳樹 「京都市立美術工芸学校及び同絵画専門学校校友会と校友会について」、『京都市立芸術大学美術学部 研究紀要』、35 号、1990 年、55～110 ページ。

190 松尾芳樹 前掲註 189、58～65 ページ。

191 京都市立美術工藝學校・京都市繪畫專門學校校友會 「二葉」、大正十五年號、1926 年。

192 もともと、加藤一雄が『日本美術工芸』に「京都画壇周辺帖」として出した論文の昭和 39 年(1964)8 月 311 号分の「京都画壇周辺帖(六)」と「季刊芸術」に書いた論文などを含め、岡田満により 1984 年に『京都画壇周辺 加藤一雄著作集』として出された書籍の中にある。

193 加藤一雄 前掲註 192、47 ページ。

194 加藤一雄 前掲註 192、49 ページ。

195 加藤一雄 前掲註 192、48 ページ。

196 加藤一雄 前掲註 192、49 ページ。

197 西陣織物館 『綾錦』(全十巻)、芸艸堂、1916 年～1925 年。

198 河上繁樹 前掲註 170、215 ページ。

199 西陣織物館 『八重かすみ』、芸艸堂、1927 年。

200 田村春曉・岸本景春・山鹿清華 『繡纈帖』 芸艸堂、1918 年。

201 田村春曉・岸本景春・山鹿清華 前掲註 200、序。

202 野口安左衛門、『友禅の変遷』 野口安左衛門商店、1926 年。

203 『慶長風俗展覧会図録』、松屋呉服店、1926 年。

204 読売新聞の大正 15 年(1926)年 9 月 30 日の新聞広告の中に松屋呉服店の催しの紹介があり、明日より「慶長風俗展覧会」の開催告知をしている。終了日時の案内はない。

205 正木直彦 『十三松堂日記(第 1 巻)』、中央公論美術出版、1965 年、422 ページ。

206 正木直彦 前掲註 205、426 ページ。

207 恩賜京都博物館 『染織名品展覧会目録』、1931 年。

208 恩賜京都博物館 前掲註 207、凡例。

209 西陣織物館 『綾錦』(第一巻) 芸艸堂 1916 年 扉

210 恩賜京都博物館 前掲註 207 など

211 藤慶之 「京都染織工芸の 20 世紀 刺繍を芸術にまで高めた岸本景春とその系譜」、『染織 α』、染織と生活社、2002 年、50～55 ページ。

212 『第 28 回関西図案会 作品集』、芸艸堂、1915 年。

213 田村春曉・山鹿清華・岸本景春、前掲註 200。

214 碓井小三郎(うすいこさぶろう)とは『新潮日本人名辞典』新潮社辞典編集部 1991 年によると「明治・大正期の郷土誌家、政治家。京都生まれ。(中略)大正 4 年(1915)から近代京都の地誌を代表する『京都坊目誌』などを著した」という人である。

215 田村春曉・山鹿清華・岸本景春 前掲註 200、序。

216 田村春曉・山鹿清華・岸本景春 前掲註 200、序。

217 西陣織物館 『綾錦』(第七巻)、芸艸堂、1921 年。

218 堀喜二 『近松時代風俗展覧會圖録 小袖の巻』、1922 年

-
- 219 山田直三郎 『花小袖』、芸艸堂、1925 年。
- 220 岸本景春 『小そで幕』、美術圖書出版部、1925 年。
- 221 岸本景春 前掲註 220。
- 222 岸本景春 『綵霞帖』、芸艸堂、1929 年。
- 223 佐野正男 「鐘紡繊維美術館の開館まで」、毎日新聞社、『鐘紡コレクションガイド』所収、1988 年、16 ページ。
- 224 明石染人 『日本染織史』、雄山閣、1928 年。
- 225 明石国助(染人) 『上代日本染織史』、思文閣出版、1921 年。
- 226 河上繁樹 前掲註 170、222 ページ。
- 227 『星岡』、第 51 号、星岡窯研究所、1935 年。
- 228 前掲註 227、4～5 ページ。
- 229 前掲註 227、5 ページ。
- 230 前掲註 227、5 ページ。
- 231 明石染人 『桃山慶長 縵繡精華』、田中平安堂、1936 年。
- 232 岡田三郎助 『時代裂』、座右實刊行會、1931 年～1934 年。
- 233 岡田三郎助 『時代裂拾遺』、座右實刊行會、1934 年～1936 年。
- 234 岡田三郎助 前掲註 232、第 2 輯、20 ページ。
- 235 岡田三郎助 前掲註 232、第 12 輯、138 ページ。
- 236 岡田三郎助 前掲註 232、第 6 輯、63 ページ。
- 237 岡田三郎助 前掲註 232、第 7 輯、68 ページ。
- 238 岡田三郎助 前掲註 232、第 9 輯、105 ページ。
- 239 岡田三郎助 前掲註 232、第 14 輯、163～164 ページ。
- 240 岡田三郎助 前掲註 232、第 3 輯、28 ページ。
- 241 永島信子 『日本衣服史』 芸艸堂 1933 年 62 ページ
- 242 永島信子 前掲註 241、262 ページ。
- 243 永島信子 前掲註 241、4～5 ページ。
- 244 吉川観方 『衣服と文様』、吉川観方、1933 年。
- 245 『日本風俗大圖集 卷 2 女子編』、マリア書房、1935 年。
- 246 丸山伸彦 「近代の造形としての小袖屏風」、『国立歴史民俗博物館図録 2 野村コレクション 小袖屏風』、国立歴史民俗博物館、1992 年、161～182 ページ。
- 247 吉川観方 『日本女装史』、全日本人形師範会、1968 年。
- 248 吉川観方 「慶長以降の女子風俗」、恩賜京都博物館、1928 年。
- 249 吉川観方 前掲註 248、57 ページ。
- 250 関保之助 「慶長以降の女子風俗」、恩賜京都博物館、1928 年。
- 251 小山弓弦葉 前掲註 10、178 ページ。
- 252 歴代服装圖録刊行會 『歴代服装図録一』歴代服装圖録刊行會、1933 年。
- 253 『秋の流行』、松坂屋、1933 年。
- 254 岩淵令治 「明治・大正期における「江戸の商品化」三越百貨店の「元禄模様」と「江戸趣味」創出をめぐって」、国立歴史民俗博物館研究報告、197 集、2016 年、49～110 ページ。
- 255 泉俊秀、『日本染織商工史』、商業研究資料編輯所、1933 年。
- 256 松坂屋の記録。
- 257 一般財団法人千總文化研究所所長加藤結理子氏にご教示いただいた。
- 258 前掲註 245。
- 259 江馬務 『江馬務著作集第 2 卷 服装の歴史』、1976 年、218～219 ページ。
- 260 石澤正男 『時代衣装展観目録』、東洋美術國際研究會、1942 年。
- 261 長尾家 『時代衣装展観目録』、1943 年。

-
- ²⁶² 長尾家 前掲註 261、序 2～3 ページ。
- ²⁶³ 今永清士 「重要文化財 染分四季花鳥模様縫箔小袖」、『MUSEUM』、163 号、東京国立博物館、1964 年、26～28 ページ。
- ²⁶⁴ 山辺知行 「桃山・江戸期の小袖文様の變遷」、『美術と工藝』、第 2 卷第 4 號、1947 年、17～21 ページ。
- ²⁶⁵ 対談を収録、家庭教育社、『家庭科教育』、第 35 卷第 10 号、1961 年、14～28 ページ。
- ²⁶⁶ 丸山伸彦 「近世きもの万華鏡—小袖屏風展」、国立歴史民俗博物館、『近世きもの万華鏡—小袖屏風展』内、国立歴史民俗博物館、1994 年、13～23 ページ。
- ²⁶⁷ 丸山伸彦 前掲註 266 では、12 点を「慶長小袖」として掲載している。
- ²⁶⁸ 国立歴史民俗博物館 『国立歴史民俗博物館資料図録 2 野村コレクション小袖屏風』、国立歴史民俗博物館、2002 年。
- ²⁶⁹ 京都国立博物館 『花洛のモード きものの時代』、思文閣出版、2001 年。

第4章 結論

本研究では、先行研究において、小袖様式の一つとされる「慶長小袖」という言葉の「慶長」は年号と直接の結びつきはなく慶長年間(1596～1615)の製作を意味するものではない¹⁾とされながらその用語の解明はなされておらず、現状、「慶長小袖」の定義を含む詳細についてはほとんど未解明である中で、明治時代以降の染織・服飾研究について時代をおって検証し、文献上で、明治時代に「慶長頃」の染織品について東京と京都の研究者の考え方に相違を見出した。

以下各章ごとの成果をあげる。

第1章は序章とし、「慶長小袖」や「研究史」の先行研究の検討と、そこから導き出された解明すべき疑問点を見出した。先行研究と、平成に入り、小山弓弦葉による「辻が花」の分類の中でみいだされた慶長頃の染織品についての論考、澤田和人が慶長 8 年(1603)の銘を持つ「慶長裂」を見出し、製作年代を再検討した論文により、「慶長小袖」は慶長期の製作や着用ではない、「慶長」という年号は「慶長小袖」とは関係ないとされた先行研究に対し、関係があるという新知見であった。このことをふまえ、以下の 4 つの解決すべき問題点を導き出した。

- ・「慶長小袖」という言葉はいつ、だれが言い始めたのか？
- ・「慶長小袖」の江戸時代の呼称とされる「地無」「繡箔」という言葉は本当に現在の「慶長小袖」なのか。
- ・「慶長小袖」と慶長年間とのかかわりはどのようなものなのか。
- ・「慶長小袖」を含む染織品の研究はどのように始まり、成立していったのか。

第2章では、序章で導きだされた問題点である、いわゆる「慶長小袖」と実際に慶長年間に制作されたと考えられる小袖を比較検討し、「慶長小袖」の概念について考察した。

先行研究の「慶長小袖」の考え方は研究者間で一定の認識があったが、「慶長小袖」についての明確な定義はなかった。いわゆる「慶長小袖」については、先行研究を調査し、地色にて区別した。「慶長小袖」と呼ばれる染織品を「慶長小袖」であるか否かという枠の中での研究であり、それらについて、踏襲された先行研究の中で「慶長小袖」の定義を見出すことには限界があったと考える。

さらに、江戸時代の呼称とされる「地無」「繡箔」という言葉については、「慶長小袖」とイコールではなかった。また、それぞれの言葉の意味の違いは時代を経ることにより変化し、どの文献を基盤としているのかにより様々な解釈が生み出された。これらの文献から、「地無」と「繡箔」について考察できたことは、「地無」には「鹿子」「繡箔」などの技法の意味も含め使われることである。調査した文献のみでも多くの考察を見出すことができた。

まず、「地無」であるが、生地においては、「雁金屋資料」においては練緯であることが考察できるが、井原西鶴の『萬の文反古』では、綸子であったことで、他の『色道大鏡』や『むかしむかしのものがたり』やそれ以降の文献にかかれたものは、綸子や綾であろうと考えられる。ここで考えられるのは時代を経ることにより、「地無」という言葉のさすものが変化しているということである。さらに、『守貞漫稿』では、「地無」には箔を使用しない総模様もさしている。そして、「地無」の意味は、その間に出版された文献のなかではある一定の意味をみいだすことができる。先行研究にて論じられている

地が見えないという意味である。また、この「地無」の着用者に関しては、おおよそ、女性であった。

一方、「繡箔」については、「雁金屋資料」の正保 3 年(1645)の「尾形宗謙呉服詠物帳」の中では「繡箔」のみだが、延宝 6 年(1678)の『色道大鏡』では、「地無縫箔」という言葉となる。また、「繡箔」の着用に関しては大夫が着用していたことや、婦人の礼服であったことを『守貞漫稿』などでは紹介している。「繡箔」の着用は身分の高い女性ということが言葉の考察により確認ができた。

また、実際に文献調査などで見出した黒や紫の地色で練緯の生地、「慶長小袖」の特徴とされる繡箔の技法を使用した染織品が遺品として複数存在するののかという視点で考察をした。その結果、数点ではあるもののこの要素を持ちえた染織品を確認することができた。その為、現在の「桃山小袖」から「慶長小袖」の間に両方の要素(生地は練緯+技法は繡箔、鹿の子絞り)を持つ染織品の存在が確認できた。このことは、この間の染織品の変遷が劇的だとされたことに対し、その変遷を少しゆるやかなものにしたことも意義があると考えてよいであろう。

第3章では、染織品のいわゆる「慶長小袖」が研究史の中でどのように「慶長小袖」という言葉とむずびつけられたのかを、明治時代以降にだされた文献などを中心に時代をおって考察した。その過程で、明治時代においては東京と京都では、研究に大きな隔たりがあることを見出し、それぞれをわけて考察した。その結果、「慶長小袖」の概念が明治時代には東京と京都で大きな認識の違いがあったことが確認できた。

東京では、小杉楡邨により、『好古類纂』において「慶長小袖」を始めとする染織品自体について時代判定はしていないものの、明治 35 年(1902)に 2 度にわたり慶長頃の女性の風俗について述べていることを見出すことができた。その後、『好古会記事』のなかで明治 41 年(1908)3 月 6 日から 9 日に上野公園櫻ヶ岡美術協会会館にて開催された第 48 回好古会において、「中古以来女装服飾沿革の一斑」と題した講演である。藤原時代から年代順に女装の沿革を述べた中に「慶長、元和、寛永」についての部分のこの頃の小袖について述べている。

其小袖にも、地黒、地赤、などといふ綸子地を染まして、縫ものしたるして、又其のうちかけの文様、地質など、定りとは有ませねど種々の縫物、金銀箔入のものもありました。²

ここでは、明治時代に、現在の「慶長小袖」とよばれる染織品が「慶長頃の小袖」と研究者の中で認識をされ始め、綸子を黒や赤に染め、様々な縫い(刺繡)と箔があることを述べている。小杉楡邨は、「慶長小袖」という用語は使用していないものの、現在「慶長小袖」と呼ばれる染織品についての説明や、「慶長から寛永頃」の女装についても言及していることがあきらかとなった。

また東京では、染織・服飾研究は、考古学や、女装沿革などの歴史学などが土台にあることが特徴であり、このことは、東京国立博物館の前身である帝国博物館や東京帝室博物館の館員の考えや、収蔵品区分などにおおきな影響を与えていたことも確認できた。

東京では、明治 15 年(1882)に、有栖川宮幟仁親王の令旨を奉戴して東京市麹町区飯田町に創設された「皇典講究所」、明治 14 年(1881)に福羽美静と松浦詮、小杉楡邨、井上頼罔らにより国粹保存の為に設立したとされる³「好古社」、東京大学の人類学・考古学者であった坪井正五郎

の研究室に在籍した大野延太郎、八木槇三郎らによる「集古会」など様々な研究会が存在した東京ではアカデミックな人たちを中心に明治時代以前の日本の歴史について研究しており、歴史を軸にした風俗画やその時代判定などの中で染織品は取り扱われる傾向にあった。

しかし、京都では、本稿にて取り上げた「京都美術協会」の会員に多くの工芸家が名を連ね、自身の製作をしながら過去の研究をするというスタイルをとっていた。工芸家は、「内國勸業博覧會」、「新古美術展覧会」などへの良い作品が出品できるように、古いもの「古美術」を参考に「新製品」を製作するだけでなく、その為の研究や考察をしていたといっても過言ではないだろう。これは、周りに「古美術」が多く存在していたことも、また、産業としての染織・陶芸・金工・などの工芸家が存在していたことも大きかったであろう。

他に大きな美術を研究する団体はなく、「京都美術協会」に求心力があったので、美術と美術工芸についての考え方が一定の範囲で統一され、それを基盤に、研究と製作をし、それらの発展に一丸となって邁進した風潮があった。このことが、おそらく、明治・大正・昭和戦前と時代を経た染織・服飾研究における、東京と京都の違いに影響を与えたのではなかろうかと考える。そのことが、日本における染織研究史について、その始まりや、発展の経緯などが明確でないことに大きな影響を与えているのではないかということを見出した。

また、このことは、その後の昭和戦前期まで東京と京都の「慶長小袖」や「慶長期」の染織品の捉え方の違いに影響をあたえたのではなかろうかと考えられる。大正時代に入ると染織品を掲載した書籍が出版されたが、染織品の時代判定や作品名称などはバラバラで統一性がなかった。また、染織品の書籍にはカラー写真が使われはじめるようになったのも大正時代にはいつからで、現在、典型的な「慶長小袖」とされる文化庁所蔵の重要文化財「小袖〈繡箔風景四季花文〉」もカラー図版で掲載されている。その後、昭和に入り、少しずつ慶長期の染織品が統一されるようになり、現在、典型的とされる黒紅・紅・白の地色の染織品が「慶長小袖」と認識されていくようになった。これは、明治 30 年代に小杉楹邨が示唆した「慶長頃」の小袖の概念である。その一方で、明石染人は、慶長期の染織品を黒や紫のものであると論じ、それらに寛文頃のものを含むことを示唆している。これは、明治時代に京都で考えられていた「慶長頃」の染織品の概念である。戦後になり、明石染人の研究を基盤に「慶長小袖」は「慶長」という年号とはかかわりがない、あるいは様式名称であるといった考えで論じられるようになり、その考えは踏襲されてきた。しかし、近年、澤田和人や小山弓弦葉の「慶長期」の染織品の対する新たな見解が紹介された。

澤田和人や小山弓弦葉の論考を基に、筆者の明治時代からの染織・服飾研究史研究をたどり、「慶長小袖」の概念の成立と、練緯の生地に見出した紫の染織品の考察を加えることにより以下の 4 点を染織服飾研究における顕著な成果として提示する。

1 つめは、いわゆる「慶長小袖」を慶長頃の染織品と考え始めたのは、明治 35 年(1902)に小杉楹邨が風俗画などを通して女装沿革を論じる中でであることを明らかにしたこと。

2 つめは、明治時代に京都で慶長年間の製作と考えられていた染織品は、現在のいわゆる「慶長

小袖」とは大きくことなっていたことを明らかにしたこと。

3 つめは、実際には、明治時代の京都における研究者たちの考え方が正しいと考えられること。

4 つめは、東京では文化行政の主導の下、学識者を中心に染織・服飾研究が行われていたが、京都では呉服製作に携わる工芸家が染織・服飾研究をしつつ新製品を製作していたことから、「慶長小袖」についての見解に大きなへだたりがうまれたことを明らかにしたこと。

さらに、慶長期に製作された染織品に関しては以下の考察を行った。

澤田和人や小山弓弦葉の論考を基に、裂を調査することにより、紫や黒の練緯の生地 of 染織品が複数現存することを確認できたことや、紫で見出した「扇面短冊文様」(松坂屋コレクション) (図 4-1) のような裂は、どちらかという「桃山小袖」と呼ばれる染織品群に近く、黒の地色の「三龍胆車に草花文様振袖」(法隆寺蔵) (図 4-2) のものは、鹿の子絞りや繡箔の技法を使用していることや、文献などにはなかったものの紅の練緯のもの「緋絹地岩紋百花縫箔文様小袖裂」(松坂屋コレクション) (図 4-3) は、現在、「慶長小袖」と呼ばれる染織品にたどり着く前の試行錯誤をしているような前のような染織品であった。このように、練緯から綸子に生地が切り替わることや、それでも技法や文様構成を過渡期的ように引きずり、影響を受けた染織品を現在の小袖変遷の中に、組み込まれたとしたら、先行研究で言われてきた「桃山小袖」から「慶長小袖」への劇的な変化という考えに対し、少しだけゆるやかに変化することができるのではないだろうか。

また、現在、典型的とされる「慶長小袖」である「重要文化財 染分綸子地御所車花鳥文様繡箔小袖」(松坂屋コレクション) (図 4-4) も、単色で「慶長小袖」から「寛文小袖」への過渡期のものとされるもの「雲丸に花鳥帯模様小袖」(松坂屋コレクション) (図 4-5) も、この時期についても定かではないことから、逆ということもかんがえることはできるだろう。もし変遷が逆であったとすれば、練緯の生地のものに、現在「慶長小袖」の技法の特徴とされる刺繡、摺箔、鹿の子絞りをしたものがあり、そのあとに生地が練緯から綸子にかわり、染め分けをするようになり、「寛文小袖」と呼ばれる染織品へと変遷がさらにゆるやかになることとなるのかもしれないが、現状はわからない。

客観的に製作期や着用期などを示す文字情報も少なく、染織技法なども、いつから使用されたのかについても定かではないことから、染織品の調査をし、その中から得られる数少ない情報で小袖変遷を論じるのは難しいものの、今回、変遷の中で取り上げられてこなかった染織品群を取り入れることにより、今まで、不可解とされてきた「桃山小袖」から「慶長小袖」への劇的な変化が、少し、ゆるやかな変化にできたとしたなら、その劇的と言われ続けてきた不可解さの一部解消になったと考える。



図 4-1 扇面短冊文様 松坂屋コレクション



図 4-2 三龍胆車に草花文様振袖 法隆寺蔵 写真提供: 便利堂



図 4・3 緋絹地岩紋百花縫箔文様小袖裂 松坂屋コレクション



図版 4-4 重要文化財 染分縮子地御所車花鳥文様縮箔小袖 松坂屋コレクション



図 4-5 雲丸に花鳥帯模様小袖 松坂屋コレクション

本研究では、明治時代以降の染織・服飾研究史をたどり、「慶長小袖」という言葉が、現存する特定の染織作品群と結びつけられていく過程をあきらかにした。さらに、本来、慶長期に製作された染織品がどのようなものであったかということについて、他の研究を参照しながら考察をおこなった。

次のように結論づけることができる。明治時代に東京の研究者たちが「慶長時代の小袖」と考えた染織品群はその後、昭和時代に入って「慶長小袖」と呼ばれるようになった。しかしそれは、明石染人がすでに昭和前半期から示唆し、その後の研究者も控えめに述べていたように、実は慶長期に製作されたものではなく、慶長期以降に製作されたこと、その時期もさらに遅くなる可能性が、近年の研究により明確となった。その一方で、明治時代に京都の研究者たちが慶長期の染織品と考えて、(彼らは慶長年間を桃山時代とみなしたので)桃山時代に繰り入れた染織品群が、現代の研究水準からみると、実際の慶長期の製作品だったのである。文化行政主導で研究がおこなわれていた東京と、染織産業に即した形で研究がおこなわれていた京都との違いであろう。

つまり、国立博物館など文化行政の中心である東京の研究者の強い影響下で言葉の定着が見られ、染織品のコレクターたちもそれに従ったが、その間違いは早くから気づかれており、その違和感が昭和後半期になって、「「慶長小袖」は慶長期の製作ではない」、「「慶長小袖」は年号の「慶長」とは関係ない」といった、不可解な言説となって表れていたのである。その不可解さに違和感を覚え、近代染織・服飾研究史をたどりながら、明治時代以降の染織・服飾研究の成立と、そのなかで生み出された「慶長小袖」という学術用語の成立について明らかにした。

今後は、「慶長小袖」以外の他の様式の研究へも幅を広げる、近代染織・服飾研究史をあきらかにしていきたい。

¹ 北村哲郎「染織における江戸初期—慶長縫箔考—」、『MUSEUM』、271号、東京国立博物館、1973年、4～13ページ。

² 編者など不詳『好古会記事』、発刊年不詳、7ページ。

³ 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』、第十一巻、昭和女子大学近代文学研究室、1959年、148～149ページ。

図版一覧

第1章

- 1-1 重要文化財 染分綸子地御所車花鳥文様繡箔小袖 松坂屋コレクション
- 1-2 重要文化財 紫地段花菱円文散草花模様箔小袖 平野美術館蔵 京都国立博物館寄託
- 1-3 三龍胆車に草花文様振袖 法隆寺蔵 写真提供:便利堂
- 1-4 菱鶴丸草花模様等古幡残欠 称妙寺所蔵(神奈川県立金沢文庫保管)

第2章

- 2-1 重要文化財 小袖 黒紅地熨斗藤模様繡箔 東京国立博物館蔵
- 2-2 黒綸子地草木鶴亀幾何模様小袖 東京国立博物館蔵
- 2-3 重要文化財 小袖 黒綸子地小花鹿紅葉若松模様 東京国立博物館蔵
- 2-4 慶長年代染繡裂『京都美術』第3号 京都美術協会 書籍所蔵:国立国会図書館
- 2-5『微古帖十』芸艸堂
- 2-6『微古帖十』芸艸堂
- 2-7『微古帖十』芸艸堂
- 2-8『微古帖十』芸艸堂
- 2-9 三龍胆車に草花文様振袖 法隆寺蔵 写真提供:便利堂
- 2-10 重要文化財 紫地段花菱円文散草花模様箔小袖 平野美術館蔵 京都国立博物館寄託
- 2-11 扇面短冊文様 松坂屋コレクション
- 2-12 茶絹地枝垂桜に扇面短冊文様 松坂屋コレクション
- 2-13 短冊扇散模様辻が花裂 東京国立博物館蔵
- 2-14 扇短冊竹桜模様 女子美術大学美術館蔵 画像資料提供:女子美術大学美術館
- 2-15 扇藤模様裂 女子美術大学美術館蔵 画像資料提供:女子美術大学美術館
- 2-16 桐貝段替模様 松坂屋コレクション
- 2-17 桜藤に地紙文慶長裂 ぎをん齋藤
- 2-18 濃茶地雲取に梅鶯文様 松坂屋コレクション(名古屋市博物館蔵)
- 2-19 秋草文様 松坂屋コレクション(名古屋市博物館蔵)
- 2-20 黒地田毎文様 松坂屋コレクション(名古屋市博物館蔵)
- 2-21 田毎文様 松坂屋コレクション(名古屋市博物館蔵)
- 2-22 黒綸子地苺文様 松坂屋コレクション(名古屋市博物館蔵)
- 2-23 黒絹地苺に鹿子小花房文様 松坂屋コレクション(名古屋市博物館蔵)
- 2-24 雪輪壺文様裂 個人像
- 2-25 雪輪壺文様裂 個人像
- 2-26 小袖裂 黒地雲取菊梅文様 関西学院大学博物館蔵
- 2-27 雲取菊梅(慶長)精好地『花小袖』芸艸堂
- 2-28 紅平絹地土派に松桐桜模様小袖裂 東京国立博物館蔵

2-29 岩に百花模様裂 松坂屋コレクション

3-30 松梅に秋草文様裂 個人像

2-31 岩に百花文慶長裂 ぎをん齋藤

第3章

3-1 朝日新聞 明治39年1月9日朝刊6面 資料所蔵:国立国会図書館

3-2 『好古類纂』 好古社

3-3 『好古類纂』 好古社

3-4 『好古類纂』 好古社

3-5 『集古』 思文閣出版(東京国立博物館所蔵「重要文化財 白練緯地松皮菱模様小袖」の明治時代の模写)

3-6 重要文化財 白練緯地松皮菱模様小袖 東京国立博物館蔵

3-7 『好古類纂』 好古社

3-8 『好古類纂』 好古社

3-9 『好古類纂』 好古社

3-10 日出新聞 明治23年1月26日の付録 資料所蔵:国立国会図書館

3-11 北政所桂裂 『京都美術雑誌』 京都美術協会 書籍所蔵:国立国会図書館

3-12 日出新聞 明治28年4月1日 4面 資料所蔵:国立国会図書館

3-13 日出新聞 明治36年1月1日 18面 資料所蔵:国立国会図書館

3-14 秀次侍妾和歌掛物表装ノ裂 『京都美術協会雑誌』 京都美術協会 書籍所蔵:国立国会図書館

3-15 有栖川裂 『京都美術雑誌』 京都美術協会 書籍所蔵:国立国会図書館

3-16 慶長年代染繡裂 『京都美術』 京都美術協会 書籍所蔵:国立国会図書館

3-17 『綾錦』 芸艸堂

3-18 『綾錦』 芸艸堂

3-19 『綾錦』 芸艸堂

3-20 薬師如来種子幡 松坂屋コレクション

3-21 『綾錦』 芸艸堂

3-22 『八重かすみ』 芸艸堂

3-23 『慶長風俗展覧会図録』 松屋呉服店

3-24 『微古帖十』 芸艸堂

3-25 関西図案会作品集』 書籍所蔵:国立国会図書館

3-26 『綾錦』 芸艸堂

3-27 『花小袖』 芸艸堂

3-28 『花小袖』 芸艸堂

3-29 『花小袖』 芸艸堂

- 3-30 『花小袖』 芸艸堂
- 3-31 『花小袖』 芸艸堂
- 3-32 『花小袖』 芸艸堂
- 3-33 『花小袖』 芸艸堂
- 3-34 『秋の流行』 松坂屋
- 3-35 『秋の流行』 松坂屋
- 3-36 『風俗大画集』 マリア書房
- 3-37 松坂屋社内販売報告
- 3-38 重要文化財 小袖 黒綸子地小花鹿紅葉若松模様 東京国立博物館蔵

第4章

- 4-1 扇面短冊文様 松坂屋コレクション
- 4-2 三龍胆車に草花文様振袖 法隆寺蔵 写真版提供:便利堂
- 4-3 岩に百花模様裂 松坂屋コレクション
- 4-4 重要文化財 染分綸子地御所車花鳥文様繡箔小袖 松坂屋コレクション
- 4-5 雲丸に花鳥帯文様小袖 松坂屋コレクション

参考文献一覧

※参考文献は「資料」と「研究論文・書籍」に大別し、その中で項目ごとに記した。

※資料関係は発刊年順、研究論文は著者名のアイウエオ順にした

資料

【定期刊行物】

谷口香嶠 『京都美術雑誌』 1号～2号 田中治兵衛 1890～1892年
佐伯利麿 『好古雑誌』 1～3編 吉川半七 1881～1883年
『皇典講究所講演集』 皇典講究所 1891～1889年
前田健次郎 『好古業誌』 好古社事務所 1891～1897年
野村成之 『京都美術協会雑誌』 1号～155号 京都美術協会事務所 1892～1905年
宮崎幸麿 『好古類纂』 好古社出版部 1900～1909年
神坂雪佳 『京都美術』 1号～48号 山田直三郎 1905～1919年
『中央美術』 中央美術社 1915～1929
風俗研究會 『風俗研究』 風俗研究会 1916～1949年
『恩賜京都博物館講演集』 恩賜京都博物館 1929～1935年
『秋の流行』 松坂屋上野店 1930～1935年頃
『染織美術』 日本染織美術協会 1950～1952年
『そめとおり』 染織新報社 1950～2009年
文化庁文化財部 『月刊文化財』 1963年～
集古会 『集古』 1～10巻 思文閣出版 1980年（オリジナルは林若吉『集古會誌』 1896～1944年）

【新聞】

読売新聞 明治7年(1874)～昭和20年(1945) ヨミダス歴史館のデータベースを利用
日出新聞 明治18年(1885)～大正2年(1914) 国立国会図書館所蔵のマイクロフィルムを使用
朝日新聞 明治30年(1897)～昭和20年(1945) 聞蔵Ⅱビジュアルの記事データベースを利用
染織日出新聞 昭和7年(1932)～14年(1939) 国立国会図書館所蔵のマイクロフィルムを使用

【染織作品集】

田村春曉・岸本景春・山鹿清華 『繡纈帖』 芸艸堂 1918年
西陣織物館 『綾錦』(全十巻) 芸艸堂 1916年～1925年
野村正治郎 『誰が袖百種』 芸艸堂 1919年
編者など不詳 『誰が袖百種解説 全』 1919年か
野村正治郎 『友禅研究』 芸艸堂 1922年
山田直三郎 『花小袖』 芸艸堂 1925年
野口安左衛門 『友禅の変遷』 野口安左衛門商店 1926年
西陣織物館 『八重かすみ』 芸艸堂 1927年

野村正治郎 『小袖と振袖』 芸艸堂 1927 年
 岸本景春 『小そで幕』 美術圖書出版部 1925 年
 岸本景春 『綵霞帖』 芸艸堂 1929 年
 野村正治郎 『続誰が袖百種』 芸艸堂 1930～1932 年
 野村正治郎 『御所どき江戸どき』 芸艸堂 1931 年
 岡田三郎助 『時代裂』 座右寶刊行會 1932 年～1934 年
 吉川観方 『衣服と文様』 吉川観方 1933 年
 岡田三郎助 『時代裂拾遺』 座右寶刊行會 1934 年～1936 年
 『日本風俗大圖集 卷 2 女子編』 マリア書房 1935 年
 明石染人 『桃山慶長 纈繡精華』 田中平安堂 1936 年
 野村正治郎 『時代小袖雛形屏風』 芸艸堂 1938 年
 吉川観方 『日本女装史』 全日本人形師範会 1968 年
 『小袖文様』 三一書房 1968 年
 『色と文様 桃山・慶長編』 光村推古書院 1970 年
 『大彦コレクション 染織の美』 芸艸堂 1975 年
 『日本の染織』 中央公論社 1979～1980 年
 『鐘紡コレクション』 毎日新聞社 1988 年
 『国立歴史民俗博物館資料図録 2 野村コレクション小袖屏風』 国立歴史民俗博物館 2002 年
 『別冊太陽 小袖からきものへ』 平凡社 2005 年
 『日本美術史全集』(全 20 巻) 小学館 2012 年～2018 年
 『野村コレクション 服飾 I』 国立歴史民俗博物館 2013 年
 齋藤貞一郎 『布の道標』 紫紅社 2014 年

【展覧会図録】

〈戦前〉

掘喜二 『近松時代風俗展覧會圖録』 1922 年
 『慶長風俗展覧会図録』 松屋呉服店 1925 年
 『服飾特別展覧會案内』 東京帝室博物館 1926 年
 『染織名品展覧会目録』 恩賜京都博物館 1931 年
 『歴代服装図録 染織祭編』 歴代服装図録刊行会 1933 年
 『染織精華』 京都恩賜博物館編 便利堂 1936 年
 東洋美術国際研究會 『時代衣装展覧目録』 1942 年
 長尾家 『時代衣装展覧目録』 1943 年

〈戦後〉

『近世の小袖意匠—野村コレクションより』 国立歴史民俗博物館 1986 年
 『図案の変貌 1868—1945』 東京国立近代美術館工芸館 1988 年
 『かがやける小袖の美 田畑コレクション』 朝日新聞社 1990 年
 『近世きもの万華鏡—小袖屏風展』 朝日新聞社 1994 年
 『江戸モード大図鑑—小袖文様にみる美の系譜—』 NHK プロモーション 1999 年
 『吉川観方と京都文化』 京都文化博物館 2002 年
 『輝ける慶長時代の美術—桃山から江戸へ』 中日新聞社 2003 年
 『小袖 江戸のオートクチュール』 日本経済新聞社 2008 年
 『[染]と[織]の肖像—日本と韓国・守り伝えられた染織品』 国立歴史民俗博物館 2008 年
 『江戸 KIMONO アート きもの文化と美の装い』 NHK プロモーション 2011 年
 『京の小袖』 京都文化博物館 毎日新聞社 2011 年

【図案集】

『京都図案』 京都図案会 1900～1919 年

『微古帖』 芸艸堂 1914 - 1917 年

『関西図案会作品集』 22～42 回 芸艸堂 1914～1919 年

『関西図案会大典記念 作品集』 芸艸堂 1915 年 『大正図案』 仏教芸術院出版部 1915 年

田村春曉『田村社中展覧会作品集 第一回』 芸艸堂 1922 年

田村春曉『田村社中展覧会作品集 第二回』 芸艸堂 1923 年

綵工会 『慶事衣裳展覧図録』 芸艸堂 1931 年

【近世資料】

藤村作 『評釋 西鶴全集 第 1 卷』 至文堂 1947 年

山根有三 『小西家旧蔵 光琳関係資料とその研究』 中央公論美術出版 1962 年

『日本随筆大成』 吉川弘文館 1974 年

『続日本随筆大成』 吉川弘文館 1981 年

広嶋進 「西鶴の遺稿作品」 谷脇理史・西島孜哉編集 『西鶴を学ぶ人のために』 世界思想社、1993 年

『近世風俗史(3)(守貞謾稿)』 岩波文庫 1999 年

藤本箕山 『新版 色道大鏡』 八木書店 2006 年

【年史・社史・校史・日記】

京都市立美術工藝学校校友会 『京都市立美術工藝學校一覽』 1912 年

京都市立美術工藝學校・京都市繪畫專門學校校友會 『二葉』 大正十五年號 1926 年

正木直彦 『十三松堂日記』 中央美術出版 1965 年

野間省一 『日本出版百年史』 日本書籍出版協會出版 1968 年

『松屋 100 年史』 株式会社松屋 1969 年

東京国立博物館 『東京国立博物館百年史』 東京国立博物館 1973 年

『松坂屋百年史』 松坂屋百年史編纂委員會((株)松坂屋) 2010 年

【辞典・事典】

〈染織関連〉

日本織物新聞社 『染織辞典』 日本織物新聞社 1931 年

板倉寿郎・野村喜八・元井能・吉川清経兵衛・吉田光邦 『原色染織大辞典』 淡交社 1977 年

河緒実英 『日本服飾史辞典』 東京堂出版 1969 年

日本織物新聞社 『染織辞典』 (復刻版) はくおう社 1974 年

上村六郎・辻合喜代太郎・辻村次郎 『日本染織辞典』 東京堂出版 1978 年

中江克己 『染織事典』 泰流社 1987 年

丸山伸彦 『日本史色彩事典』 吉川弘文館 2012 年

〈人名・人物〉

高野義夫 『明治人名事典Ⅲ 上巻、下巻』 日本図書センター 1994 年

白井勝美・高村直助・鳥海靖・由井正臣 『日本近現代人名辞典』 吉川弘文館
2001 年
林英男 『近現代人名事典』 吉川弘文館 2001 年
竹内誠・深井雅海 『日本近世人名辞典』 吉川弘文館 2005 年
大高利夫 『明治大正人物事典Ⅱ 文学・芸術・学術編』 日外アソシエーツ株式
2011 年
稲岡勝 『出版文化人物事典—江戸から近現代・出版人 1600 人』 日外アソシエ
ツ株式会社 2013 年

【その他資料】

細辻昌『京都美術博覧会品目』 1890 年
三宅米吉編 『九鬼君演説大意』 1889 年
京都美術協會 『古美術展覧会出品目録』 1903 年
『東京帝室博物館講演集』 帝室博物館 1930 年

研究論文・書籍

【慶長小袖に関する研究論文】

明石染人 「慶長時代の染織を語る」 『星岡』 第 51 号 星岡窯研究所 1935
年 4～5 ページ
明石染人 「桃山・慶長時代の縵繡を頌ふ」 『桃山慶長縵繡精華』 田中平安堂
1936 年 序
今永清士 「重要文化財 染分四季花鳥模様縫箔小袖」 『MUSEUM』 163 号
東京国立博物館 1964 年 26～27 ページ
北村哲郎 「染織における江戸初期—慶長縫箔考—」 『MUSEUM』 271 号 東
京国立博物館 1973 年 4～13 ページ
北村哲郎 「慶長小袖と寛文小袖—時代が生む様々な美—」 『日本美術』 102 号
日本美術社 1973 年 108～109 ページ
河上繁樹 「慶長小袖の系譜—その成立と展開—」 『MUSEUM』 383 号 東京国
立博物館 1983 年 4～15 ページ
河上繁樹 「江戸時代前期の小袖—慶長時代から寛文時代へ—」 『月刊文化財』
228 号 第一法規株式会社 1982 年 27～34 ページ
切畑健 「元和・寛永銘小袖裂打敷(真珠庵藏)について—江戸時代前期の染織資
料—」 『MUSEUM』 376 号 東京国立博物館 1982 年 18～26 ページ
澤田和人 「銘文のある染織品—国立歴史民俗博物館[染]と[織]の肖像—日本と
韓国・守り伝えられた染織品展から」 『美術フォーラム 21』 第 19 号 2009 年
50～55 ページ
澤田和人 「慶長小袖の時代性—中国・韓国の染織品と比較して」 『アジア遊学』
132 号 2010 年 214～228 ページ
徳蔵きみ 「衣服の文様について(2)—慶長小袖と寛文文様を中心として—」 『茨城
大学教育学部紀要』 第 25 号 茨城大学教育学部 1975 年 151～158 ページ
藤木悦子 「桃山小袖から慶長小袖へ—その美意識の変遷—」 『福岡女子短期大
学紀要』 34 号 福岡国際大学・福岡女子短期大学 1987 年 12～30 ページ
山内まみ・片岸博子 「慶長小袖に関する一考察」 『日本服飾学会誌』 第 5 号
1986 年 3～10 ページ
丸山伸彦 「近世前期小袖意匠の系譜—寛文小袖に至る式つの系統」 『国立歴史
民俗博物館研究報告』 第 11 集 国立歴史民俗博物館 1986 年 195～245
ページ
丸山伸彦 「黒綸子地若松紅葉鹿小花文様絞縫小袖」 『國華』 第 1422 号 朝

日新聞出版 2014 年 46～51 ページ
山辺知行 「桃山・江戸期の文様の變遷」『美術と工藝』第2巻第4號 宝雲
舎 1947 年 17～21 ページ
山辺知行 「小袖染織における 地と文様について」『MUSEUM』188 号 東京
国立博物館 1966 年 24～28 ページ

【染織・服飾研究史に関する研究論文・書籍】

小山弓弦葉 「染織文化史の夢と嘘—言説された／描かれた 染織のオーセンティシ
ティ」『美術フォーラム 21』6 号 128～135 ページ 2002 年
小山弓弦葉 『「辻が花」の誕生—〈ことば〉と〈染織技法〉をめぐる文化資源学』東
京大学出版会 2012 年
生川春明 『近世女風俗考』東陽堂 1895 年
森理恵 「「キモノ美人」成立過程についての研究—「日本美術史(染織史)」の形成
と日本画、和装界の動向—」『イメージ&ジェンダー』3 号 2002 年 76～95 ペ
ージ
森理恵 「「女のきもの」は「江戸の美術」か？(特集 日本美術史再考—江戸の美術
はどのように語られてきたか)」『美術フォーラム21』1号 1999 年 110～115 ペ
ージ
和田辰雄 『日本服装史』雄山閣 1933 年

【衣服・服飾・染織全般に関する書籍】

明石染人 『日本染織史』雄山閣 1928 年
明石染人 『染織史考』思文閣出版 1977 年(1927 年版の復刻)
明石染人 『上代日本染織史』思文閣出版 1921 年
泉俊秀 『日本染織商工史』商業研究資料編輯所 1933 年
伊藤赳 『日本服飾史』(日本風俗畫大成 9) 中央美術社 1929 年
今泉定介 『故實叢書 服飾圖解』(初編・後編) 吉川半七 1902 年
江馬務 『歴代風俗写真大観』新文社 1931 年
江馬務 『日本服飾史概要』星野書店 1936 年
江馬務 『日本風俗史』地人書館 1941 年
江馬務 『江馬務著書集』中央公論社 1976 年
金子錦二著(編集森川清太郎) 『日本刺繡史』京都刺繡同業組合 1928 年
神坂雪佳 『日本女装』(1～7) 山田直三郎 1906 年
神谷栄子 『日本の美術 12 No.67 小袖』至文堂 1971 年
黒川真頼 校注者前田泰次 『増訂工芸史料』平凡社 1974 年
櫻井秀 『日本服飾史』雄山閣 1924 年
佐藤泰子 『日本服装史』建帛社 1992 年
高田俊男 『服装の歴史』中央公論新社 2005 年
高橋健自 『日本服飾史論』大鐙閣 1923 年
高橋健自 『服飾装沿革図』関原勝三郎 1923 年
高橋健自 『歴世服飾図説(上・下)』聚精堂書店 1929 年
長崎巖 『日本の染織 4 小袖』京都書院美術双書 1993 年
長崎巖 『きものと裂のことば案内』小学館 2005 年
永島信子 『日本衣服史』芸艸堂 1933 年
野口安左衛門 『友禅の変遷』野口安左衛門商店 1926 年
堀越すみ 『資料日本衣服裁縫史』雄山閣出版 1968 年
増田美子 『日本衣服史』吉川弘文館 2010 年

丸山伸彦 『江戸のきものと衣生活』 小学館 2007 年
 丸山伸彦 『江戸モードの誕生 文様の流行とスター絵師』 角川学芸出版 2008 年
 丸山伸彦 『産地別すぐわかる染め・織りの見分け方』 東京美術 2002 年
 森理恵 『桃山・江戸のファッションリーダー』 塙書房 2007 年
 森川六太郎 『日本衣服史』 献文社 1925 年
 横川公子・河原由紀子・堀修 『服飾表現の位相』 昭和堂 1992 年
 横川公子 『叢書・近代日本のデザイン 39 染織図案変遷史』(原作は織田萌) ゆまに書房 2012 年
 横川公子 『叢書・近代日本のデザイン 40 近代友禅史』(原作は村上文芽) ゆまに書房 2013 年
 吉川観方 『日本風俗大画集』 マリア書房 1935 年
 和田辰雄 『日本服装史』 雄山閣 1933 年
 渡辺素舟 『日本服飾美術史』(上・下) 雄山閣 1973 年

【染織コレクターに関する研究論文・書籍】

今井むつ子 『刺繍 岸本景春』 京都書院 1980 年
 藤慶之 「京都染織工芸の 20 世紀 刺繍を芸術まで高めた岸本景春とその系譜」『月刊染織 α』 254 号 染織と生活社 2002 年 50～55 ページ
 丸山伸彦 「近代の造形としての小袖屏風」『野村コレクション 小袖屏風』 国立歴史民俗博物館 1992 年 161～182 ページ
 丸山伸彦 「近世きもの万華鏡—小袖屏風展」 国立歴史民俗博物館 『近世きもの万華鏡—小袖屏風展』 1994 年 13～23 ページ
 丸山伸彦 「古美術の巨匠 野村正治郎の軌跡」『月刊染織 α』 223 号 染織と生活社 1999 年 44～49 ページ
 丸山伸彦 「小袖意匠に学ぶ「野口コレクション」の美」『美しいキモノ』 No.247 ハースト婦人画報社 2014 年 172～173 ページ

【その他研究論文】

河上繁樹 「近現代における染織文化財の価値」 山野英嗣編『東西文化の磁場』 国書刊行会 2013 年
 坂口さとこ 「京都美術協会雑誌に見る明治期・大正期の京都における光琳派について」『デザイン理論』 46 号 2005 年 37～50 ページ
 清水恵美子 「「日本美術史」研究の源流：岡倉覚三(特集 日本美術史はいかにしてつくられたか)」『美術フォーラム 21』 28 号 2013 年 53～58 ページ
 中井淳史 「集古の伝統 尚古の系譜—日本歴史考古学の近代」『日本語・日本文化』 31 号 大阪外語大学日本語日本文化センター 2005 年
 花房美紀 「雁金屋関連資料『衣裳図案帳』における人名の特定について—小袖意匠との関係から—」『人間文化研究科年報(奈良女子大学紀要)』 17 号 2001 年 496～486 ページ
 馬場まみ 「東福門院御用雁金屋注文帳にみる小袖に関する一考察—地色黒紅の中心に」『風俗史学』 17 号 2001 年 25～38 ページ
 廣田孝 「竹内栖鳳の絵画論」『美学』201 号 2000 年 37～46 ページ
 平光睦子 「京都図案会の活動と理念—明治期京都の染織図案」『服飾文化学会誌』 12 号 2011 年 71～80 ページ
 平光睦子 「明治期の美術工芸論における「嗜好」と「流行」—京都論壇での展開から—」 待兼山論叢 39 号 2005 年 1～23 ページ

- 松尾芳樹 「京都市立美術工芸学校及び同絵画専門学校校友会と校友会について」『京都市立芸術大学美術学部 研究紀要』35号 1990年
- 森理恵 「雁金屋『慶長7年御染地之帳』にみる衣服の性別」『風俗史学』9号 1999年 19～35 ページ
- 山田由希代 「近代京都における絵画と織物工芸との関係」『美学』219号 美学会 2004年 28～41 ページ
- 山辺知行・藤原スミ子 対談 「染織工芸の伝統をたずねて」『家庭科教育』第35巻 10号家庭教育社 1961年 14～28 ページ

【書籍】

- 青山清吉 『骨董集』(1～4) 鴈金屋 発刊年不詳
- 岡田満 『京都画壇周辺 加藤一雄著作集』用美社 1984年
- 九鬼隆一 『明治美術会ニ於ケル演説』平田純一郎 1893年
- 佐藤道信 『明治国家と近代美術 ―美の政治学―』吉川弘文館 1999年
- 昭和女子大学近代文学研究室 『近代文学研究叢書』第十一巻 1959年
- 竹居明男 『『日出新聞』記者金子静江と明治の京都―明治二十一年古美術調査報道記事を中心に―』芸艸堂 2013年
- 橘高乙一 『九鬼男爵日本美術論』橘高乙一? 1908年
- 塚本瑞代 『雁金屋御画帳の研究』中央公論美術出版 2011年
- 久富貢 『アーネスト・フランシスコ・フェノロサ:東洋美術との出会い』中央公論美術出版 1980年
- 村形明子 『アーネスト・F・フェノロサ文書集成 翻刻・翻訳と研究(上)』京都大学学術出版会 2000年

謝辞

私は平成7年(1995)、販売職として旧(株)松坂屋に入社し、配属されたのが松坂屋美術館とマツザカヤホールを運営する文化事業でした。入社後、働きながら、学芸員の資格を取り、その仕事を徐々に覚えていきました。美術展覧会の企画構築などに関わることができる学芸員と資格を持つだけの自分の違いを知る機会すらなく過ごしていました。

平成20年(2008)、長らく非公開であった松坂屋コレクション(当時は、松坂屋京都染織参考館の所蔵する染織品)が「小袖 江戸のオートクチュール」展で公開されることになりましたが、私は展覧会に関わることはありませんでした。その際、展覧会の目玉として「慶長小袖」の「染分綸子地御所車花鳥文様繡箔小袖」が出品され、監修をされた武蔵大学教授丸山伸彦先生に史料担当者が社内で伝えられてきた淀殿所用の小袖と展覧会図録などの作品解説に記載することを望み、丸山先生は困惑されていたのを傍観していました。平成22年(2010)、松坂屋京都染織参考館は閉鎖し、収蔵されていた染織品は松坂屋創業の地名古屋へ移管されました。その際、名古屋市博物館の学芸員と文化学園大学内の文化ファッション研究機構へ応募した研究課題が採択され、私は初めて研究をする機会を得たことで学識者や研究者の方々と交流する機会を持てるようになりました。平成23年(2011)、「染分綸子地御所車花鳥文様繡箔小袖」が、重要文化財に指定された際、社内で伝えられた淀殿所用ということに対し、学識者や研究者から「これは「慶長小袖」ということに価値があり、淀殿ということにより品位がなくなるので二度と叫びたくない」とご助言をいただきました。長らく伝えられてきたことが、品位がないといわれたことは大きな衝撃でした。

そのような学識者からのご指摘や、お尋ねに対し、本来の学芸員のあるべき姿である研究者ではなかった私は、「わからないことがわからない」という現実を知る日々でした。松坂屋コレクションに関する展覧会構築にも関わらず、大変みじめで、松坂屋美術館学芸員という立場から離れることも考えていました。悩み苦しむ中、通信制の本学家政学研究科家政学専攻(修士課程)のことを知り、受験し、佐々井啓先生にご指導をお引きうけいただいたのが研究者としての私と本研究の始まりでした。

修士課程では、前に述べた衝撃の解明をしたく「慶長小袖」の言葉のはじまりを研究し、今まで論じられてこなかった旧蔵者を見出すことができました。この旧蔵者については学会で発表をした際、座長をしてくださった関西学院大学教授の河上繁樹先生に新しいこととしてご紹介いただく機会に恵まれました。それだけでなく、今回の私の論文において重要な先行研究として挙げた東京国立博物館の小山弓弦葉さん、国立歴史民俗博物館の澤田和人さんの研究をご紹介いただけたことは本研究の大きな前進につながりました。また、切畑健先生にも多くのご助言をいただきました。第2章の「地無」と「繡箔」は切畑先生からのご助言で修士・博士と通して挑んだテーマでした。修士課程2年次に被服専攻で開講された武蔵大学の丸山伸彦先生の授業を履修し、先生に再会できたことも研究の深化につながり、大変有難いことでした。修士論文発表会では、博士課程での課題にご助言くださいました高増雅子先生に感謝いたします。

博士課程に進み、2年間は増子富美先生の研究室に在籍し、武蔵大学の丸山伸彦先生にご指

導いただきました。丸山先生は学界の一人者で、大変お忙しい中、調査にも同行くださり、私の研究に様々な観点からご指導くださいました。今回、本研究の核にした明治時代の染織・服飾研究史は丸山先生のご指導の中で見出したテーマでした。論文審査では副査をお引き受けくださり、今後の研究についてもご助言くださいました。そして、増子先生は、学務部長というお忙しい立場でありながら、常に研究についてのアドバイスをくださいました。3 年次に進級する際、主査の森理恵先生の研究室にうつり、博士論文を執筆いたしました。森先生は、執筆に関し、精度の高い論文にする重要性をご指導くださり、いつも長い時間を割いてくださいました。本論文審査で、副査をお引き受けくださった細川幸一先生、大塚美智子先生にも大変お世話になりました。修士課程の頃より細川先生には、家政学の視点での研究の重要性をご教示いただき、視点をかえた調査で新たなことを見出すことができました。大塚先生からは、被服学の科学的な視点からご助言くださいました。細川先生と大塚先生からご教示いただいた生活科学や科学的な検証も検討する視点を持てるよう、今後自己研鑽にはげみたいと思います。このように、多くの先生に支えられながら本論文を書き上げることができました。先生方、本当にありがとうございました。

人間生活学研究科の事務担当の志満津好美さんと稲垣雅美さんに何度となく、助けていただきました。博士課程の孤独さからいつも救ってくださいました。ありがとうございました。

博士課程に入学した年から、東京国立博物館の小山弓弦葉さんから科学研究費事業「日本染織コレクションの形成とその美術史的価値観の確立に関する研究」に研究協力者として参加させていただく機会をいただきました。小山さんからは多くの調査や発表の機会やご助言をいただきました。小山さんとメンバーの皆様にも御礼申し上げます。

最後に、修士課程へ入学してからの 5 年半、会社では学業の為の休暇取得のためのシフト調整に職場の皆さまに助けていただきました。また、科学研究費事業における調査などで、メンバーが少ない中ニューヨークなどに出張させていただきました。この活動は歴代の私のすべての上司が外部からいただいた機会を受けることができるようにしてくださったからと感謝しております。松坂屋や旧松坂屋京都染織参考館が所有していた文献などの資料の検索には、史料担当の菊池満雄さんと加藤恵美さんには何度も助けていただきました。職場の皆さま、本当にありがとうございました。

今後は、研究環境の確保に努力していきたいと思います。私には、近くに松坂屋コレクションという研究対象はあるものの、研究環境が現状はありません。しかし、私が、博士の学位を取得したことで、研究をすることに価値があることと認めていただだけ、研究を進めることができるようさらに努力していきたいと思います。研究を進めることは長い間、大切に受け継がれてきた松坂屋コレクションの価値を高める唯一の方法であり、この研究は自分にしかできないことなので、自信をもって進んでいければと思います。そのことこそが、今までお世話になった先生方、研究仲間、そして今まで勤務させていただいている(株)大丸松坂屋百貨店、今までのすべての上司、同僚、仕事でお世話になったすべての方への恩返しだと信じ、これからも染織品とかかわりながら、染織・服飾研究を続けていけるよう頑張っていきたいと思います。

2018 年 9 月

荘加 直子